

---

# 紋様師

こんこん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紋様師

### 【Nコード】

N5670S

### 【作者名】

こんこん

### 【あらすじ】

かみこみ あか

鵜三鶯は、高校2年生の17歳。そんな彼には他者を圧倒できるだけの力があつた。それは古武道であり、殺人技術であつたが、裏の世界の仕事をするにはそれだけの実力がなければダメだつた。

表は高校生、裏では、弱者を食い物にする悪者に天罰を下す組織に属す一員であつた。

そんなある日、三鶯の組織に少女からの依頼があるのだが、普通ではない依頼内容に困惑する。

そして依頼を断ろうと組織のメンバーが約束の場所へ出向くのだが、

・

少女こと朱雀識那すざくしきなは、三翳に出会い自らを護るように依頼する。

少女の持つ不可思議な能力は紋様師と呼ばれる者が使える能力だった。

紋様師とは・・・それについて語る識那はその力を・・・自らの過去を話す。

それから三翳と識那は紋様師なる集団と出会い、戦いの場へと必然的に誘われることとなる。

## 1話

しんと静まり返った住宅街の中を暗躍するかのように数人の影がちらちらと動き回っていた。季節は秋を向かえ、虫の音がうるさく響き渡るがそんな声を起きて聞いているものはほとんどいない。

時刻は午前二時、皆が就寝の真っ最中という時の出来事であったが、一つの家庭が不幸の対象に選ばれる。金持ちとも言えない普通の一軒家であったが、音も無く進入してきた者たちは迷うことなく金目の物ではなく目的の人物を探していた。

暗闇の中だというのにそいつはまるで見えているかのように家中を無駄な動作をすることなく動き回る。事前の下調べもあったのだろうか、真っ先に向かったのは二階の一室だった。

長い廊下を一足一足時間を掛けて歩く。まるで心臓の音でも聞こえてきそうだった。一つの部屋の前に立つと大きく深呼吸をしていた。それから起こしてはなるまいとゆっくり慎重にドアのノブに手をかけドアを開く。そして金具の離れる音も無くスムーズに開かれたその先を見ると侵入者ははっと目を見開いた。

誰もいない。

寝ているはずのベッドには目的の人物はおらず、もぬけの殻になっていた。視線を窓に移すとひらひらとカーテンが風で揺れていた。

まさか…

そう思うが早いか、窓に向かって駆け出しその先を覗くと侵入者

の予想は的中していた。

屋根と地面に微かに見える無数に点在する足跡が全てを物語っていたのだ。

「くそ！」

声を殺していたのに思わず出てしまう。慌ててその家から飛び出すとその痕跡を追うかのように闇の中を走っていった。

「ふわわわわあああ……」

大きなあくびをしながらかささぎ三鶯は学校に向かって歩いていった。高校二年生になる彼はごくごく普通の高校生であった。成績も普通、運動神経も普通、対人関係も普通とおそらく同窓会の日には誰だっけこいつという存在になりかねない人間の一人だった。

彼は容姿も普通だった。飛びぬけてカッコイイという訳でもなくどこにでもいそうな感じの顔立ちであった。薄い眼鏡を掛けていたが、その奥の目つきは穏やかで不良とは遠縁の存在で寧ろからまれる方であった。

やる気も見られない風貌に学校の女子も大して気にはしなかった。だから色恋沙汰においても縁は皆無に等しかった。

彼の通う学校は県下でも上でも下でもない普通の県立の高等学校で、瀧田東高校という。

瀧田というのはここの地名である。瀧田には東西南北の高校が存在して、その一つがこの高校だった。生徒数六百人、一学年六クラスそれほど人数が密集していない学校で校風も自由な感じだった。バイトも大丈夫。身だしなみもそれほど乱れていなければある程度黙認していたのだ。

成績もそれほど悪くない高校だけに奇抜な格好をする者もあからさまな不良たちもいないので教師と生徒での見えない自由の境界線が存在していたのだ。そんな中で三鬚はいつも一人だった。人間関係というものがわずらわしいというのもあったのだろう。極力友達を意図的に作らなかつたのだ。自らは何も話さず、自発的に集団に入らなければそれは可能である。だから一定の距離を置く事で周囲の人間は三鬚のことを近寄りがたい存在だと認識してしまったのだ。

それはそれで三鬚にとってはありがたいことで、自分の居心地の良い場所を確保することができた。波風立たない穏やかな雰囲気。誰も自分の領域を侵すことなく程よい会話を済ませる。

## 2話

昼食も常に一人で屋上へ上がってパンをかじるがそれは孤独という訳でなく至福の一時であった。青空の下で心地よい風に吹かれながら見晴らしの良い場所で取る食事はそうそう経験できるものではないと思っていたのだ。

屋上には三髯の他にも数人の生徒の姿が見られ、いろんな談笑を交わしながら昼食をとっていた。

「おい…今日の新聞読んだか？また出たらしいな」

「出た？何が？」

「コレだよ、コレ！」

二人の生徒が新聞を囲んで盛り上がっていた。読んでいる新聞は全国紙の三面記事だった。書いてあることは、昨日リフォーム業者が夜間襲撃にあい数人が病院送りになったという過激な内容だった。しかしこれは単純な襲撃ではない。なぜなら手に刃物を持っていた従業員五人がぶちのめされ、会社の極秘書類がご丁寧に見えやすいところに張り出してあったのだ。だから警察が通報を受けて踏み込んだ時にまず驚いたのは、その書類の中身であった。

その書類内容は大量の顧客名簿と改ざんされた設計図、偽装された構造計算書などであった。分かりやすく言うと、この会社は悪徳リフォーム業者であった。

カモになりやすい顧客に大量の電話、訪問、勧誘を繰り返し、依頼を受けると実際の額の三分の一にも満たないコストで工事が行われていた。

既に数十件の依頼を受け何千万という金を稼いでいたのだが、工事の内容に伴って数件の被害届も出ていた。しかしそれを同じ系統の弁護士の力やら理不尽な暴力によってねじ伏せてきた。

それが全て明るみに出してしまったので、新聞記事も襲撃された業者の方を可哀想な被害者というのではなく、寧ろ加害者よりも悪者に書いていた。

「最近多いよな…悪人ばかり狙った犯罪…でもよ。いいんじゃないか？警察が介入できていない悪徳業者が次々にぼこぼこにされるんだぜ、いやあーすつきりするだろ？」

「そうだな。世の中悪いやつが金ばかり稼いで、捕まらないってことがたくさんあるからな…ったく警察も何やってるんだらうな。訳の分からない奴に先越されてよ」

「確たる証拠がなきゃ礼状も出せないんだろ？」

「そんなもんかねえ…しかし…まあ…俺もこの襲撃事件起こした奴を応援するよ」

「当然だな…」

そんな会話をよそに三觜は黙々とパンを口に運び、パックの牛乳をストローですする。

すると服装を崩して着こなす不良を気取った同級生が三人同じ場所にやってきた。そして三觜を見るなり声を上げた。



「ん…三觜か…つたく…お前いつつも一人だな」

「こいつは一人が好きなんだよ」

「へー…変わってんな」

三觜は別に気にする事のなく黙々と食事を続け、パツクの牛乳をストローですすっていた。そんな素振りを見て、気にいらなかったのかそいつらはからかいたくなった。

「おい！お前もこつちこないか？」

笑いが混じる誘いに三觜も自分がからかわれていることを知った。しかし彼は自然体を貫き通した。

「いや…いいよ。俺、もう行くし…」

そんな答えを望んでいない三人はそこで三觜をほっとくはずもなくしつこく声を掛けた。

「ならさあ…ジュース買ってきてくれねえか？」

「お…いいなあ…俺も俺も…」

「そうだな、三人分買ってこいよ」

そんな会話に三觜は足を止めた。

「炭酸系とお茶とスポドリな！」

命令形の口調で明らかに見下している発言ともとれた。しかし三觥はその要求に素直に従ったのだ。

「ああ…分かったよ…」

そのまま言われるがままに頼まれた飲み物を急いで買ってきてと三人の前に差し出した。

「ありがとよ…金は…ああ…悪い…今財布ないわ…後で返すからよ」

そんな明らかに返す気のない会話をされたが、それでも三觥は怒らなかった。けろつとした表情で、それなら仕方ないなとすぐに諦めていた。

三觥はそのまま屋上を後にしたが、そんな三觥の対応を三人は笑っていた。

「くくく…あいつ…びびってたな…」

「ああいうタイプは押しに弱いんだよ。命令されるとつい条件反射のように動く。勢いに任せてキレてみたところで迫力もないだろうしな…」

「それが分かっているから初めから諦めているんだろ？」

「違ういな…ははっ…また今度も使ってやろうぜ」

三觥がそんな弱い存在と決めつけて、三人は自分達が優位な立場にいると思っていた。しかし現に三觥は誰に反発する訳でもなく自己主張をする訳でもないの、いいようにあしらわれていたのだ。

揉め事を嫌っているかのようにも思えるが、断れないとも思える  
対応の仕方で皆がいいように扱っていたのだ。そして当の本人は感  
情を露にすることもなくその日その日を平穩に過ごしていた。

### 3話

三鬚は高校生でありながらも一人暮らしをしていた。つい数年前までは祖父と暮らしていたのだが、長く患っていた病によって急にこの世を去ったことが原因でもあった。

二人で住んでいた家はそれなりに広く、古風な一軒屋であった。祖父は骨董集めが好きで価値の分からないものが家の倉庫にはごろごろしていた。

「まったく…爺さんも物集めるのはいいけど掃除するのが大変なんだよなあ…」

それが口癖のように三鬚は、学校から帰ると掃除、洗濯に追われていた。そんな毎日だったが三鬚の一日はそこで終わらない。

家の電話が大きな音で三度鳴る。受話器に手を伸ばそうかとするところまで止まった。

そこで三鬚はやれやれと大きなため息を一つすると、残っている大きな仕事の準備をした。

日中は絶対に外さない眼鏡を外し、居間にかけてある黒い服に身を包む。闇と同化するつもりのように上下とも黒かった。黒のロングTシャツに黒ズボン。身支度を簡単に整えると鍵をかけて家を出た。

秋の風は冷たい。もうじき冬が訪れる事を知らせるかのようにくちくと肌を刺した。

そんな中を三鬚は自らのモチベーションを上げながらゆっくりと歩いていく。

片道三十分。都心部から離れていくにつれ街灯の数も減り、景色は住宅街から小高い丘へと変化した。そしてそこには一件の古びた教会があった。

五十年年近くは経っているような風貌で、木造の外壁は所々傷んでペンキがはげていた。

中に灯りはなどなく、壊れそうな大きな扉の前に三觜は立つとドアを一定間隔で四度ノックする。

すると程なくして鍵が開いた。錆び付いて重くきついドアを自ら開け、目に映ったのは教会の奥にある一本の蝋燭の灯りを取り囲む四人の人影だった。まるで秘密結社のような雰囲気漂わせ重苦しい空気が流れていた。

「済まないな…呼び出して」

その中の一人が声を掛けたが、三觜は何も言わずに奥まで進んでいった。それから大きいため息を一つすると自らの疲労感を分かりやすく露にする。

「おいおい…昨日の今日だ。勘弁してくれよ」

その口調は学校でするような穏やかな口調ではなかった。どちらかというと昼間の不良のしていた高圧的な口調に近い。とは言え、そこに嫌味は存在せず純粹な言葉だった。

そこにいるのは四人の男達で、年はばらばらだった。二十代から五十代が集まっているようなものであった。その中の三十代のリーダーである佐々木和人は三觜をなだめながら話した。

「悪いとは思ってる…しかしだ。今朝また依頼が来たんだ」

「依頼だ？」

「ああ…」

三觜はあからさまに嫌悪感をむき出しにして和人の方を見ていた。

「あのなあ。何でもかんでも引き受けてたらきりがないんだぜ。それにだ…間も空けずに次から次と繰り返せば警察だつて大々的に動き出す。警察だけじゃなく今までの事で恨みを買った奴らにだって殺されるかもしれないんだぞ？…たく…目立つ行為を極力避けてきたのにこれじゃあ自爆行為になるだろうが」

ぶつぶつと文句を言いながら四人を睨んだ。しかしその四人も三觜の圧力に怯むことなどしない。いつものことだと思いつながら受け流していた。

ここに集まっているのは、今世間をにぎわせている悪人狩りのメンバーであった。

「お前の意見も最もだ…しかしな。何も今日決行する訳じゃない。今日はミーティングだけだ。そのくらい付き合え」

「おいおい…それなら呼び出すほどのことじゃないだろう…ミーティングなら勝手にやってくれよ。俺はどちらかと言うと頭使うのよりも体を使う方なんだからよ」

「話ぐらい聞け…お前にも関わる仕事かもしれないからな！」

「...だ」

## 4話

そこで三髯を落ち着かせると和人はゆっくりと整理してからぼつりと今日の議題を話す。

「数日前の某高校のぼや騒ぎを知ってるか？」

「は？」

それは二日前に三髯の高校から程近い有名進学校で起こっていた。深夜に職員室からいきなり出火したのだが放火の線が強かった。

「知らねー…」

新聞もニュースも見ていなかった三髯はそっけなく答えた。

「出火はたいしたことないんだがな…どうもいろんな痕跡を消す為だけに焼いたらしいんだ」

「ん？すると…学校に何か盗みに入ったってことか？」

「どうもそうらしい。依頼主の話では、最近テスト関連書類やら、生徒の名簿やらをこっそりと持ち出されている都内の学校が多発しているらしいんだ。今回のようなぼや騒動まで発展したのは初めてらしいがなあ…ほとんどの学校はきつと内部の人間が買収されてやってたんだろう。今の時代個人情報なんてすぐに買える時代だからな…しかしだ。今回のへまでそれが明るみに出ってしまった。きつと下手な奴が盗みだす際に誰かに見つかつたか、分かりやすい痕跡残して慌てたかだろうよ。それでだ。お前の学校が襲われてもおかし



くはないってことなんだよ。」

「それで？犯行の主は何の利益を得るってんだ？」

「ここまで話したらぴんとこいよ。そういった情報を欲しがるのは教育関連で儲ける会社だろ？子どもに掛ける期待が大きい分だけつき込む金も半端じゃないからな」

「ちっ…俺もそんな裕福な家庭に生まれたかったがな」

「それは」愁傷様

「それで？その犯行を重ねている会社ってのは分かってたんだろう？」

「ああ…そこは大丈夫だ。とりあえず情報を集めるだけ集めている。だからだ。お前には学校側から情報を集めてほしい。現役の学生なんだからそれぐらいは噂話とかで聞こえてくるだろ？」

「んー…そのなあ…俺に噂話の期待を求めても無理かも知れないぞ？」

「どうしてだ？」

その質問の問いに答えるのに三觜は頭をかきながら素直に答えた。

「俺…友達いないから」

その一言でその場が静まり返ってしまった。

## 5話

学校内での三觜は本当に影が薄かった。そこにいるのか分からないほどに気配を消して、自らの存在を無かったかのようにしている。その行為は作られているかのように見えるが、自分が疚しいことをしていたから目立つことを避けるための自然的な行為でもあった。

だから誰も寄り付かないし、友達にもなろうとしない。おそらく卒業して数年もすれば存在自体がみんなの頭の中から消えてしまっているだろう。

そんな中で三觜はどうして学校に通っているのか疑問に思ってしまったのだが、彼は彼なりに学校というものを必要としていた。

それは幼少期に起こった不運な事故により記憶と感情が欠落してしまったことが第一にあった。しかしそれは一部であり別に記憶喪失になった訳でもなければ無感情になった訳でもない。生活には困らない程度で済んでいる。

医者は数年の定期診断の後、三觜が理解できる年頃になった時に話した。

「君の場合は部分健忘だ…それほど酷い記憶の欠落も見られないから環境を変えずに今までのように過ごしていれば思い出すこともある。そしてもう一方の感情の欠落…これは詳しい症例がないだけに説明するのに難しいのだが、ミラー細胞が破壊されてしまったことが原因だとも思う。だとすれば…復元を完全にすることは難しいんだが…脳細胞を活性化させれば回復に繋がるとも思う。活性化させることに必要なことは閉鎖的な環境に自分を置かない。人との付き合いが不可欠だ。だからできるだけ多くの人間と関わり刺激を得な

さい」

三觜はそれで治るのか？と質問したが、医者には完全には無理かもしれないと素直な答えを出した。それでも可能性があるならばと三觜は高校に行く事を決めたのだ。

今日も相変わらずぼーっと窓を眺めながら休み時間を過ごしていた。他愛もない会話はあちこちでされていたが、自分には関係ないのでまるで現実感がない。ぽつんと一人残された状態であったのだが、三觜は人がたくさんいるという空間は会話をしなくてもどこか落ち着くと思っていた。

「三觜くん…」

クラスの女子が三人で目の前に現れるとその中の一人が嫌な役目を受けたと言わんばかりの表情で話しかけてきた。

「えっと…今度の体育祭なんだけど…その…種目の希望はある？」

体育委員会の仕事なんだと瞬時に判断したのだが、三觜はどうでもよかった。だからほとんどの人間にありがちな答えしかなかった。

「んん…何でもいいです。なければいいし…」

その答えを聞くなりその女子の口調は少し厳しくなる。

「あっそ…分かったわ。それなら適当に振り分けとくからよろしくね」

女子の目は冷たかった。まるでドンくさいくせに何でもいいなんて凶々しいとも思っていたのだろう。そんな空気を感ずても三鬣は冷静そのものである。感情の欠落にはそういった人の目など気にならなくなる利点もあるのだが、これは元来の性格の方が強かったのかもしれない。

女子がそこから立ち去ると入れ替わりのように昨日絡んできた不良取りの三人組の一人が姿を現した。

## 6話

「三觜：放課後に体育館の倉庫の掃除を頼まれてんだけどよ…悪い、お前さ、代わりにやってくれないか？」

「え？体育館倉庫の掃除？」

「ああ…俺よ、今日は病院に行かなきゃならないんだよ。その事情を話したら誰か代わりの奴連れて来いって言ったからお前のこと話したんだよ。そのよ…昔から患ってる持病があるもんでよ…」

「ああ…そうか…それなら仕方ないな」

三觜は嘘だと分かっていた。しかしそれを敢えて追求することなどしなかった。ここでの揉め事は避けたい。それぐらいなら自分が耐え忍ぶことを選ぼうと決めていたからだ。

するとその男はしめしめとばかりに薄ら笑いを浮かべながらそくささと立ち去った。

それを見ていた他の人たちも気の毒に思いながらも性格的にそういう人間だから仕方のないことだと感じていた。だから誰も助け舟を出すこともしないで黙って流していた。

夕方言われた通りに体育館の倉庫まで歩いていった。夕日が眩しく窓から差し込んできて周囲をオレンジ色に染めていた。テスト週間ということもあり残っている生徒はほとんどいないが、生徒会などに属している人間は雑務に追われて数人がうろついていた。

誰もいない体育館は広く静かで普段とは違う空間のように思われる。三觜はそんな中を歩きながら隅に目をやった。体育館倉庫は館内の左奥にありバレー部やバスケット部、体操部、バトミントン部などの用具がしまわれていた。

いろんな形やサイズの球やマット、器械体操用具が混同している狭い世界で、暗くじめじめしていかび臭い。普段から生徒は雑なしまい方をしているので、種類の違うボールが混ざっていたり、この場所に必要のない靴やらユニフォームやら食べ物の袋かすが落ちていているのだ。重い鉄製の扉を開くと大きなため息しかでなかった。

どこをどうしたらこんな片付け方になるんだ？そう思いながら暗い室内の電気のスイッチに手を伸ばした。

明るくなるとより一層汚さが際立った。乱雑な道具の扱い方をしている奴らがスポーツなんかやるな、と怒りを堪えながらゴミ袋に次々とその場に関係のないゴミを入れていった。

数分でゴミは拾い終わり、残りは用具の整頓だけだとかがんでいた腰を上げると急に扉が閉まる音がした。

ゴコン…

「ん？」

振り返った時にはもう遅かった。背後にあった入り口の扉が何者かに閉められたのだ。しかし三觜が慌てる事はなかった。何故なら内側にもつまみで開錠できる扉だからである。

そう思いながらつまみを見るが施錠した様子がない。だとすれば

ただ閉まっただけなのだろうか？ドアのノブに手をかけて押ししてみるが、僅かに開くだけで完全に開くことはなかった。

それもそのはずで、ドアのノブは外側からワイヤー何かでぐるぐる巻にされて開かないようにされていた。

「はあ……」

ここまでくると笑いたくもなるのだが、三觜は懐から小さいナイフを取り出すと隙間から刃先をすつと出した。するとそこからそのまま一気に振り下ろしてドアノブを押さえつけていた針金の束をまるで紙でも切るかのようにばらばらにしてしまった。

それは腕力ではない。速さと力加減、タイミングである。普通ならケールカッターのようなものを用いなければ切れないものを三觜は何事もなかったかのように切り落としたのだ。

それから体育館倉庫から出ると、そのまま職員室に掃除が終わったことを告げにいった。

すると教師はそんな話は聞いていないと話した。

そこで全てを理解した。声を掛けた男は自分を体育館倉庫に閉じ込めたかっただけなんだと。

くだらない……よくそんな暇なことを思いつく。そんな程度にしか感じなかったが、だからといってその男を潰してやるうなど考えなかった。そのまま何事もなかったかのように家へと帰ったのだ。

## 7話

次の日、三鬚を騙した男は平然と登校してきた三鬚の姿を見て驚いた。

「おっ…お前…昨日は…」

朝まで出られないだろうと思っていただけにその反動は大きい。言葉が上手く出なかったのだ。そんな男とは対照的に三鬚は何も答えなかった。だから男もそれ以上追及しなかった。きっと誰かがすぐに助けたのだろうと勝手に思い込むことにしたからだ。

三鬚はどうでも良かったので、このことを教師に告げることをしなかったのだが、それは男を更に調子に乗らせる結果になると思ってもしなかった。

放課後に呼び出された。

いつものあの三人が揃って三鬚を待ち構えていたのだ。

学校の裏庭に連れて行くと、早速昨日の話しになった。

「昨日の事…知ってて教師に言わなかったのは褒めてやるよ。しかしよ、どうやってあそこから出たんだ？俺は確かに針金でドアを何重にも巻いて力では開けられないようにしたんだ…ニッパーでも落ちたたのかよ？」

その質問にどう答えたらいいのか悩んでいた。流石に小刀で切りましたなんてことを話しても信じられるはずもない。それなら現実



的な答えがいいのだろうかとも思っていた。  
だからたまたま人がそこを通りかかったことにした。

「なるほどな…てめえも運がいいな…わざわざ人がこない時間を選んだってのによ。つたく…面白くもねえ…」

「おい…分かっているとと思うがよ。このこと教師に話すんじゃないぞ！教師だけじゃない、クラスの連中にもだ…」

「おいおい…こいつ友達いないから大丈夫だろ」

「それもそうだな」

はははと三人は嘲り笑っていた。しかし三觜は怒ることをしない。眼鏡の奥の眼光は相変わらず大人しかった。

「でもよ…俺はちょっとむかついたんだぜ…思惑が大きく外れてよ。その代償じゃあないんだがよ…」

男がそつと三觜に近づくと、何の前触れも無くいきなり腹部を殴ったのだ。

「ぐ…」

突き刺さるような衝撃に三觜は地面に両膝をついて悶絶していた。

「受け取っとけよ。はははは！また面白いことしようぜ！なあ！」

見下しながらそんなことを口にして、他の二人を盛り上がっていた。そこで調子に乗ったのか男はついでのような会話でうっかり口

を滑らした。

「さあてと…行くか。あ…そういえばよ、お前ら…渡瀬さんからの件、大丈夫なんだろうな？」

「名簿と今度のテストのことか？」

「ああ…期日が明後日だ。過ぎたら三十万が不意になっちまうぞ…コピーして持って行くだけの簡単な仕事だ。逃したくねえ」

「準備は大丈夫だ…」

「なら今夜にでもさくさくつと決行しちまおうぜ！」

三觜には関係のないことだと話していたのだが、三鷹は悶絶した振りをしながらしつかりと聞いていた。だから三人がそこから立ち去った後にすぐに立ち上がると頭の中を整理していた。

するとあいつらは依頼されて生徒の名簿とテストの問題用紙を盗む気だとすぐに分かった。

さあて…どうするかな？おそらく依頼主というのは、今回の一件の塾の関係者ということか…

三觜は膝についた土ぼこりを手で払いながら今夜どうするか考えていた。

## 8話

三觜は家に帰るとまず和人に連絡をした。

「俺だよ…ああ…例の件で進展があつたんだよ」

「へえ…早いじゃないか。友達もいないお前の情報など全くといっていいほど期待してなかつたんだがなあ…」

「切つてもいいか？」

「嘘だよ。嘘…それで、どうした？」

「うちの学校の屑が今夜学校に盗みに入るらしい。狙いは名簿とテストの問題用紙だ…それでだ…お前に聞きたかったのは、盗ませてから受け渡しまで泳がして元凶を壊滅させるか、それとも捕まえてそいつら拷問でも何でもして犯行の供述させるか、のどちらかと思つてな…」

「おい…お前の提言はどちらにしても物騒だな」

「俺たちはそんな甘い考えじゃないだろ？悪人に人権なんてねえ！」

「分かったよ。でも…二番目の提案は飲めないな。そんなことすればお前が気まずくなるだろう？だから一番目の提案で行こう。他の連中には俺から声を掛けておくから、お前はその連中を見張つてくれ」

「分かったよ…ちなみに聞くけど、その塾の会社の背景には何もな

「いのか？」

「暴力団も絡んでいるな。塾経営意外にも街中で手広くやっているらしいから切っても切れない存在だろうな。しかし表立って出てくることもないはずだから、塾の入ってるビルにはそうそう立ち寄らないだろ？強面の人間がうろろろしていたら子どもや親が怖がつてそれこそ経営悪化に繋がる…」

「ふーん…ならば今回は、楽そうなお仕事だな。素人だけなら締め上げるのも簡単だ」

「そうだな。詳しい話はまた合流してから決めるとして、お前がそいつらの後をつけたら行動開始だ。動き出す時に連絡をくれよな。こっちで塾のビルの方には手を回しておくからよ…」

「さあて…ならばちぼち動くとするか」

電話を切ると、首をぼきぼきと鳴らしながらすぐに外出の準備を整え始めた。

三觜はこの仕事を始めて二年の歳月が経とうとしていたが、慣れるということはなかった。どうしてこの仕事をしているかという点、第一に生活をするための金のためにあっただが、祖父の関係もあった。

祖父は生前から三觜のことを鍛えていた。詳しい理由は一切言わなかった。というよりも一方的すぎて物心着く前からこれが当たり前なんだと感じてもいた。

「両親のいないお前が一人で生きるためにも生きる術を持たなければ

ばならない。私も当然お前よりも先に逝く…誰も守ってなどくれないのだ。そうしなければ生きていけないのだ。それにお前は頭が悪い。だからそれを補う為にも他者にはない力を身に付けるんだ…」

両親を亡くしたばかりの五歳になる三鬚は祖父の正面に正座をさせられ話を聞いていた。

「そういうものなの？」

幼い三鬚が祖父の言葉の意味など分かるはずもない。ただ勢いに押されているだけだった。

「そうだ。そういう世の中だ。この世界を生きていくためにはまず他者に無いものを身に付けるのだ。ぬるま湯の大衆にただただ一緒に浸かっているのならお前に未来などない。当たり前のように生きて様々な分岐点で曖昧な選択しかできずに流されてしまうのだ…いか、生きるということは自らの意思をはっきりと表現できなければ生きてるとは言わん。ただ何となくというのは私の思考に存在しない。だからお前を徹底的に鍛える！弱音を吐いても続ける。止めようと言っても止めさせない！これは譲らん。分かったか！」

恐ろしい形相で自らの精神論を語りきつたのだが、三鬚にはその内容の三分の一も理解できているはずもなく、ただただ怖かったという記憶しかなかった。

しかしそこから地獄のような日々が始まるのだ。

寝食、学校以外の時間のほとんどが心身鍛錬の時間に費やされる。早朝稽古に深夜稽古。そもそも祖父は古武道に精通した猛者だった。幾度となく行われた実戦で体中に刻まれた傷がそれを物語っていた。

自らのことを多くは語らなかつたもののたたずまいでそれが感じ取れる程だった。

だから稽古も手を抜かない。徒手、武器を用いた実戦を幼い三鬚に向かつて本気で叩き込んできたのだ。三鬚は別に他人よりも秀でた運動能力を持っている訳ではない。しかし嫌でも幾度と無く同じことを繰り返されれば自然と身につくものもある。

幼少期に繰り返されることは人体形成が確立されることに大きく影響を与える。だから十代前半での三鬚の動体視力、筋力、判断力はもはや並の人間ではなくなっていたのだ。

銃撃、斬撃、打撃の対応を当たり前のようになし、それらに合わせた追撃も完璧に行えるようになった。

それから祖父は実戦を取り入れるようになり、祖父の知り合いのいわゆる義賊である組織『夜光討伐』に入れさせた。ここにはいろんな専門分野のエキスパートが集まっていた。盗撮、盗聴、鍵空け、銃器、情報収集、体術に秀でた人間が少人数の編成で夜の街を駆け回る。元々は祖父がこの組織を一から鍛え上げていたので三鬚が入る事に異論はなかつた。しかし誰もがこんなに若くて大丈夫なのだろうか？という疑問を拭えなかつた。

だが、それを一蹴するかのように三鬚ははつきりとした実力を見せた。初陣にあたる仕事も傷一つ追う事なくこなしてしまったのだ。簡単な仕事のように思われるが、そうではない。

ヤクザの事務所に捕らわれている人間を奪還する内容なのだが、そこには武器を携帯した人間が五人いた。拳銃であったり、日本刀であったり、短刀であったり…

そこへふらりと現れた中学生。全員は目を丸くしたがすぐに睨みを聞かせて脅しを掛けたのだが、近づいた最初の一人が宙を舞ったことで唐突に開戦の合図が出された。

残りの四人はすぐに武器を手にするのだが、大の男が次々と派手な音と共に轟沈していった。その所要時間は五分と掛からない。だから警察の介入の前に任務をきっちりこなして帰っていた。

その日から三觜は正式に組織の一員となったのだが、二重生活が始まることにもなった。

それと同時に三觜には制限も付け加えられる。力を振るうのは仕事のみと…祖父は何度も話した。

「お前に与えた技術と力は人の目に触れさせる代物ではない。それだ…お前がやっている仕事は合法ではないから、それなりの報復も覚悟しなくてはならない。だからだ…目立つ行為は絶対に避ける」

「分かってるよ…ならさ…学校行かない方がいいんじゃないの？」

「駄目だ。頭の悪いお前には学業も必要だ。それに同年代の人間と接することも大切だ。偏ったことばかりをしていると心が壊れる…」

「そついうものなの？」

「そついうものだ！」

三觜の祖父がそつだと言えば素直に従わなくてはならないことは暗黙の了解である。だから三觜は言われた通りにすることにした。

できるだけ空気になるう。そうすれば誰とも深く関わらなくて済む…

掛けたことのない眼鏡をわざと掛けたのもその日からだった。



## 9話

夜の十二時を回った頃に変化は訪れる。校門に怪しい影がちらついていたのだ。

三觜は缶コーヒーをすすりながら学校が一望できるマンションの屋上にいた。そしてその影が視界に入ると飲みかけの缶コーヒーを投げ捨てた。

下まで降りると自らの姿が見えないように隠れながら様子を伺った。あの連中が学校に入り込んで仕事が終わるまで十分ぐらいだろう。そう分析しながら待つことにした。

すると三觜の予想を裏切ってに三人は五分後に校門から出てきた。実に仕事が速い…慣れてるってことか？しかしこれは敵ながら褒めるべきだろう。そんなことを考えながら三人の背中を確認すると適度な距離を置いて後をつけた。

何度も人目を気にしながら三人は裏路地をそくささと歩くが、逆に挙動不審に見えてしまう。

「下手くそだな…」

三觜は黒いフードの下で呟きながら最後に三人の入ったビルを見るとすぐに連絡を入れた。

「おい…入ったぞ。それで…俺はどうすればいい？」

「そのまま待機で…それからその学生が帰ったら…」

「いつも通りにか？」

「ああ…」

携帯を切ると、三觜はそのままビルの入り口の見える場所に立っていた。

三十分が経過すると三觜は不穏な空気を感じ取った。遅すぎる…依頼の物を渡して金を受け取って帰るだけならそんなに時間は掛からないはずだ。慣れない仕事をした時は長居したくないはずだしな…

そして三觜の勘は当たった。電話が鳴り想定外の出来事を聞かされた。

「やばいな…あの学生さんたち…ちょっと首を突っ込みすぎたみたいだ…」

「はあ？」

「殺されるかもってことだ…」

「おい…物騒な輩は出入りしてないんじゃないかなかったのか？」

「話せば長くなる…時間がない。居場所を教えるから踏み込め！そしてー掃しろ」

「あいよ…」

状況変化はこの仕事に付き物である。臨機応変に対応できてこそ

プロである。だから三觜は即座に行動に移す。携帯とインカムを繋げると走り出す。

指定された場所は五階の奥の事務室。テナントがいろいろ入っているビルだが、塾が入っているビルだけに深夜まで営業しているようなものは入っておらず真っ暗である。

非常階段を駆け上がると、鍵をこじ開けて中に入った。

「つと…奥の事務室か…」

走る速度を緩めることなく長い廊下をただ走る。

「中に五人…拳銃を持つてるな…学生は…部屋の左隅にうずくまってる。死んではいない」

インカムを通して声が聞こえる。

「その五人の立ってる正確な場所を教える」

「窓際に一人、中央のソファーに二人。学生の前に二人だ…」

「部屋の広さは？」

「二十畳つてとこだな…中央にソファーが二組向い合っていて、窓際に大きな机と椅子。右の壁際にロッカーがひとつ…それと…電気のスイッチはドアのすぐ左に三つ並んでる」

インカムから流れる音声から細かい部屋の情報を得ると三觜は事務室前にたどり着く。そしてドアを蹴り上げて突入するのかと思

きや、そつとドアを開くと電気のスイッチに手を伸ばしばちんばちんと電灯の光を落とした。

「うっ？」

ドアの開くのと同時に起きた出来事だったので、その場にいた全員が何が起こったのかを理解することができなかった。

三觜はその隙間を見逃さない。滑り込むように暗闇の部屋に入るとまずは中央の二人を二発で気絶させた。その音に気がつき残りの三人は慌てて動き回るが、三觜は三人の位置を確認済みだった。

足音もなく窓際の男を難なく打ちのめすと、ようやく残りの二人が戦闘態勢に入っていた。しかし唯一の武器を取り出す間に三觜は距離を詰めている。相手は目の前に黒い影が見えたかと思うと既に意識は刈り取られていた。

それら全てが十数秒の中での出来事だったので、きっと五人は誰にやられたのかも理解できなかっただろう。それだけ三觜の攻撃は速く強く、的確であった。

暗闇でこれだけの動きを見せれる技も鍛えられた結果なのだが、三觜には良い思い出がない。

目隠して何度も祖父に襲われる記憶しかないのだ。そんな過去を懐かしんでいると、例の不良たちは声を震わせて何度も同じことを呟いていた。

「勘弁してください…殺さないでください…お願いです…お願いです…」

塞ぎこんだまま泣きながら懇願しており、三觜の顔を見ようともしなかった。

「…こいつらどうする？」

三觜は仲間に聞いた。

「動けるようならそこから逃がしてやれ…もし怪我してるなら通報しとくが…」

「大丈夫だ。そこまでじゃない…」

「なら後は頼むぞ」

そこで通信は途絶えた。三鬚はインカムを外すとポケットに無造作に突っ込み三人に迫る。

「おい！お前ら聞け！」

散々追い込みを掛けられた後だったので、三人は恐怖のあまり声の主の方を見れなかった。ただただ懇願するだけの行為を繰り返すのみだった。それを見かねた三鬚は少し声のトーンを落とし、安心するであろう言葉を掛けた。

「もう大丈夫だ…こいつらは気絶している。だから話だけ聞け！」

その一言で三人の懇願の嵐はぴたりと止み、呼吸をゆっくりとすると自らを落ち着かせ聞く為の姿勢をどうにか整えた。

「お前らが関わったこいつらはもうお終いだ。俺が組織ごとぶっ潰すからな。だから…お前らはこのまま黙って部屋から出る。そして今日のことは忘れるんだ…」

「こ…こいつらは…もう俺達を襲ってはこないんですか？」

「そうだな。だが…いいか、もしも興味本位や自分の保身のために今日のことを少しでも誰かに話してみる。その時は命は保証できない…俺はお前らのことを知ってるんだからなあ…」

そこまで話すと三人はゆっくりと立ち上がり震える膝を必死に押さえながらゆっくりと歩き始めた。その中の一人が振り返ろうとしたが、三鬚はそれを制止するように釘を刺した。

「振り返るな。そのまま行け！それで元の生活に戻るんだな…」

振り返る勇氣などなく三人は三髯の指示に従い部屋を出て行った。ドアが閉まる音を確認すると三髯は肩から力を抜いた。

「はあ… たく… 疲れんなあ…」

背中を壁につけて休んでいると、すぐまたドアが開いた。

「終わったようだな…」

和人が顔を出すと電気をつけた。そして気絶している五人の容態を確認する。

「ん… 流石だな。全員一発でのしたのか？」

「あ？」

「赤外線カメラじゃないから、お前の立ち回りがカメラには映っていないんだよ…」

「そんなのいらねーだろ！」

「まあな… これは俺の趣味だ… 気にするな」

「それで？ どうしてこんなことになったんだ？ あいつら用済みだから始末されそうにでもなったのか？」

「手っ取り早い話がそうだな。過去四件の学校侵入も彼らがやったようだからな」

「どつりで手際がいい訳だ…」

「でも…知りすぎるってことは邪魔にもなるってことだ。三人仲良く自殺に見せかけて殺そうとしていたよ。拳銃突きつけて強制的に遺書らしいものを書かせてたしな…正に逃げ道なしっていう状況だったからお前に頼んだ訳だ…」

「あつそ…ま…大したことはないし、あいつらも結果的に無事だったからいいか。それで、こいつら追い込む手はずは整ったのか？」

「音声も映像もばっちりだ。それと…かき集めた名簿とテストの問題用紙も金庫から拝借してきた…しかも裏帳簿もあつたから国税局からの莫大な追徴課税も覚悟してもらわないとな」

「なら…警察呼んで終わりだな」

「ああ…」

そこまで話すと和人と三鬚はビルから出た。その場で二人は別れたのだが、三鬚は周囲を警戒しながら歩いていた。

この仕事をしているといつ何時と気を抜く事はできないのだ。今まで顔を見られたことはなかったので報復に合うことはないのだが、もしかしたらという可能性も視野にいれていた。

三鬚はどんなに楽な仕事をしても奢ることをしない。それは祖父の教えでもある。人間は必ず初心を忘れる。命の取り合いをしている生活でそれは真つ先に死を意味するのだ。だから生きなければ自らの死を生活の中心に置けと…その言葉の成果もあつてか三鬚は殺気や気配に敏感になったのだ。自然体でもすぐに察することができ



る敏感な体質になってしまったとでもいおうか…常に気を張り巡らす、そんなに不便な生活は送っていなかった。

そのまま何事もなく今日も家路についていた。

## 11話

翌日の新聞にはあの塾のことが大きく書かれていた。三觜がぶちのめした暗闇の人物は、ヤクザと塾経営者だったらしくその名前も出ていた。

ヤクザは拳銃を握ったまま倒れていたのも銃刀法違反という名目で捕まえられたのだろうが、この塾の悪事の証拠を分かりやすく提示していたので、更に建造物侵入罪と窃盗罪、詐欺罪までもが後からくつついた形だった。叩けばホコリが出るような輩ばかりだったのでそれ以外の犯罪でも引つ張りあげられた。

それほど大きくもないヤクザの事務所は尻拭いをしてくれる存在もなくそのまま潰れた。当然塾は閉校。契約金の返金と脱税の追徴課税、更には賠償金やらで経営者は今まで溜め込んだ金を一気に吐き出した。新たな塾の開校を準備していたこともあり資金は底を尽き破産を余儀なくされたのだ。

三觜にとっては悪者が破産しようが、死のうがどうでもいいことだったが、自分の起こした出来事だから自分がへマをしていないのかその点だけは気になっていた。しかしどの記事にも第三者の関係は書かれていない。だから安心していった。

「うーん…」

大きく伸びをしながら平和な日常を再認識しているかのようだった。

そして例の不良たちはというと、昨日のことがよほど衝撃的だった。

たらしく三人共休んでいた。

三觜は空いている三つの席を見て思わず笑いそうになっていた。すると同じクラスの女の子が気乗りのしない感じで話しかけてきた。

「三觜くん…進路希望の紙を集めにきたんだけど…」

さつさと用事を済ませたいといった様子か三觜とあまり関わりあいたくないのか機嫌は良くなかった。それに対して三觜は

「え？ああ…そうなの…えっと…その…ごめん、忘れたみたいなんだ…」

いつものような受け答えをすると、その子はあきれ返った顔であつそ…と一言だけ話していなくなった。

学校での同級生の対応が冷たいのは慣れていた。そもそも同年代の人間と会話することが上手ではないから必然とそうなってしまうのだ。話題を求める年頃の人間の中で、無口で話題性もなくスポーツで秀でることも学業で秀でることもなかったらそれこそ空気の存在である。

でも三觜はそれで良かった。ここでは自分を殺し、力を誇示する事は絶対にしないと決めていたからである。祖父との約束は絶対であり、自分の生き方そのものである。これは刷り込みに近いかもしれないが、祖父のことを信頼しているからの決断でもある。

それから数日は何もなく三觜も安心しながら学生生活を送っていたのだが、不可解な犯罪が巷を賑わすようになってきた。

## 12話

「体の一部を切り取られる？」

「ああ…殺された人間は共通してどこかの部位を切り取られるらしいんだ…」

「おいおい物騒だなーそれにしても切り取ったものどうしてるんだ？」

「さあな。いかれた奴が重ねてる犯行なんだから凡人の俺らが理解できるはずもないだろ…」

「まあ、そうだけどよ…その事件の場所もそう遠くないんだろ？」

「隣町だからな、下手すればこっちまで来るかもな」

「マジかよ…」

そんな会話が聞こえてきたのだが、三觜は聞かない振りをしていった。

最近ニュースで話題になっていたのは三觜たちの起こした事件だったのだが、それが霞んでしまうくらいの事件が起こっていた。

ここ一ヶ月の間に四人の男女が殺され、肉体の一部を切り取られていたのだ。四人に共通点はない。年齢も職業も住んでいる所もばらばらだった。それに物取りのような犯行でもない。

無差別猟奇的殺人と名が付いてしまうくらいなので、犯人の意図

がさっぱり分からない。それに加えて有力な手がかりもなにもないので警察の頭を悩ませた。

人員を増やし、時間を大幅に費やしても結果は何も出ない。そんな状態が続いていた。

そんな中、三觜が家路に着くと、帰りを待っていたかのように電話が三度鳴る。するといつものように身支度を整えて外へと出て行った。

教会にはいつものメンバーが三觜を待っていた。

「仕事か？」

「ああ…しかし今回は断ろうかとも思っているのだが、お前の意見も聞きたくてな」

「へえ…それは珍しいな。それで、どんな依頼なんだ？」

するとその中の一人が新聞を三觜に投げてよこした。

「最近噂になっているこの事件…知ってるな？」

新聞には大きく無差別猟奇殺人と書かれていた。

「ああ…詳しく記事の内容は読んでないが、そんな事件があるのは知ってる。それと今回の依頼の関係があるのか？」

「それがだ…俺も半信半疑なんだが、依頼があつたのはその猟奇殺人に関係のある女からだつた」

「依頼コードを知っている人間なら自動検閲されているから安心だろ？」

三觜の組織に依頼する場合は必ずダミーの電話番号に一度掛けさせられる。そもそもこの仕事は宣伝も広告も出ている訳ではない。都市伝説のようなものでよほど運の良いものでなくてはその番号すら知ることができないのだ。そしてそこからその人物を検閲し何も問題なければ直通の依頼用回線を教えられることになるのだが、今回の依頼は少し違った。

「検閲をすっ飛ばして直で依頼してきた…」

「それって…」

「未だかつてないことなんだが、依頼主は相当切羽詰っていたんだろ？。必死に懇願されたよ…」

「だからって、演技かもしれないし、それで俺らを潰そうとしてるのかもしれないぞ？って言うか、どうやって直通の回線を調べたんだ？」

「そこが分からない。まずは十二桁の暗号を解いて、それから正確な番号を知らなくては掛けられないことになっている。それを二度間違えれば掛けることは不可能になるはずなんだが…」

「その依頼内容はどうなってるんだ？」

「今回の猟奇殺人の犯人のいる場所を教えるから、そいつらを捕まえて…いや殺して欲しいだ…」

「おいおい…ますます胡散臭いな…それなら警察にでも話して捕まえてもらえばいいじゃないか。仲間割れとかなのか？」

「それも話した。しかしだ…警察の力では無理なんだと。個人の犯罪ではなく複数いるらしい…それで、そいつらは強大な力を持っている話だ」

「それなら機動隊か特殊部隊にでも頼むんだな…俺らの請け負える範囲の話じゃないだろ。俺ですらたくさんの重火器をぶっ放されたら勝てる自信なんかないからな」

「へー…謙虚なお前の発言は聞いた事がないな」

「勝てない戦いをするのは馬鹿のすることだ。俺は直情的じゃないからな。無駄死にはご免だ」

「他の奴はどうだ？どうした方がいいと思う？」

残りの三人に意見を求めるが、それぞれが止めた方が良く三鬚と同意見を述べた。そして和人は決断した。

「そうか…なら、やはり断ろう」

それを聞くなり三鬚はイラつきながら話す。

「おい！その前に回線の暗号と番号変えとけよ。闇討ちにでもあったら面倒だ…」

「それは分かってる。もう少しセキュリティを強化するように話

してくる。っていつてもほとんど機械がやってるからな……」

「ならそのエンジニアに言っとけ！今度直通で依頼されたら俺がお前をぼこぼこにしてやるってよ」「よ」

「怖いなあ……分かったよ。俺も対策は練っとく……それならこれで終わりだ」



### 13話

少女は夜の街中を走っていた。

誰か…私を助けて…

まるでそう懇願しているかのようなだった。軽装でいきなり家を出たような格好であったが、そんな走る少女を見ても周囲の人間は何も思わない。背後には誰もいない。追いかけられている訳ではないのだが、走らずにいられなかった。

ネオン街を走り抜けて、立体駐車場を見つけるとその中に入り込んだ。

「ハア…」

秋の夜はそれなりに寒い。手が冷たくなつたので息を吐きかけて両手を暖めた。そして擦り合わせながら歩きながら屋上から夜の街を見た。

点在する街の光を寂しそうな目で眺める。すると先ほどまでくばくばくいていた心臓も、荒々しかった呼吸も落ち着き、頭の中も冷静さを取り戻していた。

十分ぐらいたった頃、少女は思いついたかのようにポケットに手を入れると中には五百円玉が一枚と小さなメモ用紙が一枚入っているだけだった。その五百円を見ながらこれからどうするかを考えていた。

それから立体駐車場を出ると近くの自販機で暖かい紅茶を買った。残り三百八十円となり、そのまま公衆電話を探した。

携帯電話の普及している現代に公衆電話を探すのは難しい。大きな建物に入れば見つけることも可能だが、少女は人目を気にしていたのでそれは避けたかった。だから自らの勘を信じて歩く。

歩く事二十分でそれは見つかった。

細い路地のところに小さな街灯に照らされた電話ボックス。誰もこんなところにあるなど気づきもしないだろう。

ガラスの扉を開くと、中に入り電話の受話器を持ち上げるのだが、背の低い少女には少々大変な作業だった。

それから先ほどの細かくなったお金を手にすると、百円玉を選んで投入口に入れると、メモ用紙を見ながら番号のボタンを押した。

すると電話口から機械で作られた音声が聞こえた。

「十二桁の数字を押してください…」

すると少女はすつと息を吸い込み集中すると迷うことなくその番号を間違えることなく押した。十二桁の番号は認証され、次の段階へと進んだ。

「電話番号を押してください…」

今度少女は十桁の番号を押した。

ブルルルル…ブルルルル…ブルルルル…

発信音が鳴った事で目的の場所への接続が成功した。

「はい…」

少女が掛けた電話を取ったのは『夜光討伐』のリーダーである和人だった。

「お願い！猟奇殺人事件をしている連中を殺して！」

相手の言葉にかぶさる様に少女は叫んだ。

「ちよつと…待ってください。落ち着いてもう少し分かりやすく話してください」

「今事件になっっている殺人事件は…ただの異常者の犯罪じゃないの。被害が拡大する前に…あいつらをみんな殺して。居場所は後で教えるから…簡単なことですよ！」

少女は切羽詰ったように話を切り出してしまったので、和人はまず落ち着かせる事に専念していた。そうしている間にも百円分の通話時間はなくなり追加のお金を入れていた。残り二百八十円。

「内部からの情報提供なら警察に連絡してみてもいいかがです？」

「あんた馬鹿？それができてればとつくにしてるわよ！できないから頼んでいるんですよ。それに私は内部の人間じゃないわ、狙われている側よ。あんた達の組織は世間で裁けない悪者を自分達のやり方で裁くって聞いているわ…だからあいつらも全員殺してよ」

「あの…断っておきますが我々は殺戮集団ではない。制裁を加えることを第一に考えています。だから皆殺しっていうのは…ちよつと…」

「報酬ならいくらでも払うわ。あなた達の要求の額ね…だからお願い。私の依頼を聞いて」

また百円がなくなった。残り百八十円。

その時、話している電話とは別に和人の携帯が鳴った。

「ちよつと失礼…」

少女との会話を保留にすると、携帯電話に出る。

「何だ？取り込み中だ…」

「和人さん…今電話している相手ですけど…こっちの検閲サイドですつ飛ばして直通で掛けてるっす…」

「え？」

「これはあり得ない出来事でもあるんっす…半日ごとに変わる十二桁の暗号を解読して正式な直通番号を割り出すのは物凄い確率っす…内部のスパイがいるのなら納得もいきませんがそれでも無理っす…その時に正確な暗号を聞かなくては…これは俺の協力なしには無理なことでもあるんっすよ」

「なら…この電話の主は…」

「どう考えても普通じゃないっす。気をつけてください。俺らを罠に掛けようとする存在かもしれないっす…」

そこまで告げられると保留にしていた電話を見てどのように対応しているのか悩んでいた。

「分かったよ…最大限の警戒はする。お前も電話の発信元からどうにか探ってくれ」

思いつく精一杯の言葉を口にすると、保留にしていた電話の相手に対して身構えるような姿勢で話しかけた。

「すみません…ちょっと立て込んでいました…それで先ほどの話ですが…」

「時間がないの！依頼を受けてよ！」

最後の百円を入れて残り八十円となった。

「お気持ちは分かりますが、まずは審査にかけないとなりませんので、今すぐにここで返答をすることはできません」

「ふざけないでよ！どうしてそんなまどろっこしいことするの？」

「これは皆さんにいつもお願いしてます。それに大量殺人も絡んでいるとなると、こちらもすぐに受けれる状況ではないんですよ…察してください」

本来ならば審査はここに電話を掛ける前に終了している。そして

和也は電話を受けた時点で依頼を受けるか受けないかを決めていたのだが、前例のないことだけに少し距離を置く事にしたのだ。そうしている間にも少女の最後の百円はなくなり、八十円を焦りながら入っていた。そして流石にこのまま何も進展しない状況はまずいと思ひ、少女は渋々譲歩することにした。

「時間がないって話してるのに…たく…なら、どれだけ待てばいいの？」

「せめて二日下さい。明後日にはあなたに連絡を差し上げます。携帯か何かお持ちで？」

「ないわ…」

「ならお住まいぐらいは…」

「それもないわ…」

明らかに不審人物の返答振りに和人は呆れていた。

「なら…確実に連絡の取れる場所を教えてください。明後日の夜の十二時でいいですから」

怒りもあつたのか口調は強くなっていた。

「なら…新河原駅のそばにあるエターナルビルの立体駐車場の八階、非常階段の前でどう？」

「分かりました…えっと…確認しますが…」

メモを取りながら受け答えをしていると、少女のお金が先に尽きてしまい電話は切れてしまった。

「ん？あれ……」

突然切れた電話に依頼主の身勝手さを再び感じ、不快な思いを抱きながら自分の電話のボタンを強く押して切った。

目的を終えた少女は電話ボックスから出ると、冷めた紅茶を飲みながら歩き出した。

猟奇殺人は終わらない。そもそも猟奇殺人とは世間が決め付けた名前であるのだが、犯罪を行っている者たちからすればそれは猟奇殺人ではなかった。

目的のためにそのような結果になってしまっただけのことで、そうしたいという願望はそこにはないのだ。だから殺すことも躊躇わない。全ては目的のために……

暗躍する殺人鬼は少女の話のように個人で動いてはおらず、複数人が集まってできた組織なのだがその力は未知数だった。統率力と経済力、個々の能力、そして存在そのものを誰にも一切把握させない徹底振りが組織力の強さを表していた。その者たちの体のどこかに、刺青のように小さな紋様があった。法則性はなく、場所もばらばら、形もばらばらだった。

流行で入れている訳でもなければ、組織の証というものではない。自然の痣に近い形だった。

今日も目的のためにとある民家に押し入った。それなりに広い家でどちらかと言えば金持ちに近い。家主は木村謙蔵といい貿易会社の社長をしていた。庭付き百坪の家は和風の作りだが、鍵の作りはしっかりしていた。ピッキングなどでは易々と開けられないような最新式の鍵であった。

そんな嚴重なドアの前に三人の人間が立っていた。

一人は体型が痩せ型でとても若く見える美形の男だった。他には



筋肉の鎧で覆われたような大男と長い髪で顔をかくしている不気味な女が側にいた。

その中の一人である大男がドアノブに手をそつと触れぐりんと動かすと、ノブはまるで金属ではなかったかのようにあっさりと取れて無防備なドアの状態だけになってしまった。

そのことを当たり前のように他の二人は眺めていたが、そのままドアをゆっくりと開くと中へ入った。

暗闇の中では会話は一切ない。しかしそれでも意思の疎通が取れているかのように三人は迷うことなく動いていた。足の運び方はすり足に近く足音もしなかった。気配は完全に消しているので敏感な動物ですらその存在を感じ取れないでいた。

真っ先に向かったのは寝室である。金粉の塗された豪華なふすまの向こう側に目的の人物がいた。ゆっくりと近づき三人が顔を見合わせて合図をしていた。それから一人がそつとふすまの引き手に手を掛けると、

ズボ！

「……！」

刀身が飛び出し手を掛けていた者の衣服をかすった。これには予想もつかなかつたようで少し驚いていた。

そんな不意をつかれたこの一撃はで三人は尻尾を巻いて逃げるかと思いきやそんな様子は微塵もなかった。ふすまを蹴り上げて部屋に入ると、目的の人物と対峙した。

目の前に立っているのは、五十代の男性で鍛え上げられた肉体を持つていることが服を着ていても分かった。手には日本刀を握り締め明らかに三人が侵入したのを予期して身構えていた。

「へえ…凄いな…闇討ちに気がついたの…あんたが初めてかも…」

三人のうちの一人が感心のあまりに軽々しく声を掛けるが、謙蔵は目線を外すことなく殺気を緩めることなく目の前の人物を睨んでいた。

「私の情報収集力を甘く見るなよ…貴様らの存在などとつくに気がついてた。世間を賑わす殺人鬼も蓋を開けてみれば、弱い者しか狙わないただの下種なのだから…」

日本刀を身構えるその姿勢は明らかに素人が握っている訳ではない。有段者かあるいは殺し合いに長けた者の秀囲気そのものであった。

「あんたは確かに強そうだよ。でもさ…俺達なりの配慮もなされてるってことも分かってくれないかな？」

「何だと？」

「苦しまず殺してるってことだよ…せめてもの情けって奴だ。長く続く痛みってのは人を狂わすし、そんなの嫌だろ？弱いからこそ楽に死ぬるっていうこともあるんだよ。寧ろ下手に力を持っていると簡単に死ねないもんなんだよ」

他の二人は何も話さないが、この男だけはよくしゃべっていた。しかも謙蔵が鋭い殺気を先ほどから放っているのにも関わらず平然

とした顔をしていた。

「なら目的も知ってるんだろ？」

「無論……」

「そうか……なら話が早いな。この紋様を持つ者同士戦いは免れない。まあ……昔の人たちはもっと純粋な崇高な戦いを求めていたらしいけど、俺たちはさ……先人とは違って今風だから。考え方も違うってこと……さあて……俺がやってもいいんだけど、あんた刀の使い手なんだから？それならさ……こいつとやりなよ」

そう話して残りの二人のうち一人の人物を指差した。

## 15話

「お…俺か？お…俺が…やっても…いいの…か？」

「ああ…いいさ。卯之助…お前が相応しいからな。神楽…お前は手出しは無用だ」

「はい…」

もう一人の仲間に声を掛けると、指名された大男が前に立つ。

卯之助と呼ばれた人物は言葉を上手く話せなかった。身長二メートル近くある男で、体中は傷だらけ、しかも右腕がなかった。

「気の済むままにやったらいい」

流石にそんな鈍そうで、戦いに不向きな男を指名されたのだから謙蔵は腹が立った。

「こんな男に私が殺されるとも？」

「ああ…あなたは確実に殺されるね」

「どうしてそう言い切れる…」

「俺の目利きは一流だからさ…それにあなたの能力だって分かるよ。あんたは丸裸なんだ。だからだ…」

「くくく…はったりを…せめてもの抵抗か？いいか…紋様の数は数

百種類あるのだ。その能力の全てが解明されたことは未だかつてない…それを知ることが神の領域だ…」

日本刀の切っ先を対戦相手の男に向けると、謙蔵は更に殺意を増幅させた。部屋の中はそんな闘気で溢れていて息苦しくなっていた。しかし三人が動じる事はない。逆に薄ら笑いすら浮かべていたのだ。

「本当に私の能力を見切れているのなら抵抗してみるがいい…だが…無駄だ…そんなのが無意味だと次の瞬間に分かるのだから…」

「へえ…それは面白そうだな」

そこまで話すと謙蔵の姿が目の前から消えた。いや…消えた訳ではなく見えない位の速さで動いたのだ。常人の数倍の動きの速さ…これが謙蔵の隠し持っていた能力であった。視界に捕らえることは無理に等しい。それに加えて謙蔵の刀の技術も相当のもので、この速さで攻撃をされたら直撃は避けられないだろう。

「がああああああ…」

大男は吼えながら戦闘準備を既に整えていた。いつの間にも用意したのか、ないはずの右腕から巨大な鋼鉄製の刃が構築されたのだ。

その大きさは尋常ではなかった。長さは五メートル、幅は最大で一メートルあり、厚さは五十センチもあった。そこから考えると日本刀が爪楊枝のように思えてしまった。

そんな巨大な武器を躊躇することなくまるで旗でも振るかのよう  
に軽がると円を描くように振り回した。普通な刃が相手の体に食い

込むように振るうのだが、卯之助は違った。刀身の側面をぶつけるように振るったのだ。これでは斬ることが目的ではなくぶつけるということが目的になっていた。しかも鈍い動きしかできなさそうな体にも関わらずその攻撃は鋭く速い。風を切る音と共にその場にいる全員に刀身の姿が目映ることはなかった。

そして卯之助のことを良く知る二人はあらかじめ距離を取り避けていたのだが、全く知らない謙蔵はというと…目の前が急に真っ暗になる。

ぐちゃ…

「あ…」

肉が潰れる音を自らの耳で聞いた。それは自らの最大の武器が仇となった結果だ。

速度が速ければ速いほど相手に与える衝撃は大きい。しかし突如目の前に大きな岩が現れたとしたらどうなるだろうか？その速さの衝撃力は全て自分に返ってしまうのだ。

しかも相手も速度を加えていたのだからその衝撃力は数倍にもなる。謙蔵の全身の骨はその衝撃で砕け、肉は熟れたトマトのように潰れた。

卯之助の放った攻撃は見事に謙蔵の力を思考を肉体と共に壊してしまったのだ。小さな虫が同じ大きさの蠅叩きに当たらないというのなら大きさを変えるしかない。面積が相手の速さを補うそんな理論がこの攻撃に集束されていたかのようにだったのだが、効果は絶大だった。謙蔵は立つことすらできなく意識が半分飛んでいた。

「あ……あ……あ……」

かろうじて保ってはいるもののすぐに真っ暗な世界に移動してしまつことは時間の問題であった。だから男はゆっくりと動けない謙蔵の元に近づくと笑いながら声を掛けた。

「ね……だから言ったでしょ。あんたは確実に殺されるって……」

こうして翌日、四人目の犠牲者の名前が新聞に載った。

二日後：和人は少女の依頼を断るために指定された場所へと足を進めていた。断る事は割と慣れてはいたのだが、直接会って断るということは体験したこともなく、切羽詰っていた依頼だけに相手がどのような態度に出るのか予想がつかなかった。とりあえず護身用に携帯している武器もいつもより多めにしていたが、緊張感はずっと付きまとい続けた。

依頼主に騙されるというケースを想定しているだけに会う時間はかなり前に周囲の様子の下調べもしておいた。そして三觜を除いたメンバーにも控えてもらい万全の態勢を整えてはいた。それでも不安感は拭えない。

三觜に頼めば良かったのだろうか：そんなことも頭に浮かんでしまっただが、そんなことを話せば依頼を断るぐらい自分でやれと言われることは目に見えていた。

いろんなことを考えながら歩いていると、和人の足は止まった。目の前には暗闇に聳え立つ古い立体駐車場があった。

「ここか…」

意を決したかのように言葉を吐き出すと、中へ入っていった。

外からの光でかろうじて中の様子が分かるような状況で、和人は非常階段をゆっくりと上っていた。もしもエレベーターを使ったら逃げ道を塞がれる危険性もあるからの選択であった。



万が一の退路も用意はしておいた…無線で仲間が聞いているから自分の身に何かがあったら助けに来てくれる…そう自分に言い聞かせていた。

現にこの駐車場を取り囲むように三觜を除く残り三人のメンバーが周囲の様子を伺っていた。第三者が狙撃できるポイントは全て押さえた。そして周囲の人間が出入りしたことが把握できるようにカメラも設置し、赤外線反応センサーも用意していた。そして和人が襲われてもすぐに対応できるように駐車場内に閃光弾、催涙弾を遠隔操作できるようにしておいたし、追ってこれない退路も確保、更にはこちらからも狙撃できる場所を確保しておいていた。

そんな状況の元、指定された八階の非常階段の入り口にたどりついたのだが、誰もいなかった。

どういうことだ？

自らの腕時計を見直すのだが、針は指定した十二時の二分前を刺していた。普通なら五分前ぐらいに到着していてもいいのだが…和人は警戒心を緩めることなく待った。

二分間の間何も起こらない。それから更に五分が過ぎたが誰も来る事はなかった。

ただの悪戯だったのだろうか？そんなことすら浮かび、帰ることを決意しようとした時、コンクリートの地面を歩く音が遠くから聞こえた。スニーカーでの足の運びというよりは革靴かブーツの音に近かった。

依頼主か？その音を聞いて帰ることを躊躇った和人が見たものは、

少女の姿ではなかった。

「ん？」

暗闇の中から目の前に現れたのは明らかに男性の姿だった。見たこともない人物で、二十代……いや見た目なら十代かもしれない男性の姿。しかもこちらを見て微笑んでいた。

## 17話

それを見て和人の顔色は変わった。騙されたと思ったのだ。そう思うが速いか冷静さを装いながらも身構え、ポケットに忍ばせておいた緊急連絡用発信機のボタンを押した。すると、その男性は、

「仲間には連絡したのか？」

和人の行動を把握しているかのような口ぶりで話しかけてきたから、和人は得体の知れない恐怖を背後に感じる。しかし退路は万全。仲間のバックアップも完璧に整えてあるのだから取り乱す事はしない。

「何の話だ？…というよりもあんたは誰だ？」

無関係な人物を演じることで様子を伺う事にしたが、相手はそれを一笑する。

「くくく…知らない振りか？…まあいい…だが…俺の目を見て明らかに同様しただろ？これは全く知らない人間の反応じゃない…俺は目が良いんだ。瞳孔の変化と肉体の緊張…それに短い間にいろんなことを考えていた。気配が下がるような感じ…それが全て体の表面上に出ていた…知らない人間に遭遇したのならこんなにも露骨にいろんな情報を俺には提供はしないんだよ」

「…」

沈黙を試してみたが、これ以上は隠すことも無理だと判断したのか逆に質問した。

「分かったよ…なら簡潔に聞こう…」

「へえ…諦めがいいんだな…まあそれはそれで面倒じゃなくていいんだが…」

「電話の件は…お前がやらせたことか？」

「電話？何のことだ？悪いが…あいつは俺らが追っていたんだ。もう少して所まで迫ったんだが…また寸での所で逃げられたな…」

「なら…お前は…女が電話で話していた…猟奇殺人の犯人ってことか？」

「それは…正解だ」

隠す事もなく堂々と答えた殺人鬼を目の前に和人はごくりと唾を飲んでいた。まさか、電話の話は本当だったのか…あの時は信じられない事だったのに今、その殺人鬼を目の前にして信じる事が出来た。

こいつ…普通じゃない。

肉体が細胞がそれを感知していた。別に殺気を身にまとって現れた訳ではないのだが、あまりにも禍々しい雰囲気を持っていたのだ。

「お前…何者だ？」

和人の声は若干震えていた。

「あの少女は…大事なサンプルなんだよ。さて…何を話していいものか…お前らには何の話か分からないかもしれないが…あいつは紋様の多形保持者なんだよ」

「もんよう…だと？」

そこまで話すと男は態度を変えた。

「おっと…これ以上詳しく話す意味はない。お前の望むように簡潔に話すとすれば、少女を我々が必要としお前らは邪魔だということだ。だとすれば…どのような結末が迎えるかは予測がつくだろうか？」

そんな意味深な言葉で和人は怯まされることはなかった。この状況を打破することを考えていたのだ。

本来なら緊急連絡のスイッチが入られれば、三分も経たずに周囲に何らかのアクションが起こる。狙撃、煙幕、爆発。しかしそれらの全てが三分を過ぎても起こらない。

和人は不測の事態が起こったことを示唆して、自分でどうにかするしかないと思った。

18話

「何かあったのかい？」

男は和人の僅かな動きを見逃さない。

「べ…別に…」

「隠さなくても…お前の考えは手に取るように分かる…」

「…」

「仲間はどうしたんだろう？もしかして何かあったのだろうか？なら…自分でどうにかするしかない…ってところだろ？あ…別に俺は心を読む訳じゃあないからな。人は…いろんな考えを表面上で表し情報を提供してくれるんだ。それでだ…話の続きだが、仲間がどうなったと思う？」

「どつって…」

「お前の予想は正しい。ちょっとでも頭の中を過ぎっただろ？もしかしたら殺されてしまったのではないかと…」

「な…」

「お前らの仕掛けた対策なんて俺たちの前では何の役にも立たない。俺たちは常人とは違うのだから…」

「それは…先ほどの紋様の話と関係があるってことか？」

「ん…おしゃべりはここまでにしておくか。お前もこれからどうなるかは覚悟してるんだろ？」

男の気配が変わる。明らかに和人を殺そうという殺気を放っていた。その威圧感は凄まじく強がっている口調が嘘ではないかのようだった。

まずい…あいつの存在に飲まれて何もできなさそうだ…

自らの体に起こる異変に和人は先のことなど詳しく考えられなかった。しかし動かなければ結果は同じ。

だから意思とは別に体を動かした。いや…動いた。

ここが八階という高さが頭の中にないように側の塀を乗り越えると、普通に飛び降りたのだ。当然確保してあった退路の一つなどではない。和人は分かっていたのだ。元から用意してあった物を使っても絶対に逃げ切る事はできないと。だから用意してない行動を取るしか逃げるための方法はなかった。

しかしそんな予想外の行動は対峙していた男の虚を突く形にもなった。何も出来ずにその姿を見失ったのだ。

宙を舞う和人は一秒に満たない時間の中で生き残るために必死に精神を集中させていた。この高さでもとも地面に落ちたら即死は免れない。運が良くても死を少し先延ばしにできるだけである。

この落ちる速度を半減できれば生き残る可能性はかなり違う。だから和人は腕を外壁に引つ掛けようと試みた。

そのために外壁にできるだけ近く平行に落ちた。腕を伸ばした状態なら衝撃で関節の脱臼は避けられないので肘も曲げ衝撃を和らげようとしていた。そして体験したことのない速度で自らの体が落ちる中で、その無謀な策はどうにか成功していた。

指先が外壁の一部を捉え速度を一瞬緩めた。それを利用して和人は闇雲に足を振ると、右足が外壁に当たり体が地面に垂直だったのに斜めにずれ、側にあつた樹木の枝に絡まりながら滑り落ちる。速度の緩和に続いて衝撃の角度の変化が成せることはそう簡単な事ではない。狙ってやろうと思っても無理である。そんな人間の動体視力では無理に等しいことだが、成功できたのはひとえに和人は運が良かったと言える。

地面がコンクリートにも関わらず、肉体が潰れる音が聞こえることとはなく、擦れる音が響き渡った。

「ぐう…はあ…」

和人の体は地面を滑るようにして数メートル転げまわった。その勢いは相当のものでボールのように何度も体がバウンドしていた。

自分の身に何が起こったのかをはつきりと理解できるはずもなかったが、和人はどうにか生きているということだけは分かった。現に無傷という訳ではない。まともに衝撃を受けた右腕上腕部の骨と肋骨の数本が折れてしまった。幸いだったのは内臓に刺さっていないので動く事はできた。

それから必死に体を起こすとこの場から離れることをした。逃げるなら繁華街の方がいい。そう思ってたか、ネオン街を目指して思うように動かない体を無理やり動かして移動した。



「へえ…やるなあ…まさかそんな行動に出るとはねえ…」

和人の姿を上から見下ろしながら男は拍手でもしてしまいそうな勢いで感心していた。それでも逃がしたことを大した痛手にも感じることもなくまだ挽回の余地があると考えていた。だから余裕の表情のまま側にいた女に静かに命じた。

「仕方ないな…使いたくはないが…神楽…今日はお前の能力を使うとしよう…」

神楽は命じられたことを喜び、「ありがとうございます」と忠誠心を露にするように返答した。

それから数分遅れて三人は和人の後を追った。

少女はまた走っていた。街から遠ざかり迷いそうになるような狭い住宅街の道路を駆け抜ける。

まさか…先回りされていたとは…

そう少女は心の中で呟いていた。

その理由に和人と会う約束の数十分前にあの駐車場を目の前にして妙な違和感を感じていたのだ。どす黒い禍々しい気配がそこに渦巻いているような感じで妙な胸騒ぎが肉体に警告音を鳴らしているかのようなだった。しかしこれは偶然などではない。少女には現に不可思議な能力があるのだ。自らに訪れるであろう危機と死の匂いを敏感にかぎ分けることができるのはそのお陰とも言える。

そしてそんな自らの能力とも呼べるような現象を疑うことはなかった。何故なら実際にこの力で助かったことは何度もあったので信じるに値する程の証明はなされていた。

依頼したあの人には悪い事をした…そう思いながらも自然と浮かび上がった場所へ足を進めていた。生きてきて感じたことのない安心感にも似た者の存在。それは少女の不安を一蹴し、自らを温かく包み込んでくれるような感覚であった。

だからこそ何としてもその人物に出会わなくてはならない。数年にも及ぶ追われる日常に疲れ果てていた。休ませて欲しい…安心が欲しい…普通が欲しい…

そんな一心で生きてきたからこそ墓にでもすがる思いでいっぱいだった。

繁華街を抜けて一時間もすると、頭の中に浮かんだ映像の場所へとたどり着いたのだが、そこは一件の家の前だった。

和人は体を引きずるように歩きながら自分には時間がないと悟っていた。運よく助かった身ではあるが、すぐに追っ手がくることが分かる。

こんな負傷した状態ではあっさりとは拉致されるか、その場で殺されるだろう。だからこそ、それを避けるためにも連絡を取る必要があった。

胸ポケットに入れている携帯を取り出すが、衝撃で割れていて使い物にならなかった。しかし和人はもう一つ緊急用のオリジナル携帯を持っていた。契約を交わさなくても使える携帯なので契約内容から個人情報を探られることもできないし、衝撃、水没、火災あらゆる障害に対応した連絡ツールであり、ワンプッシュで危険信号も発信できた。

和人は人ごみの中に紛れながらも周囲を気にしながら発信履歴を出してよく掛ける相手にカーソルを合わせると発信ボタンを押した。いつもなら三度のコール音が聞こえた時点で切るのだが、今回はそれをやらないで相手が出るまで粘った。

すると電話の主はかったるそうに出た。

「もしもし…」

聞きなれてはいたのだが、その声を聞いただけで和人はどこかほっとしていた。この男なら何とかしてくれる。そんな期待があった

からだ。

「お…俺だ…和人だ…」

電話口でその言葉を聞いただけで三觜は緊迫した。和人が普通に電話を掛けるといふことは危険度が比例する。話だけは聞いていたが実際起こったことは初めてだったので三觜もふざけた態度を取る事はできなかった。

「何があつた？」

つつけんどんに扱う会話ではなく、完全に聞き入れる態勢を整えていた。

「俺を残してみんな死んだ…」

「全員…っておい！どういうことだ！」

「依頼主を巡って不可解なことが起こっている。それに俺らは巻き込まれたんだよ。相手は普通じゃない…もんよう…とか話していたが俺にはさっぱりだが…あの雰囲気は味わったことがない。人じゃないようなものが立っているようだ…」

「おいおい…お前がそんな弱気でどうする。それで、どこにいる？」

「繁華街の噴水の所だが…あいつら追ってきているからここに留まることはできない」

「それなら…いつもの場所で落ち合つか？」

「いや…人のいない場所は避けたい。そうだな…飲み屋街の中のコンビニでどうだ？」

「分かった…なら三十分で行く。それまでに死ぬなよ」

そこまで話すと、三觜はいつもよりも手早く支度を整えてすぐに家を出た。

一方で和人は一箇所に留まるのはまずいと判断し、人ごみの中を歩く事にした。時刻は十二時半を回っていたが、金曜日ということもあり出歩いている人間がいつもより多かった。サラリーマンだったりOLだったり、いろんな服を着飾った若者もたくさんいた。立ち並ぶ店屋の前でも呼び込みをする人間や飲み終わった客などでごった返していた。

そんな人間がたくさんいることで和人はほっとしていた。

流石に相手もこの中で襲い掛かってはこないだろうと…

痛む胸を押さえながらうろつろつしているたくさんの客引きに声を掛けられたが全て無視していた。

大きな笑い声、喧嘩をする声、馬鹿騒ぎをする声、いろんな声が和人の周りにあっただけが急にその雑音が消える。

まるでヘッドホンでロックをがんがんで聴いていたのにぶつと断線したかのようだった。

轟音の中だっただけに静けさが気持ち悪いぐらいに引き立つ。

「え？…」

周囲を見回すと側にいる全ての人間がまるでマネキンのように動かなくなっていた。

灰色の世界がそこにはあった。目に映る全てが灰色：動く者もいなければ音さえしない。重力が変化したかのように体は重く、息苦しい…まるで自分の体ではないような感覚だった。

すると背後からそんな状況の中を悠々と歩く者の姿があった。

## 21話

「き…貴様…」

和人が振り返るとそこにはあの男と二人の人間が立っていた。

「面白いだろ？これは滅多なことじゃ体験できない。お前は貴重な体験をしているんだ。喜んでもいいんだぞ？」

からかう男をよそに和人は金縛りにでもあつたかのように体が動かない。これは男が与える目に見えない圧力のせいである。

「重なり合う世界。そこに踏み込むともう一方の世界は時が止まったかのように見える…しかしだ…実際は時は動いている。何故なら一秒の数万分の一の世界がここには存在するのだからな…分かりやすく話せば結界というものだよ。」

ここにいる神楽は外界と乖離した世界を自由に築き上げられる…そしてこの結果は特定の人物に時間の体験の感じ方の違いを与えるものなんだが、ここで行われたことは外界の人間には被害が及ばない。

「どうだ？凄いだろ？特定範囲はあるものの物理的要因ではこの結果が壊せないということなんだ。爆発だろうが斬撃だろうが…これは抜け出すことが不可能ということともう一つ…俺たちが人外の能力を存分に振るっても被害が出ないってことだ。まあ…難点はこの能力を使っている間は神楽が他のことができないってことなんだがな…」

「…その能力とやらは…お前が話す紋様と関係があるのか？」



「当然：紋様つてのは能力の原動力でもある。体に刻まれた刻印を…西洋の言い方ですれば魔法陣つていうのか？それに見立てて人外の能力を発揮する。その名残が家紋として墓石などに残っているらしいが…何も知らない凡人どもは家紋の意味すら知らずに生きている…実に滑稽だ…くくく…」

男は何も知らない一般人を嘲り笑い、知らないことはいかに罪なのかを自らの感性で語った。その会話を黙って聞いていた和人であったが、どうしてそこまで話すのか、そのことについてきな臭さを感じていた。しかしその疑問は男の次の言葉ですぐに解消された。

「それで…俺がここまで話したつてことは分かっているんだろうな？」

男の目はとても冷酷に見え、かもし出す雰囲気にも変化が現れる。だから和人は察した。自分は殺されるのだと。だから言い訳も命乞いもしなかった。そこには一片の迷いも存在しない。自らこの仕事をやる時から死は受け入れる覚悟だったのだ。目にその全てが宿っていた。

そんな死を受け入れる和人を見て男は感心した。

「へえ…あくまでもプロ意識つて奴か…うん…下手に命乞いをされるよりもこっちの方が逆に清清しくていいな…ただ…その顔…ただ黙って殺されるつて感じじゃないな」

和人の目は死を決めた人間の目ではなかった。寧ろ生き抜くための活気に満ちた目だった。それを男は見抜き黙って眺める。

すると和人は懐にしまっておいた唯一の武器を取り出した。黒く

光るグロック社製の自動式拳銃。口径は九ミリだったがこの距離なら十分致命傷を与えられる。和人の武器を握る手に力が入った。

一方で男はそんな和人を見ても余裕の表情を崩すことはなかった。あくまでも冷静に相手を分析していた。

「おいおい…随分と物騒なものが出てきたな…ま…闇の家業を営むならコレぐらいは当然か。しかしだ…お前に俺を殺せるだけの銃の腕前はあるのか？一撃で仕留めるにはこの頭部を狙わなくてはならないがそれができるのか？」

頭を指差しながら言葉でプレッシャーを与えてきた。そして和人は銃を構えていても向かい合う男の恐怖心が抜けなかった。

「的の大きい上半身を狙ってもいいが、心臓を的確に打ち抜かなくては追撃を許してしまう。さあ…どうする？お前はどの選択をする？」

距離にして三メートル。拳銃で狙うには十分すぎる距離であるが、和人は男の話す通り拳銃の扱いに長けているわけではない。危険な仕事は全て三觜が引き受けていた。あくまでもバックアップにすぎない存在である和人にとって殺し合いというのは未知の領域でもあった。

## 22話

銃口を向けられた男は早く打って来いというような仕草を取る。心臓でも頭部でもいい。引き金を引く事を待ち望んでいた。するとそんな男の雰囲気は飲まれ、じらされ、半ば我を失っていた和人は自らの明確な活路を生み出す事も出来ぬままに引き金を引いた。

射撃の腕など関係なかった。ただ闇雲に弾倉の銃弾が尽きるまで標的に向かって何度も何度も引き金を引く。

だが：男は倒れない。銃弾が肉体に入り込む様子もない。全ての銃弾を打ち切ると蒸気の漂う中で無傷の男が笑っていた。

「どうだ？無駄なことが分かったか？銃弾は俺の体には届かない。その前に全て溶かしてしまった」

和人は驚愕の表情を浮かべ、銃弾を溶かした際に生まれた蒸気に包まれた男を凝視した。

「何をした!」

「お前さあ：俺が普通じゃないことぐらい分かるだろ？俺は紋様師：：代々受け継がれる紋様の特異な能力を体に宿す者だ：：そして能力は：：」

和人を見る目が酷く冷酷なものに変わった。そこに殺気はない。ただ目の前のものを存在を駆逐するためだけの動作。

目を見開き右手を振るう。ただそれだけの動きにも関わらず和人

には次の瞬間に予期せぬ出来事が起こる。

「うああああああああああああああああ！」

叫び声と共に和人の体は燃えた。

真つ赤な炎に包まれ自らの体が一気に燃え上がる。熱いという感覚は通り過ぎていた。全ての細胞が消え失せる感覚…それほどまでにこの炎は高温だった。

目にも止まらない速さで飛ぶ弾丸を空中で溶かす。それだけの高温を簡単に作り上げることなどできようか。

和人は自らの体が消し炭になることをそのまま悟った。

「炎を扱える能力つてのはどのジャンルの世界でも最強…どうだ？それを味わう雑魚の気分は…このまま一気に全てを消してもいいが…つまないだろ？だから！」

ぱちんと指を鳴らす。すると和人に取り巻いていた炎が一気に消え失せる。しかしそこに残されたのは体のほとんどの組織が壊疽してしまつた和人の無残な姿であつた。

男はあえて生かしたのだ。半死の状態で…

和人は呼吸をすることも動くこともままならず倒れていた。

「はっ…はっ…はっ…は…」

短い呼吸音だけで微かに生きていることは分かったが、死を迎え

るのは時間の問題である。男は和人に持つてあと数時間という状況を作り出し喜んでいた。

「そう簡単に殺してはつまらないだろ？死ぬ前に自らの人生をいろいろ考えるつても悪くはない。自分なりに自らの死を納得するか、後悔するかそれは自由だ。しかし不必要に与えられる時間つてのは苦痛以外の何物でもないかもしれないが…」

精神的、肉体的苦痛を与えることを考えた男は、半死の状態の和人を見て微笑んでいた。それでも和人は必死に男に最後まで食らいつく。何もできない…知らない…そんなままでは死ぬ事などできない。そんな執念がそこには宿っていたのかもしれない。

ただれた顔を上げて、焦げた手を震わせ、よく見えない目で男の方を見ながら話す。

「…お…教えて…くれ…お前は…あの…少女を使って…何を…企んでいる？」

喉が焼けてしまっているだけに声をうまく出せなかったが、和人は必死に質問を試みた。

するとどうだろう？今まで頑なに拒んでいた男も和人の死期を察してか硬い口が緩んでしまったのだ。だからすんなりと答えた。

「紋様の多重保持者だからだ…これはとんでもないことなんだ。我々の世界ではあり得ない存在であり未知の存在…そんな彼女から多重保有の仕方を学べば、俺はもっと強くなれる…だから…あいつをばらばらにしてもでも解明してみせる」

それを聞いた和人は回らない頭の中で必死に考えていた。現実世

界にこんなことがあるのか？紋様…異能力…正に漫画の世界だ。だから理解に苦しんでいた。

「そんなことよりもお前がどのくらい生きられるのか心配した方がいいんじゃないのか？…何が悲しくて金にもならない偽善者気取りのこんなくだらない組織を作ったのか理解に苦しむが、結末がこれではお前も後悔しているだろう？もってあと数十分…発見され病院へ搬送されるところで終わりってところか…：…つまらん人生だったな…」

男はその場からゆっくりと立ち去った。そして自らの姿が和人から見えなくなると、世界を現実世界へと切り替えた。すると視界が明るくなり先ほどまで止まっていた人間は動き出した。がやがやと騒がしい声やネオンの光は数分前と何も変わらない。

それから少し間を空けると女性の甲高い叫び声が聞こえる。和人の姿を見て悲鳴をあげたのだ。

和人以外の人間からすると、何もなかった路上に焼け焦げた和人の姿が突如現れたのだから驚くのも無理ない。人間が目の前に空から降ってくるようなものである。

ざわつく繁華街にやじうまも多数現れ、ただでさえ多い人ごみが更に増えていた。そんな中を必死にかき分ける男の姿があった。三觜であった。

待ち合わせていたコンビニから離れていたので、和人の居場所を特定するのに時間が掛かったのだ。

まさか…そんな気持ちでお目当ての和人との対面になったのだが、声が出なかった。

「か……」

和人なのか？いや…そもそも人間か？そんな疑問すら浮かんでしまっただけ、黒こげだった。しかし微かに動いてはいた。

「おい…どうした！」

誰も駆け寄れない中、三觜だけが側まで寄った。そこにいる人間はあくまでも興味本位の傍観者でしかなかった。救急車と警察への通報は済んでいるのだが、こんな黒焦げの状態の人間に手を差し伸べる事を遠慮していたのだ。

三觜は耳元に口を近づけて話す。

「誰にやられた？」

すると和人の唇が微かに動く。それを見た三觜は耳を和人の口に近づけた。

「も…紋様師…だ…あいつら…ふ…普通じゃ…ない…あの…依頼した…し…少女が…やばい…頼む…まも…って…くれ…」

その目だけは力強く心に訴えかけてくるものがあり、上手く話せない言葉の代わりにもなっていた。そんな和人の死に際の懇願を無碍に扱えるほど三觜も非情ではない。

こくりとうなずくと悲しい目を一瞬だけ見せた。

それから和人は早くここを離れるように精一杯に指先を動かして

合図を出した。もしもあの男が側にまだいたら三觜を怪しむに違いない。だから親しい素振りを見せる前に離れて欲しかったのだ。

そのことも十分に分かっていた三觜は平然を装いつつ、さっさと人ごみの中に消えていった。そしてそれから数分後に救急車と警察がその場へ現れたのだが、和人は既に息を引き取っていた。



## 23話

いろんなことを考えながら三觜は家に向かっていった。

紋様師…助けを求めた少女…和人たちを皆殺しにできるほどの力…

未体験の世界に足を踏み入れる気分で、味わった事のない焦燥感にも駆られていた。そんな中でも周囲の気配には敏感にアンテナを張っていた。いつも以上に…

しかし和人の心配の通りの結果にはならず、三觜は無事に家までたどり着いた。

「疲れた…」

目まぐるしい数時間。仮にも先ほどまで仲間だった者の死を見たのも初めてである。

自分の家を見た瞬間に気が緩んでしまったのか、目に見えない疲れがどつと体に襲い掛かっていた。そして玄関のドアをあけようとした瞬間。三觜の指先がびくりと反応した。

誰か…いる。

それを感じ取った瞬間に三觜の警戒レベルは最大値に到達した。ドアの正面に立つ事を止め即座にドアから離れた。一呼吸おいて気持ち落ち着かせると、今度はドアノブに手を掛けて一気にドアを引いた。

だが：何も起こらない。中をそつと覗くとそこに人の姿はなかった。しかし気配はした。視線の先を移し長い廊下の先を見ると部屋の明かりがついているのが分かる。しかも音がしていた。

靴を脱ぐ事をしないでそのまま家の中へ入り、廊下をそつと歩く。  
一足…二足…自分の家でこんなことをしているのが不思議だとも感じた。

音のするのは台所の方だった。居間と台所は繋がっているので、居間から覗けば台所の様子も分かる。そして引き戸が開いていたのでそこからまたそつと中の様子を伺った。

「ん…？」

離れた台所の冷蔵庫の前に人の姿が見える。かなり小さい…女か？

冷蔵庫のドアを開いて中の物を物色していたようで、周りに食いつ散らかしたものが散乱していた。少女は食べる事に夢中で何も気づいていなかった。

それを見て、三觜はほつとするとというか逆に怒りがこみ上げてきて、今までのような慎重さを欠くかのように忍び足ではなく、つかつかと歩いてその人物に近づき、背後に立つと思いきり拳骨を頭に叩き込んだ。

「いったー…！」

すると殴られた人物は頭を押さえて食べかけのハムを口から出していた。

「おい！お前…何してんだよ？人んちで！」

首根っこをつまみ上げ、ぎゃーぎゃー喚く少女を睨んだ。

「しょうがないでしょ…お腹すいてるんだから！っていうか、あんなの家ろくな物ないわね。冷蔵庫の中、ハムとケーキとプリンと饅頭とチョコレートって…どんだけ甘い物好きなのよ！もっとましな物入れときなさいよ！」

「泥棒に人の家の冷蔵庫の悪口を言われる筋合いはない！」

掴んでいた首根っこを離すと、少女は三鬚のすねを蹴った。

「ぐあー！」

予期せぬ出来事に三鬚も痛がった。

「あんた達が依頼を断るからこんなことになるのよ！」

少女のその一言で三鬚の怒る気持ちは失せた。

「お前か…俺らに依頼したっていう少女は…」

「そうよ。門前払い食らったけどね。裏の世界でも最高峰のチームだって聞いたから期待してたんだけど…紋様師の前には何の役にも立たなかったようね…」

「そこまで知ってるのなら、話が早いな。おい…お前の知ってることを全部話せ。お前のせいで何人も人が死んでるのは知ってるだろ？」

すると少女は、それならばまず飯を出せと要求してきた。こんな高飛車な少女の依頼を断りたくなる和人の気持ちも分かったが、今は緊急事態である。そんなことも言ってもらえず、しょうがないから三觜は残った材料で食べれそうな料理を作った。

「食べよ！」

差し出した皿には山盛りの黄金チャーハン。冷凍ご飯と残った野菜、先ほど少女の食べかけのハムも使った。

それを出されるなり、少女はがつがつと食べ始めた。見るからに数日食事を取っていないような感じである。身なりもぼろぼろ……どこをどう歩き回ったら、こんな状態になるのだろうかと三觜は黙々と食べている少女を観察していた。

五分後には三人前近く作ったチャーハンが跡形も無くなっていた。空腹を満たされた少女はとても嬉しそうだった。

それから三觜は熱い煎茶を差し出すと、少女はようやく話す気になった。茶をすすると、ぼそっと口に出す。

## 24話

「まず…自己紹介からするわ。私の名前は朱雀すずね識那しきなよ…まあ…見たら分かるけど学校には行つてないわね」

まるで自虐的に自己紹介をしてきたのだが、三鬚は黙って聞いていた。

「そして…今回の一件に絡んでいる人物なんだけど。宗谷亮悟むねや しょうご…あいつが…私の紋様を執拗に狙っているわ」

具体的な人物の名前が出たことで三鬚は反応し食いついた。

「それは和人たちを殺した奴か？」

「断言はできないわ。でも可能性は大きい。そして…あいつは私の複数紋様が欲しいの」

「複数紋様？何だそれ？」

すると識那はいきなり立ち上がると、上の服を脱いだ。

それには三鬚も驚き、身動きもできない。ただ黙ってその様を見るだけだった。

「見て…」

識那は背中を見せる。するとそこには三個の刺青のような紋様が描かれていた。

「これは…」

「これが紋様よ…紋様一つに一つの能力が宿る。人外の能力…人はそれを超能力とも呼ぶし、奇跡とも呼ぶ…だけど、これは昔人間が皆持っていたものでもある…それが次第に薄れて消えてしまった。人は…文明を手に入れてしまったことで、能力を必要としなくなった。それは退化であると捉える人も多くない…」

「第六感を失った人間ってことか？」

「まあ…分かりやすく話すとね。だけどこんな時代になってもこの能力は必要とされている。何故か分かる？」

「さあ？」

「昔は非科学的なことでも受け入れられていたのに、今は根拠のない物は受け入れられない世の中…だからこそ…こんな非科学的な力がいろいろ役に立つ。例えば…能力で人が殺されれば犯罪を立証できると思う？まず無理でしょう。それを証明するものが何もないのだから…そして人外を超えた能力ってのはそれだけじゃ済まされないの」

「おいおい…まさか核兵器を超えんでも言うんじゃないだろうな」

「匹敵するかもね…」

「はあ？」

「核兵器ってのはあくまでも物理的に最強であるかもしれないけど

…紋様の能力には物理よりも危険な人の精神に関する能力が山のようにあるわ…もしも人の精神を完全に支配できるものがあればそれが地上最強の攻撃だと思う…しかし精神の干渉に関するものは今まで聞いたことがないけどね」

「紋様の話は大体わかったが…その亮梧とかつていうイカレ野郎はお前の複数紋様を使って何をしようとしてるんだ？」

「彼の目的は分からないわ…だけど…複数紋様というものを持っているのは私が初めてらしいの…だから、これを利用することは考えているはず」

「そうか…なら、そいつはお前の存在そのものを必要としているわけだ…しかし…まだ解せないことが一つある」

「え？」

「お前は…どうしてここを探し当てた。俺が何故ここにいると知っていた！」

ひよっとしたら識那の話すことは嘘で畏なのかもしれないという思いもあった。だから解消しなくてはならない疑問点を真っ先に消化する必要があった。

本来ならば対峙した瞬間に聞かなくてはならない質問であったが、周囲の気配が穏やかだったために三觜はあえて先延ばしにしていたのだ。

識那は詰め寄る三觜に怯えることもしない。ただ素直な気持ちで答えるだけだった。

「紋様には能力があるってさっき話したはずよ…私には、予知、探知、分析等の能力があるの…自分に起こる死期は真つ先に感じ取るだから…今日も…自分が殺されることを察して指定された場所には行かなかつた…そしてあなたの家も探知の能力を使えば簡単に探し出すことができたわ…」

「面識のない相手も探し出せるってのか？」

「そうよ…あなたの情報を元に近辺に点在する残留思念の痕跡さえ探し出せばそこからね…」

「うーん…便利かもしれないが…はっきり言って、まあ…気持ち悪い奴だな…」

「うるさいわね！」

識那が拳で殴りかかってきたが三觜はそれを手で受け止め軽く受け流した。



## 25話

「私だってあの人たちに死んで欲しくなんかなかったわ。でも…あの亮梧とかいう奴に目を付けられたらどうしようもないの…紋様師でも最強の部類に入る数少ない紋様を持っているらしいのだから…」

「最強…へえ…」

興味のなさそうな表情をしていたが、内心は多少の興味があった。

「能力の詳しいことは知らないわ。でもね…知られないから最強の証だとも取っている」

「見た奴は死んだってことか…」

「それであなたにお願いなんだけど…私を守って欲しい。できれば、亮梧を殺して欲しいんだけど無理でしょ？それなら人目のつかない場所まででいいから逃がして欲しいの。あいつら…きっと私の使う交通手段は全てチェックしているだろうからこの町から出るだけでも困難なのよ…」

「歩いていけばいいじゃないか…何も馬鹿正直に乗り物を使わなくても…」

「そんな簡単なことができたら苦労はいらないのよ。あいつらは私だけに狙いを定めているんな方法で探し出そうとしている…なら…優秀な追跡者もきつとそこにいるはずよ…だから私の居場所を知られるのも時間の問題。だからあなたに求めるのは一点突破の助けだよ。亮梧とはやりあわない。それ以外の人間ならどうにかなりそう

だからね…」

「あのなあ…それは俺が亮梧以外ならどうにか相手できるってことが条件での発言だが…俺の力はそんな奇人変人を相手にできるか分からないんだぞ？」

「へえ…弱気じゃない。あんたはもっと前向きな性格だと思ったんだけどね…」

「お前な…前向きと勇み足を同じ行為だと思ってないか？相手の力量も分らずに突っ込むのは命知らずのやることだ…」

「あんただって命知らずなことばかりしてきたんでしょ。それなら今回も同じだと思ってよ…報酬は払うわ。望むだけの金額をね…」

「金持つてるならそれを惜しまず使えばいいだろ？自分を守る為によ…それに何でこんなみすぼらしい格好してるんだよ。とても大金持つてる奴のなりじゃない」

「今はないわ。だって慌てて逃げ出してきたから…だから出世払いつてことよ…」

「詐欺かよ…まあ…お前みたいなガキに払えという方が無理だがな」

「あつそ…ならタダで働いてくれる？」

「面倒くさい…どう見ても俺には無理な話だ。警察にでも駆け込んだ方が手っ取り早いと思うがな…」

「警察があてになるならとっくにしてるっての！出来ないからあん

たに頼んでいるんですよ。頭悪いわね…」

「何だと！お前さつきから人のこと馬鹿だと思ってるだろ！ガキのくせに生意気な態度なんだよ。人生の厳しさを拳で教えるぞ！」

「ばつかじゃないの？年は関係ないわよ。だって実際にあんたの脳みそよりも数十倍私の方が賢くできているんだから…大学だつてとつくに終わってるのよ」

「はあ？」

どう見ても小学生高学年か中学生一年生ぐらいにしか見えない識那を見て三鬣はからかうなとばかりに笑った。

「ならば…その新聞取つてよ…」

「あ？これか？」

ごく普通の全国紙であったが、中の株式の欄を開くと、

「さあ…上から順に覚えてみて…銘柄と始値だけでいいから十秒でね。はい、一…二…三…」

いきなり識那のカウントが始まり三鬣も訳がわからないまま会社名と数字を目に入れる。しかし何度見ても頭の中に入るはずもなく十秒の時が過ぎた。

「はい、なら上から言ってみて…」

「え…と…海洋…248、明治…458…あとは…って言うかこん

なの分かるかよ！何だよこれ！」

「じゃあ、今度は私に見せて十秒数えて」

新聞を渡されると渋々広げて識那に見せた。そして十秒数えると、識那は次々に名前と数字を読み上げる。そこに間違いがないか三瞥は確認していたが寸分の狂いもなく的確に全銘柄を答えた。

「これで分かった？あんたの脳みそとの違いがさ……」

「うつせえ……でもよ……そんな頭脳を持つても日本じゃ飛び級は無理だろうが。外国にでもいたのか？」

「まあね……研究施設って話した方がいいかもね。学校も併設されてたからその大学を二年前に卒業したわ」

「お前何歳なんだよ。どう見ても中学生にもぎりぎり見えるかってとこだぞ？」

「嫌ね……女子に年を聞くなんて……」

「ガキが気持ち悪いな……」

「十三歳よ……多分ね……私もそこそこあんまり自信ないけど……」

「はあ？」

「うーーーーーん……悪いけど疲れたからさ……今日はこの辺にしてくれない？歩き通しだったし、お腹いっぱいになって眠くなった……」

そのままごろんとその場に転がると眠ってしまい動かなくなった。時刻を見ると深夜の二時を刺していた。居間に寝るのはどうかとも思ったが、三觜は毛布を持ってくると掛けてやった。

とりあえずストーブもついているから寒くはないだろうと判断し、識那をそこに転がしておくとおくと食べ終わった食器を片付けようとした。

立ち上がり識那の方を見ると、識那の体の緊張は解けて無防備などこにでもいる少女の姿そのものであり、本当に安心した様子で寝ているのが分かった。

「ふんっ……」

そのまま複雑な心境のまま静かに台所に移動するとさっさと片づけを済ませた。

## 26話

次の日、朝早くから三鬚は離れの方にいた。

息が白くなるほど寒い道場内で三鬚は汗をかいていた。まるでシヤドーボクシングをするかのように何かを相手にゆつくりと動く。緩やかな動きの中に鋭さを持たせていたのだが、簡単にできるようなものには見えなかった。

三鬚は幼少から仕込まれた武道の鍛錬を怠ることはしない。毎日の日課であるこの行為も煩わしさを通り越して些細な日課ぐらいの気持ちでしかなかった。

放つ突き of 鋭さも、蹴りの角度も日によって変わる。それを朝一で修正しなくてはならないから動作の確認をゆつくり行い、体に掛ける負担も軽くしておく。一方で筋力の持続をするためのトレーニングは学校が終わってからしていた。

「ふう……」

そんな朝練のような行為を終わらせると、居間に移動した。

するとそこには昨日から爆睡している識那の姿があった。まともな寝ていないせいもあってか全然起きる気配がなかった。だから三鬚も識那の脇をさっさと通り朝ごはんの支度をし始めた。

数分でご飯と味噌汁、焼き魚を手際よく用意し、食卓に並べた。いつも通りの朝食だが、向かいにはいないはずの人間が寝転がっている。

複雑な心境だったが、外の明るい天気を見るとそんなことも忘れて食べ始めた。

食べ終わるのに十分と掛からない。後片付けをさっさと済まして学校に行く準備を整え玄関まで来ると誰かが服を引っ張る…

「ん…」

振り返るとそこには寝起きの識那が立っている。

「なんだ…起きたのかよ…俺はこれから学校に行くからお前はここで留守番してろよ」

そう言い残して出かけようとしたが、識那是ぎゅっと握る手を緩めることをしなかった。

「おい…帰ってから話は聞いてやるっての…」

「駄目…」

「は？」

「今日はここにいて…何か…何か嫌な予感がする」

「それは…その…例の予知能力って奴か？」

「分からない…私の能力ははっきりと見えることもあれば、ぼんやりと見えることもある…だから確実だとは言いがたいわ。でも…この感覚は…」

識那の体は微かではあったが震えていた。目に見えない恐怖を肌で感じているのだ。それを目の当たりにしてしまつと三觜もこれ以上何も言えなかつた。

「分かつたよ…今日は休むよ」

靴を履こうと思つていた足を下げて再び二人で居間に戻つた。

それから三觜は自室に入り制服を脱いで普段着に着替え台所に立つと、起きた識那のために朝食を作つてやつた。

洋食が好みかと勝手に考えた三觜の出した料理は、パンと、スクランブルエッグ、ハム、サラダ、オレンジジュースであつた。すると識那は持ち前の性格を前面に押し出し、

「あれ？これだけ？」

まるで出てくるのが当たり前のような話し方だつた。

「悪かつたな。つていうか嫌なら食つな」

そんな識那の態度にも大分慣れてきたのか、三觜は軽くあしらつた。

識那が朝食を食べ終わると、三鷹に質問した。

「あんたさ…私にいろいろ聞きたい事あるんじゃないの？」

「はあ？」



「いきなり訪問されて、巻き込まれて、説明もままならない内に私寝ちゃったんだよ？まともな頭してたら、いろいろ聞きたいって思うんじゃないの？」

そんな識那の発言に対して、三觜はため息をひとつ大きく吐き出した。

「あのなあ…そんなの言いたければ自分で言うだろうが…別に…こっちは大して気にしてねえよ。厄介ごとには慣れているからな…それにお前みたいなガキを突っついたところまで出てくる物なんてたかがしれてる」

「突つつく？…あんた…ま…まさか私を裸にでもしようって考えてたんじゃないでしょうね！」

その瞬間に三觜の拳骨が識那の頭を捕らえた。

「アホか！ガキに興味はねえ！つていうか…お前この前までランドセル背負ってたんだろ？どっからその発想になるんだよ…つたく…最近のガキはませてやがる…」

「うつさいわね！ランドセルなんか背負ってないわよ。外国にいたって話したでしょ。第一、ガキ、ガキ何なのよ！あんただってまだ子どもでしょ？数年しか変わらないのに大人ぶるの止めてくれる？」

識那はふんぞり返って話したが、三觜はそれを聞くなり識那の頭に両こぶしを添えると、ぐりぐりとこめかみに擦り付けた。

「お・ま・えよりは大人なんだよ。ちつとは年長者を敬えよ！この頭でっかちが…」

「いーいーたーいーいーいー…」

今までの生意気な態度を思い出してか、三鷹のこぶしにもつい力が入ってしまう。そんな痛みから数秒で解放してやると、識那は怒りながら単細胞から始まり、馬鹿、アホと思いつく悪口を三髻に浴びせるように吐き出した。

「くっ…くっ…」

相手は子どもだと自分に言い聞かせながらこぶしを握り締めて我慢していた。

「俺は部屋で適当にやってるから、お前も好きなようにしろ！」

三髻はそのまま居間を出ると自分の部屋へと移動した。識那はといつと膨れ面をしたままぶつぶつ文句を言っていた。

## 27話

「まったくあいつ…ガキのくせに口ばかり一人前ときてやがる…」

自分の部屋の中でも先ほどの識那の態度にイラついていた。そして携帯を取り出すと、学校の電話番号を押していた。

学校では大人しく真面目な性格を貫き通しているのに、ここら辺も抜かりはない。病気で休むという話をする、教師も何の疑いもなく受け入れてくれた。

電話を切ると、今度は別の番号に電話を掛ける。

「IDをどうぞ…」

電話口から聞こえたのは、感情も何もない機械音。自らのIDを口にすると、認識、そのまま回線は別の場所へと転送される。

「はぁーい…太郎っす…用件を手短にどうぞおー…」

気の抜けそうなぐらいの緩い話し方に三觜は更なる怒りがこみ上げた。

「てめえか！このクソエンジニアは！」

感情のままに話したために伝わらない言葉をつい口にした。そのため太郎と名乗った男も困惑し、いたずら電話かと思ってしまった。

「は…はぁ？…あの…誰ですか？間違い電話ではないんですか？」

「間違いじゃねえよ！俺は…鵲三鬣だ」

「え？えと…あの…俺たちの組織の…その…エースとかっていう奴？いやあ…まさかあ…ないって…はははは…」

「てめえ！何勝手に一人で納得してるんだよ。ぶっ飛ばすぞ？」

「じゃあ…本物ってことっすか？」

「じゃなきゃお前なんか電話も掛けたくねえ！あんな甘いセキユリティーで今までやりくりしてたんだからな」

「もしかして…数日前のこと言ってるんっすか？それなら俺は悪くないっすよ。メンバーの誰かから番号の情報が漏れたことを第一に疑った方がいいっす…」

「おいおい…言い訳か？」

「ちよつと待つてくださいって…だって…あれを突破できる人間がいたのなら世界中の強固な電脳世界を自由に行き来できますって…そんなことできる人間いたら、そいつは人間じゃないですって…」

人間じゃない。その言葉で三鬣は冷静になった。識那が複数能力者ということを考えればそれも可能か…そう結論付けることができた。

「ちっ…まあいい…お前もメンバーの端くれだから伝えることがある」

「メンバーの端くれじゃないっす！正式なメンバーっす…俺の活躍で何件かの事件は解決してるんっすから…」

「分かったから、黙って聞け！顔を判別できないぐらいに殴るぞ！」

「は…はいい…」

「昨日、俺以外のメンバーが皆殺しになった…」

その言葉を苦しく吐き出すとゆっくりと状況の説明をした。待ち伏せにあったこと、和人と最後の会話を交わしたこと、識那との出会い。それを話したところで太郎はすぐに信じることもできなかった。

「そ…そんな…和人さんたちを殺せるような人間がこの世に存在するんっすか…三觜さんは確かに最強かもしれないっすけど…和人さんたちもそれに引けを取らないぐらいのスキルを持ってたはずっすよ…並の人間じゃあまず話にならないっす…」

「相手は普通の人間じゃねえ…紋様師だ…」

「何でもいっすよ…殺されたことは変わらないんっすから…だったら俺もやばいっすことっすか？三觜さんも…」

「さあな…あいつら俺らの組織を潰すことが目的って訳でもなさそうだしな。和人から組織のことを聞きだそうとしてもいないからな…」

「なら…その…三觜さんの家にいるっていう女の子が目的ってことっすか？」

「…多分な」

「それで…どうして俺に電話をくれたんっすか？逃げろって警告じやないんっすか？」

「そんなこと言うかよ。このままじゃやられっばなしだ…」

「もしかして…犯人探しするんじゃないでしょうね」

「当然だ…しかも向こうから探してやってくるんじゃない。こつちから先手を取ってやりたいんだよ。相手は不可思議な能力を持つてるらしいから一筋縄じゃいかない。俺一人じゃ敵しいのが現実だ…」

「でも…俺には…機械相手のスキルしかないっすよ。真っ先に殺されまっすって…それに殺し合いに参加するのは嫌っす…三觜さんの世界には踏み込めないっす…」

「アホか！お前もこの組織に入ったなら腹をくくれよ。やばい仕事をしてるんだからそれなりのリスクも伴うんだよ。もし断るなら俺がお前を殺しに行っってやるよ」

「ひいひいひい…まじっすか…勘弁してくださいって…」

「何もしないテめえの結末は二つだ。俺に殺されるか、和人たちを殺した奴らに殺されるか…」

「どちらも殺されるエンドしか残ってないんっすか…バッドじゃないっすか…ハッピーはないんっすか？」

「ハッピーは俺に協力して、そいつらをぶっ飛ばすっていう選択肢に含まれている。そうすることで命を狙われる心配もなければ、すっきりした気持ちになれる」

「ちよつと…それって死ぬ確率のほうが明らかに高くないっすか？」

「お前が協力するのとしないのでは大きく状況が変わるんだよ。時間はない。早く選べよ。このまま電話切るか、協力するか…五秒で決める。はい、五…四…」

「ちよつと…脅しっすよ…それ…」

「三…二…一…」

「分かりました！やりますよ。でも俺にも限界があることは分かっています。欲しいっす。それを飲んでくれるのならいくらでも協力しますよ」

「仕方ねえな。聞くだけ聞いてやるから話せ」

「なら…戦闘の直接参加は遠慮させてください。体を使ったことは苦手なんで…」

「そんなの最初から頭数には入れてないから心配すんな」

「そうっすか…良かったっす…なら…ついでに俺は常時、影ながらサポートする形を取りたいんですがいいっすか？」

「それは…お前とは直接会わずに俺たちだけで動くってことか？」

「ええ…それをお願いしたいんです。その…言いにくいっすけど…」

俺は…極度の対人恐怖症なんっすよ。今までは和人さんだけが…俺が気を許せる唯一の人間だったんで他の人間は…その…自分の領域に踏み込んで欲しくないっすよ…三觜さんに会ったら…どうなるかも想像つかないんっすよ…」

「会うだけでか？お前…変わってんな…でも…まあ…そういうなら…」

三觜は譲歩に応じ、太郎の意見を聞き入れることにした。それを受けて太郎もほっとしたようで話す口調も軽くなる。

「本当っすか？なら安心しました…それさえ守ってくれるのなら、全面的にサポートするっす」

「お前の得意な分野はコンピューター系なんだろ？遠隔操作とかも可能なのか？」

「大丈夫っす…コンピューター制御されているようなところは、このシステムを乗っ取って自由自在っす！」

「ふーん…ある意味お前みたいなのが一番危険な奴なのかも…」

「しょうがないっす。そういう社会になってるんっすから…それで、これからどうするんっすか？まさかいきなり攻め込むとか言わないでしようね」

「情報が少なすぎるからな…だからお前がかき集めるんだよ。断片的に情報が残っているからそこからいろいろ引っ張り出せよ。最近の猟奇殺人もあいつらの仕業だからそっからも何かつかめるだろう」



「わかりました。ならすぐに取り掛かりますが、最低二日は掛かるからそこは許してくださいね」

「しょうがねえな…早くしろよ！」

そして電話を切った。ため息を大きく吐き出すと背後に識那の気配を感じて振り返る。

「何だよ…お前…あっちに行ってるよ。俺はいろいろやることがあるんだからよ」

すると識那の様子が少しおかしいことに気がついた。

「嫌だ…嫌だ…何か…何か…来る…」

瞳孔が大きく開き、小刻みに体が震えていたのだ。

「おい…大丈夫か？」

三觜はそんな識那の身を案じながら神経を研ぎ澄ませていたが、怪しい気配は一切感じられなかった。だから識那の話すことが信じられなかった。しかし相手は不可思議な力を持つ者たちである。識那の発言を全く無視することもできなかった。そうやって悩んでいると、識那はふつと気を失い全身を脱力させたままその場に倒れこんでしまった。

それには三觜も焦った。

「おい！しつかりしろ…」

駆け寄って声を掛けたが反応はなかった。それよりも周囲の安全の確認が先だとも思い、部屋を飛び出して何か変化がないかを調べた。

居間、台所、空き部屋、玄関、庭と比較的大きな場所だけを限定し回ってみたが、これといって何もなし他人の気配も感じられない。

識那の勘違いなのだろうと思いながら部屋に戻ろうとすると、識那に近づくとひとつの気配。

今までは一切感じられなかったのにいきなり現れ出た。

「まさか…」

走って戻ると、そこには信じがたい光景があった。識那が宙に浮いていたのだ。

「む…」

浮いているというよりは見えない誰かが担いでいる形である。

「そこにいるのは誰だ！」

三鷹は見えない相手に向かって叫んでいた。すると識那の体がゆっくりと床に下ろされた。と同時に三鬚は自分に向けられた殺気を感じ取る。

「ちっ…」

見えない人物が三鬚に向かって拳を振るってきたのだ。しかしそれを半身でかわした。

体勢が崩れることはなかった。そのまま殺気を向けた相手に向かって三鬚も構えた。まるで見えていると言わんばかり正確に相手の正面に立っていた。それには相手も驚いたらしくすぐに次の行動に移せなかった。

「透明人間ってか？全く…厄介な能力だな。それにしても…びっくり人間ばかりいそうだな…お前らの組織ってのはよ…」

見えない相手は声を出すことも拒んだ。ただ黙って三觜の会話を聞くだけに徹していた。しかしそんなのは意味がないと三觜は言い切る。

「お前が見えなくてもよ…一度さらけ出した気配で居場所は全部わかるんだよ。今更気配を消してみるか？無理だな…殺気を消して戦える奴などいない。ほらほら…嘘だと思っただけなら掛かってこいよ！見えないからって自分が優位に立ってると勘違いしてる馬鹿に身の程を教えてやるからよ」

三觜は煽るだけ煽った。そうすることで相手に付け入る隙も生まれやすいことを知っていたからだ。そんな三觜の些細な作戦に相手は乗ってしまった。

見えない相手と戦うことなど無理だ。お前こそ身の程を知れ！

頭の中ではそんな風に逆上していた。

更に大きくさらけ出された殺気という気配を三觜ははつきりと感じ取れた。これだけで十分。視覚など必要ない。  
襲い掛かる殺気をそのままぶち壊す。

三觜の側面から襲い掛かった相手の顔面には深々と三觜の固い拳が突き刺さった。

「ぐうはあー！」

初めての声は痛みから発せられる絶叫だった。体が衝撃で浮き上がるとそのまま壁に背中をたたきつけられる音がした。

「な？だから言ったろ？俺に見えないのは関係ないんだよ」

そのまま逃がさないように相手の退路を塞ぐように体の向きを変えた。

「お前にはいろいろ聞きたいことがあるからよ。ちょっと痛いのは覚悟しろよな！」

三觜が自ら殺気を解き放つと、その透明人間は劣勢だとすぐに判断し部屋の窓をぶち破って飛び出した。

「おい！」

これには三觜も予測不能。ただ相手の逃げ去る行為を見守ることにできなかつた。

がらがらと残ったガラスの落ちる音が空しく響いていた。

「あの野郎…人んちのガラス壊しやがって…」

## 29話

一時間ほどで識那は目を覚ました。

「ん…あ…」

目蓋がゆっくりと開かれると三觜の顔が見えた。それを見るなり識那は安心した様子で取り乱すことはなかった。

「あんたがここにいるってことは…撃退したの？」

「まあな…」

「それで…」

識那が見回すと三觜の家でないことが分かった。殺風景なマンションの一室であった。

「あのままあそこにいたらまずいだろ。だから俺が運んだんだよお前を…」

「え？何？まさか…私の体触ったの？」

「触んなきゃ連れて来られないだろうがよ。まったく…重たいっただらないぜ。もう少し痩せろ、この見掛け倒し…」

「くっ…それが年頃の女の子に掛ける言葉あ？普通…大丈夫か？でしょ…」

先ほどまで元気のなかった識那もすっかり元気になっていた。布団から飛び起きると三鬚に掛かっていった。

「わーっだから。落ち着けよ」

「ふん！だつたらもう少し女心を学びなさいよ」

このままでは収集がつかないと思い、とりあえず適当な言葉で識那を落ち着かせると、本題に入った。

「あいつら何者だ？話だけに聞いていたから半信半疑だったけどよ。まともじゃない。透明人間だぞ？SFの世界だろ…」

「だから何度も話したでしょ。それが紋様の能力なんだから。それで、そいつの特徴は？どうやって現れたの？」

「…気配を完全に消せる透明人間ってところか。厄介だぜ…俺も人の気配には敏感なんだけどよ、間近にいなけりゃ気がつかなかったんだからな。まあ…それで気絶していたお前を連れ去ろうとしていた所で俺と鉢合わせって感じだったんだけどよ」

「そんな見えないし気配もない相手をどうやってやっつけたのよ？」

「簡単なことだ。思い切りぶん殴ってやった」

「何その小学生みたいな答え方。アホじゃないの？見えない相手をどうやって殴ったのが知りたいのよ！」

「て…てめえ…」

第二の餌食にしてやるうかと思ったが、識那がこういう性格だというのに慣れてきた自分もいたからすぐに抑えた。

「殺気は隠せないからな…それさえ感じ取れば相手の場所を把握するぐらい簡単だ。小さい頃から何度も目隠しで実戦やらされたからなあ…不測の事態つてのはいつ起こるかわからない。それに対応できるだけの能力をたくさん持ってなければ死ぬぞ！つてのが爺さんの口癖だったからよ。目えつぶって相手を殴るなんてもう慣れてんだよ」

当たり前のように話して見せたが、そんなことできる人間を探してもこの世にいるかどうか分からなかった。だから識那も三觜の計り知れない強さに素直に驚いていた。

しかしそれを表面上に出さないように気をつけていた。

「ん…と…それで…そいつは逃げたの？」

「ああ…追い詰めたんだけどよ。窓破つて逃げやがった。人の家何だと思つてやがるんだよ…ちくしょう…」

「透明の能力…うーん…」

識那は三觜の話の聞きいろんなことを考えていた。

「お前を狙っている奴らの気配…今はどうだ？感じるか？」

「それは大丈夫よ…嫌な感覚もなければ、未来も見えない…」



「そうか…なら…これからどうするかなあ…」

三觜には恐怖心もなければ、緊迫した空気もない。まるで暇な日曜日の計画をどうするか悩んでいるような感じだった。

「俺の知り合いがその怪しい組織を解明するのに二日は掛かると話していた。だから…しばらくは息を潜めるようにしているしかないが…お前は どう思う?」

「それは…あなたに任せるわよ。私はここがどこかも知らないんだからね。って言うか…ここはあなたの持ち物なの?」

「この物件のことを話してるのか?」

「そうよ…どう見たって学生が簡単に持てるような物ではないと思うんだけど」

「別に…お前から見たら驚くようなことでもないだろ?裏の稼業してれば身を隠せる場所を複数持つのは常識だ…契約者名も偽名だしな…だからここを調べるのは難しい…って言ってもよ、あっさり俺の家を調べ上げられたから安心もできないか…」

「いや、十分よ…場所を変えるだけで探すのに時間は掛かるはずだから。それに私にも危険を感じる能力があるし…数日は時間を稼げるはずよ」

その言葉を聞いて三觜はほっとしていたが、油断はできなかつた。まさか透明人間のようなものが本当にこの世に存在するなど知らなかつただけに相手の力量は計り知れないと感じていた。そして今後どうすればいいのか考えたが、良い案など浮かぶはずもなく、とり

あえず太郎の情報だけが頼りでここを動くことは控えようと思った。

「ねえ…食べ物はあるの？」

「なんだよ、もう腹減ったのか？あるのは…まあ…缶詰ばかりだな…」

「缶詰？…テンション下がるわ」

「居候はもう少し謙虚になるもんだ」

そして何も起こらないまま数時間が過ぎ、夜を迎えることになった。昼食と夕食は缶詰と乾麺を使った料理で空腹を満たした。テレビもない部屋で何もないまま過ごす時間は恐ろしく長く感じる。三鬚はそんな中、外の様子を見るために一時間ごとに部屋から出ていたのだが、識那は逆に一度も外の空気を吸うことがなかった。

「あのさ…本とかないの？」

後片付けをしている三鬚に話しかけたが、そんなの見れば分かるだろうとあっさり返した。

「いい加減飽きてきた…」

「我慢しろ。わがままなお前でも今がどんな状況か位分かってるんだろ？」

「そりゃあ…そうだけど…狭い部屋で何もすることがないってのはある意味拷問に近いわね…だからさ…少し話ししようか」

「話し？」

「私ら全然会話ないじゃない。口喧嘩ばかりしてるからさ」

思い返せば出会ってまともな会話をしたことがないなと三觥は考えた。だからかもしれない、ちょっとだけならこいつの相手をしてやろつと抱いたことのない気持ちが芽生えていた。

「三觜は高校に通ってるんだよね。どんな高校？」

「普通の高校だ…進学校でどこにでもあるような大人しい学校だよ」

「それで、三觜はどんな学生なの？どうせ憎まれ口ばかり叩いてみんなに煙たがれているんじゃないの？」

それはお前のことだと、心の中で突っ込んでいた。

「逆だな…目立たない地味な存在だ。誰とも関わらず、距離感を常に取ってる…」

「どうして？」

「俺の仕事を考えれば分かるだろ？下手に誰かと親しくなったりすれば、そいつに迷惑が掛かる。例えば人質に取られてもそいつと深く関わっていなければ対応の仕方もすんなりいくしな…」

「へえ…意外ね。もっと目立つ存在なのかと思っただのに。あくまでもプロ意識を持って生活してるって訳ね。でもさ、つまんなくない？自分の生活そんなに狭くしてさ。それなら学校通わない方がいいとも思うしさ…」

「死んだじいさんの遺言でもあるんだよ。学校から学べることはたくさんあるってなでもよ、俺からすれば何を学んでいるんだか分かってないがな。単調な日常。一人としていない友人。部活に精を出す訳でもなければ、これといった趣味もないんだから。人と合わす

「つてことはできていてもどこか演じている感覚が大きい……」

「三觜は人に心を許していないんだ。そりゃ、こんなひねくれた性格になるわね」

「そういうお前はどうなんだよ。俺からすればお前だって社交性があるとは思えない。誰とも深く関わってこなかったんじゃないのか？」

その言葉に識那は大きく反応し視線を逸らして声のトーンが少し弱くなる。

「……そうかもね。私は三觜とは境遇が違うけど……その……何て言ったらいいのかな？はつきり言つと機械的に学ばされたような感じだったわね」

そこから識那は自らの過去を話し始めた。

「私が生まれたのは……表向きは遺伝工学、裏は紋様の研究施設だった。父親も母親も分からないそんな子ども……分かりやすく言つと試験管ベビー……だから私に愛情を注いでくれる奴なんて誰もいなかったのよ。マニュアルがあるかのように淡々と知識を詰め込まれたわ。お陰で知能は人よりも優れているんだけど……つまらない毎日だったわ。同じような子どもたちばかりだから会話はなし、付き合いもない。一緒に遊ぶこともなければ食事も静かなものよ。互いの考えなんてまるで分からないんだからね……私はそんな生活に飽き飽きしていた。それである日気づいた。自分はこんなこといつまでも続けていていいのか……そう思えるだけ他の人間よりは幸せだったのかもね。あそこは簡単な洗脳なんて当たり前前やってるか」

「お前……」

識那の言葉には重みがあった。自らの境遇を初めて語っていたのだが、明らかに識那を道具のように機械のように扱おうとしている大人の気配を感じた。そこには感情はない。研究過程で死のうが、廃人になるうが構わないといった冷酷な背景も見られた。

「その研究所の目的は、なんだ？おかしいだろ？表ざたになつたらまずい非合法なことばかりやってやがる……」

「紋様の仕組み、能力、その起源と利用方法を解明するための専門施設。政府も関与しているから厄介だね。不都合なことが起こるといくらでもみ消すことができるって訳……やりたい放題よ。そしてその施設を立ち上げた者たちの言い分はこうよ……悪用される前に解明せよ。笑っちゃうわ……非人道的なことをやりまくっておきながら自らは正義のためだと正当化しているんだからねえ……私のように稀に洗脳にも反応しなければ自我が強く芽生えていなければこんなことも思わないんだけど……」

まるでその施設の人間は皆意思を持たない操り人形のようなと言いたそうだった。

「紋様はそれだけ魅力的ってことなんだけど……昔は違つたみたいね。いろんなものをただ純粹に守るために使われていた。人を……村を……国を……そこに無粋な感情を抱く事もなくただ真つ直ぐに未来を信じて……それが……現代になると様変わり。己の欲望のために使うようになつたらしいわね」

「……どういう意味だ？」

「力を悪用する者があなたの仲間を殺した奴らだけど、私のいた施設も国のためにと紋様を利用している…志は違うかもしれないけど、似た者同士つてところよ…欲望に駆られて動いているんだからね…むかつくわ…自分がそんなことに利用されている人間だつて知った時にね…」

識那は三髻に見せる怒りの姿とは別の憎悪を見せた。もしも洗脳が完璧ならこんなことにはならなかっただろう。感情のないロボットのようにならぬ意思を持たない従順な存在のままだったのだからある意味で識那は運が良かったとも言える。

### 31話

「そこまで知っていてどうする気だ？まさか…自分のいた施設を潰すとか言っくんじゃないだろうな…」

「言うわけじゃない。今はそんな大それたことできるとも思っていないわ。とりあえず私を利用しようとしている奴らをどうにかしないとな…」

「…それが現実的だ…ところで…お前はどうかやってそこから抜け出した？嚴重な態勢なんだろ？お前一人の力で抜け出せるとは思えないが…」

「私たちは、研究施設で十二歳まで育てられた後に研究職員の家庭でしばらく過ごすの。そうすることで世間の仕組みを学んだり、隔绝された世界から離れることで新たな能力開花に繋がったりするの。でもね学校には行ったりすることはないから籠の鳥に違いはないけど、施設よりは気分は良かったわ。同じような人間ばかり見なくて済むからね…白衣の間はいい加減見飽きたって感じよ…でも、やってることは場所が変わっても一緒。薬物投与と能力の成長と成果の観察…たまに出かけられるけど高性能のGPSを持たされているからね」

「そこでも逃げるのが困難そうだな…」

「でもね。研究施設のようなカードロックされた嚴重な扉が何層もあるわけじゃないから楽なものよ。あいつらは洗脳は完璧、高性能GPSも持たせているから絶対にここから逃げないと初めから思い込んでいる…」



「例外もいた訳だ…」

「だって…亮梧に襲われる未来が見えたから…強制的にそこから逃れなくてはならなくなつたのよ…でも今となつてはそれがきっかけとなつたから良かったのかもね」

従順な生活の毎日だったので、それを崩すきっかけとなつた亮梧の襲撃には感謝しているようだった。そんな話にどんな顔をしているのか三觜は分からなかった。

「GPSは体に埋め込まれている超薄型だけど逃げる前に自分ではじくり出して無効化したわ…」

「凄いな…だが、それだと研究施設側の人間にも追われているのか？」

「そうなるわねえ…だからじゃないけど…あんた紋様師の能力のような特異体質は兼ね備えてないの？触らず相手を吹き飛ばすとか…鉄をも貫く拳を持っているとか…」

これから起こりうる最悪の状況を想定して、三觜が対処できるかという仮説でも立てたかつたのだろう。だから三觜が人外の能力を持っているにしろどうかという淡い期待もあった。

「急に何だよ…でも…期待に添えられなくて悪いな…俺には相手はどうこうできるような能力はない。だからかもしれないが…自分にある唯一の武器を極めようとしている」

「古風な奴。ちょっとは期待したんだけど、やっぱり違ったのね。」

あんたつてさ…どう見ても独特の雰囲気をかもし出しているじゃない。だからこつちももしかしたらって思うじからさあ」

「勝手な妄想に付き合わされる俺の身にもなってみる。教わらなかつたのか？人を見かけで判断するんじゃないやねえよ。だけだよ…俺…そんなに気配が目立つか？普段は意識して抑えているんだが…」

「はつきり話すと紋様師から見たら異質な存在よ…その場の空気にも歪が生じるような不思議な感じ。でも対峙して初めて分かることもあるから、遠くにいたらまず気配を感じ取ることができないわ。だから…そこは褒めるべきところなのかしら？」

「おいおい…何だよ…それ…こつちは変な意味で悟られてるって言うだけで気持ち悪い上に自己嫌悪に陥りそうなのによ…」

「ま…気にしないで頑張つてよ。この先も危険と隣り合わせなのは分かりきったことなんだからさ。私をしっかりと守ってちょうだいね」

「当てにはしてほしくねえな…何度も話すがお前らのような異質な存在は俺にとつては初体験なんだからよ」

それから数時間の間他愛のない話が続いたが、識那は久しぶりに人との会話ができ嬉しいようだった。表情は穏やかになり度重なる緊張も次第に解れていた。

時刻は夜の十時になった。

三觜は識那に寝るように進めると、近くの探索に出ることにした。敵の気配は感じられないもののじっとしているのは生に合わないのだ。どんな些細なことでもいいから今は情報がほしいから、危険を

承知でも動きたかった。

「さて…」

いつもの軽装な格好に身を包むと、識那に戸締りをさせ緊急の対処法を伝えると部屋を出た。新鮮な冷たい空気が自らの体内に入ると脳内もすっきりとする。三觶の目つきが若干変わる。

### 32話

深夜にも満たないこの時間帯では歩いている人間もまばらにいたのだが、気になることでもなかった。三觜は自分のいた場所を拠点に半径五百メートル圏内を中心に探索する。もしも識那の身に何かあってもすぐに駆けつけられる範囲であり、無理はしないと決めていたのだ。

ただぶらぶら歩いているように見えているが三觜の神経は最高潮に高まっていた。常人の数倍にまで五感を働かせ、周囲の様子が数時間前と違和感がない脳内で照らし合わせてみる。

おかしい気配を感じることもなければ、危険を漂わせる空気もなく穏やかそのものである。

明日には太郎から連絡があるのだろうか？そんな心配を抱きながら同じ歩調で歩いていく。公園の噴水の前まで来ると不意に足を止めてしまった。

公園の中心にある噴水は名所のひとつでもあり、多数の色のライトでアップされちょっとした幻想的な世界を作り出していた。普段はそんなものでセンチメンタルな気分になったりすることはない。しかしこの時は何故かそんな噴水を一瞬眺めてしまったのだ。

気が緩んだ？いや…違う。先ほどまで何も感じなければ、そこには誰もいなかったはずだ。

三觜は背後に嫌な気配を感じ振り返った。

「よっ!」

そいつは笑顔を見せてまるで知人を見つけたかのように三觜に手を振って挨拶をした。しかし紛れもなく初対面である。幼い容姿に大人しそうな性格の持つ主…そんな外面の男であったが、三觜の捕らえたものは、肌で感じたものは違った。三觜は一瞬で理解したのだ。こいつが全ての元凶なのだ…

「てめえ…」

そんな自らの体に訪れた恐怖よりも先に怒りが大きかったのだろう、四肢の動きが鈍るところか飛び出しそうだった。

「お?その顔は俺のこと知ってるって感じだな…それはそれで話が早い…」

そんな三觜とは違い殺気を放つこともせず無防備な状態で亮梧は話しかけてきた。

「識那がこの側に隠れているのは分かってる…それにだ…鵠三觜…お前が匿っていることもなあ…俺たちが紋様師だつてことを知ってるんだろ?ならどうしてここまで探れるかなんて陳腐な質問はするなよ…」

「するかよ…気配だけで十分伝わってる…そんなことよりもよ、和人を殺したのはお前か?宗谷亮梧…」

「へえ…凄いな…俺の名前まで分かるのか?んん…ああそうか…識那から聞いたのか?」

「何でもいい…てめえが和人を殺したんだろ？」

「おいおい…いきなり何だ？その質問は…それに和人？…それ誰だ？」

亮梧はまるで誰の話をしているのか分からないといった様子だった。その背景にはたくさんの人間を殺めている事実があったのだろう。三觜はこの発言でこいつが生粋の殺人者であることを察した。

「殺しすぎだ…いちいち覚えていないって顔か…まあいいさ…」

「おいおい…殺気を垂れ流すなよ…今にも飛び出しそうな勢いだ…悪いがな…今日は気が乗らなくてな。話しだけしに来た。お前にも条件がいいと思うがなあ…」

「殺人鬼が譲歩だと…全く意味が分からねえ…正気じゃないんだから無理やり奪ったらいいだろうが！」

「そうしたいのも山々なんだがよ…紋様師つてのは万能じゃないんだ…能力にだつて使用限界つて奴がある…」

「なら…今のお前は残弾不足つてことか？」

「素直に話すならそうかもな…しかしだ。お前を殺すぐらいは造作でもない。初見で俺の能力を避けた者は存在しないのだから…しかし俺はお前をある意味評価しているんだ」

絶大な自信がそこにはあった。だからであろう、自分の弱点を惜しみなく露呈しても無然とした態度であった。

「鵜三鶯…お前の経歴を調べた…実に面白い…条件さえ合えばこっち側で仕事してほしいんだが…それは無理だろう?」

「おいおい…嫌悪感を明らかにむき出しにしている時点で分かるだろ…」

「くくく…まあそうだな…ちょっと話してみただけだ…それでだ。お前の実力も買ってここは譲歩しようと考えている。お前が素直に識那を差し出すのならお前には一切手出しはしない。そして謝礼もしよう。そうだな…金なら一千万まで出そうか…」

「随分と太っ腹なんだな…一人の人間を引き渡すだけにそこまで払うのか?」

「確かに法外な値段だ…だが…識那にはそれだけの価値があるんだ。どこまで聞いているか知らないが、多重紋様所持者というのはある意味新人類だ…幾人の紋様師を殺してその紋様を奪いはしたが完全なる定着には至らない…その謎を解くためにも彼女の肉体というサンプルが必要なんだ」

「連続猟奇殺人はやはりお前らか…」

「人聞きが悪いな…紋様師同士の戦いは殺人ではない。あくまでも死闘の結果だ…勝者が敗者の持ち物を奪って何が悪い?お前も同業者を幾人も殺しているんだろ?」

「そこは否定しねえよ…だがな…ひとつだけお前と違うことがある」

「何だ?まさか正義のためだと言っんじやないだろうな」

「…言うかよ。あえて言うなら…自らのため…私利私欲のためじゃない…」

「私欲？何を言うかと思えば…そんな曖昧なもの誰が判断するんだ？自己意識に過ぎないものを持ち出して俺を否定する気か？くだらない…三髯…人つてのはどんな行動にも欲が出る。そのどこが悪いんだ…」

「あのなあ…俺が言いたいのは、てめえがそれを当たり前だと思っている所だよ！人の命を背負うこともしなければ、自己嫌悪に陥ることもない…いいか、人の命つてのはそんなに軽くないんだよ！」

「俺に説教をする気か？何を話すかと思えば…実に下らない…どこにでもありふれている薄っぺらい正義感そのものだ…死んだ者のことを考えてどうなる？いいか、殺された者はその時点で生き抜く術を持ち得なかった運命なんだ。自然界を見ても。弱者が食われるのは当然の結果だろうが……とはいえ、そんな話を延々とお前としたところで平行線を辿るだけか。まあいい…お前は俺に従わないという気持ちとその言葉で分かった…これ以上の話は無駄だな」

「おいおい…こっちは始めからそのつもりだよ」

「今日はこのまま引くが…次に出会う時は…覚悟を決めておけ。その自信に溢れた表情が一変するのを楽しみにしている…」

「望むところだよ。でもよお…殺す機会を先延ばしにする奴にそんな結末が迎えられるとは思えないんだよ…お前も非情な殺人鬼の端くれなら自分の状態なんか関係なしに襲い掛かったらどうなんだ？それとも自信がないのか？」



そんな挑発的な一言に亮梧は大人気ないと分かっているにも反応していた。

右腕をさつと振ると、三觜の背後にある噴水の水がパアンという乾いた音と共に蒸発してしまい、蒸気が立ち込めた。自慢の発火の能力を抑えて発動させたのだが、それだけでも威力は十分で数百リットルの水が一瞬で消えてしまった。

「三觜：お前のような口だけの三下は何人も見てきた：強がりをおにするのも相手を見てから言えよ」

初めて殺気らしいものを吐き出すのだが、三觜は怯むことはなかった。相手の目をしっかりと見てそらすことをしない。

「分かりやすいな：お前は、その力のせいで最強が当たり前だと思っっているんだからな。まあいいさ：また数日後に会うんだろ？それまで俺も何か策を練っとくさ：」

これ以上の話はないだろうと思いつつ、三觜は敵に背中を見せるとそのままマンションへと帰っていった。

その場に残された亮梧は湧き上がってしまった怒りを抑えることで必死だった。

「クソガキが：次に会ったら殺してやる」

### 33話

亮梧と初めて対峙した三觜はあくまでも冷静そのものであった。しかし見えない恐怖のような感覚を感じてはいた。それが恐怖なのかどうかははっきりと分からない。言葉では平然を装っていたが気持ちは落ち着かなかった。

だから亮梧と別れた直後、自然と足取りは速くなり識那の身が安全なのかどうかを真っ先に確認したかった。本気の走りをする事など久しぶりである。滅多なことで乱れることのない呼吸が乱れる。そしてマンションの一室に肩で息をしながら戻ると、まずは識那がそこにいるか確認しようとドアノブに手を掛けた。

勢いよくドアを開ける三觜に驚いたのか目を丸くして部屋の中心で眠そうな顔をしながら毛布に包まれている識那の姿があった。

「え?... な... 何?」

数十分前と変わりのない様子を一瞬で把握できたことで三觜の不安は取り除かれた。識那はそんな三觜の態度に違和感を感じた。

「ねえ... 何かあったの?」

ほっとしながらもすぐに次の行動に移った。

「おい... すぐにここ出るぞ」

「はあ?」

「ぐずぐずすんな…もうここがばれてるんだよ」

識那は訳の分からない内に軽装のままマンションから出ると、三觜によって暗闇の中誘導された。三觜は迷うことなく一直線に目的の場所へと向かう。

その際に追っ手や待ち伏せがないかを確認しながら慎重に道を選んでいった。相手は宣戦布告をするぐらいだから普通ならそんな手は使わないとも思うのだが、三觜はそんな常識を信じたりしなかった。

殺し合いの中で不意打ち、だまし討ちなど常套手段であり、それを食らった者はただの正直者の愚か者である。言い訳も二度目も存在しない世界で生きてきたからこそ取る行動なのである。三觜が数日後と口にしたが相手がそれに乗ってくれるか当てにできない。ひよっとしたら数分後に襲い掛かってくるかもしれないのだ。

住宅地が密集し、車が一台分ぐらいしか通れない道を突き進んで行くと、雑草だらけの敷地にぶつかつた。十坪に満たないその敷地には明らかに誰も住んでいないであろう、木造でぼろぼろの小さな平屋があつた。

窓ガラスは割れていて、家自体も若干傾いていた。そんな敷地に三觜は当たり前のように識那を連れて入った。

「これも…あんたの所有の場所なの？」

崩れそうな家を見つめて恐る恐るそんなことを聞いたが、三觜は首を横に振った。

「そんな訳ないだろ…暖が取ればどこでもいいんだよ…ちっ…硬

いなこの扉」

引き戸になっっている扉に鍵などない。長年使われていないからちよつとやさつとでは動かなくなっていた。がたがたと揺らしながら少しずつ開けていく。

「ちよつと…嫌だよ…こんな所…何か出そう…」

「どこでも寝れるような奴がそんなこと言っても説得力ないぜ…つと開いた」

ようやく開いた扉の先にはくもの巣と埃にまみれた1LDKの世界が広がる。しかし暗くてよく見えないから三觜はポケットから懐中電灯を取り出し照らした。

暗闇の中に照らされ現れ出たぼろ屋敷は正にホラー映画そのものでどこかに死体でもあるのではないかと思わせる程だった。それを見た識那は更に寒気を感じていた。

「多少は汚いが…外にあるダンボールでも適当に敷けば寝れるだろ」

「寝れる訳ないじゃない。こんな所にいるぐらいなら外で寝た方がましだつての！無理に屋根つきを希望している訳じゃないんだから」

「アホか…外なんかで寝てみる、真つ先に殺されるか、職務質問されるぞ…こんな時に目立ってどうすんだよ。ここは俺の所有でもないし、誰のものかも分からない。奴らが俺の名前からあのマンションを割り出したのならその危険もないだろ？」

「で…でも…」

「命狙われてる瀬戸際だったのにこれぐらいのことでごちやぐちや言うんじゃない。ったく……」

三觜は転がっている空の火鉢を立て、そこらに落ちている数本の細長い薪を小さく折って入れていった。そして新聞紙も適当に探し出すと、ポケットから出したライターで火をつけた。

「とりあえず暖まっとけ…俺は外に行って使えそうな物持ってくるからよ」

そのまま外に出ると、住宅街のごみ置き場にある新しい感じのダンボールや薪の代わりになるような廃品を持ってきた。

ダンボールを敷物にして、廃品を持っていたナイフで小さくして火鉢の中に入れていった。火はどんどん大きくなり次々と炭を作っていく。暖かさと一緒にその場を明るく照らしているのでどこかほっとさせる気分になった。

さっきまで取り乱していた識那も次第に落ち着きここから出ることは言わなくなった。そして三觜は外に出たついでに買ってきた缶コーヒーを差し出した。

「へえ…気が利くじゃない…」

「百二十円…払え」

「前言撤回…」

そのままコーヒーを口にするとほっと一息ついた。目まぐるしい

一日はまだ終わろうとしていない。だからこそ一瞬でも気の緩む時間  
間が嬉しかった。

### 34話

「和人を殺した奴に会ったよ…」

「まさか…亮梧ってこと？」

「ああ…あのイカレ野郎…殺した人間のことなんか覚えてもいない…すつとぼけていたがあいつが殺したことは間違いない…」

ぎりつと奥歯をかみ締める音が聞こえそうだった。

「自信満々で宣戦布告までして…数日の猶予でも与えたつもりでいる…ふざけやがって」

「亮梧ならね…」

「あ？」

「そこまでの台詞を吐いてもそれが現実になるから許されるわ…」

「どういうことだ？そこまで言うってことは…やはりただの異常者じゃないってことか？」

識那の表情が曇り事実を物語っていることが分かる。

「紋様師には様々な歴史があつて、それも枝分かれしているの…仁義のためにその力を使う者もいれば研究のために使う者…そして無作為に自らの欲を埋めるために使う者…そしてそいつらを裁く者…入り乱れていてどれが正しいかなんて分からないわ…でもね…あい

つはそんな中でも同胞殺しを好んでいたわ。まるで自分の力を試すかのようにな……」

「まさか…同じ紋様師を殺していたのか？」

「そうよ。紋様師の中でもブラックリストに載るほどの人数をね…でもあいつの能力を止められる者がいなかった…来る者来る者を全て消し炭に変えた…」

「そうか…やはり発火能力者か…和人も全身火傷を負って死んだからな……」

「至近距離なら数千度の熱を出せる。あいつの視界に入ったものが全てが標準となる…でたらめな能力よ。昔は…炎は神聖なものとして扱われることが多くその能力を神儀やら民の祭典のために使われたはずなのに…能力の使い手によってその目的は変わるってことかしら……」

「ふん…あいつの境遇なんて知りたくもない。しかしだ…あいつは自らの弱点を露呈した。能力を使いすぎて残弾がないとな…能力は無限ではないのか？」

「能力を使うときは極度の精神力と体力を使う…私も経験があるけど、強い力を使うと気絶するわ。だから…力の大きい奴ほど体に掛かる負担も大きいかもね」

「て…ことは…あいつは数回で能力が使えなくなる可能性があるってことか……」

「期待しない方がいいと思うけどね。能力の大きさなんて個人差が



あるから限界は分からないし、抑えて発動させればいくらでも出せるかもしれないからね。曖昧な判断が一番危険だわ…それにね…あいつの周りには数人の紋様師が仲間についているからそんな弱点も補っているかもね」

「そうかい…それで、あいつは複数紋様とやらを手に入れて何がしたいんだ？まさか…世界最強とかって言うんじゃないだろうな…」

「何がしたいのかは分からない…でも私のような…多重紋様保有者のようになりたいのはあるはずよ。でもね。私は奇跡とも呼べる確率で偶発的に出来上がった研究体のようなもの…だから無理に等しい。同じような人間を見ることは今までなかったしね。私を解体でもしてその仕組みを知ろうとしているのかもしれないけど、研究所の職員ですら数千回の検査で解明することはできなかつたんだから絶対に無理だと思っわ…」

「そうか？俺はそうは思わないがな…」

「どうして？」

「一か八かの博打を打つような奴に見えないんだよ。きつと確信があるからお前という鍵が欲しいんだと思う。亮梧って男…狂人に見えるが頭の切れる奴にも感じる…敵を褒めるのは好きじゃないが、自信に満ち溢れた行動を取る奴は意外と慎重なんだよ」

「あんたも含めてね」

「ふざけんな！あいつと一緒にすんな！」

それからしばらくの間二人で火鉢の中で燃える薪を黙って見つめ

ていた。背中が寒い。正面は炎の暖かさが微かではあったが感じられる。崩れそうな平屋だけにあちこちから隙間風が吹いている。時刻は深夜の二時を過ぎていた。後数時間すれば夜が明けてしまうのだが、二人の目は冴えていた。

「…それで、これからどうするの？ここでずっと過ごすのは遠慮したいんだけどねえ…」

「冗談混じりにそんな話を切り出してみたが、三觜はしばらく考えた末にある決断を下した。

「夜が明けたらお前を保護できる組織にまず紹介する」

「え？」

識那にとってその提案は予想外であった。だから動揺も露にする。

「お前のような存在は初めてかもしれないけど信頼のおける所だ…俺たちの組織も世話になってるから…」

「ぱちぱちと薪が燃える音がだけが響き渡る。」

「ちよつと待つてよ…私は…あなたが護ってくれることを信じてここまで来た。だから最後まで面倒見るのが道理ってものなんじゃないの？」

いきなり切り捨てられた気分になってしまった識那は感情のままに言葉を口にした。それはいつものような強気な発言ではない。本音である。

そんな心情を口にした識那とは対照的に三觜は冷静に対応する。

「道理？何言つてんだお前…いいか…ここまで付き合っただのは慈善事業みたいなもんだ。お前のような青臭いガキをいつまでも側において動き回るほど俺もお人よしじゃないんだよ…」

「私は能力者よ。あんた一人でどうにかできる相手ではないことは分かってるでしょ。それなら私の力を利用でも何でもして使いなさいよ。私だってそれなりの修羅場は潜っているのよ…変な同情は止めて」

一歩も引かない識那だったが、それで判断が鈍る三觜ではない。だから断固としてその提案も断った。

「何を言われようが考えを変える気は無い…明日の朝には引き渡す。お前も諦める。それにだ…お前の精神も体力も限界に近づいているのはとづくに気がついているんだぜ。そんな状態で俺の足手まとい以外の何になるってんだ？」

「それは…」

確かに体力も精神力も限界に近かった。体が思うように動かず眩暈も時々していた。それは能力の負担も掛かっているせいでもあったが、一番の原因は追われているという重圧感に必死で堪えていることである。

このままでは必然的に体に変容をもたらすのは時間の問題だった。

「いいから今はゆっくり休め。朝までは俺が…護ってやるからよ…」

照れくさい言葉を口にしたくなかったが、落ち着かせるために自

然と出た。

「ふんっ…そんなこと言われても嬉しくなんかない…」

ふてくされてごろんと背中を三髻に向けるとそのまま寝た振りをした。そして小さく呟く…「何であんたが…最後まで護ってくれないのよ」そんな識那の想いとは別に三髻は携帯を取り出すと、外に出て掛け始めた。

### 35話

「はいはいー…三觜さんっすかぁ…」

受話器の向こう側から相変わらずマイペースな声が聞こえてきた。

「グッドタイミングっすよ…敵さんの情報割れました」

「そうか…」

太郎と三觜には温度差が生じていたが、太郎には関係なかった。

「これでも結構苦労したんっすよ…一般公開されていない情報の保管場所をあちこち入り込んでやばかったんですから」

「それがお前の仕事だろ…」

「相変わらず冷たいっすねえー…まあそう言っても思いましたが、直で言われるときついっす…えっと…単刀直入に話しますと、敵さんは…人間じゃないんじゃないのかと…」

「どっしてそう思うっ?」

「連続猟奇殺人の手口もそうですが、不可解なことが多すぎなんっすよね…まるで時間でも止まっていたかのような感じなんですよ。だって…人の出入りの激しい場所で行きなり死んだ人間が続出しているんっすよ。これって時でも止めなきや無理でしょう」

三觜は和人のことを思い出した。あいつも人ごみの中で黒焦げに

なっていた。普通ならそうなる前に誰かが止めるか、警察を呼ぶはずなのにあの時は違った。野次馬も何が起こったのかわからない様子だった。

「それで…その肝心の犯人は？」

「悪いんっすけどね…詳しくは分からないんっす…いるであろう場所なら特定できました」

「それでいい…教えろ」

「なら話しますけど…繁民街の雑居ビルにいます。でも…あそこは他民族が入り乱れている危険な場所ですよ。目的の人間にたどり着く前に襲われるかもしれませんよ」

「わーっだから、続きを詳しく話せ」

「センチユリーブルってところす…三人組があそこから出てくるのが街のカメラに映っていたんっすが、和人さんたちが争ったであろう駐車場付近のカメラにも三鬚さんが和人さんを見つけた場所付近にも同様の人物が映ってました」

「よく探したな…」

「俺の開発した自動人物特定機能のお陰っす…街中のカメラに写った人物を自動検索してくれるっていう優れものっす…それで…中の様子は分からないんっす…だから仲間が何人いるのか未知数っす…それでもいいんっすか？」

「十分だ…居場所さえ特定できればこっちから反撃できる…今まで

は向こうからの訪問を待っているばかりだったからな…それで…そういったら今はその中にいるのか？」

「そうっすね…数時間前に一人が出て、帰って来てから誰も出てきてないっすよ…」

亮梧が自分と別れてそのビルに戻ったのだと三觜は確信した。

「ビルの中の見取り図は分かるか？」

「ばっちりっす！電話切ったらすぐにメールに添付しておきますよ…」

三觜はやられっぱなしだっただけに借りを返せることを嬉しく思った。狙われているばかりでは気分も悪い。逆に反撃に出たら相手も冷静ではいられないだろうと考えた。

「…なら、私のサポートはここまでってことでいいっすか？」

「ああ…っと…そうだ。警護の人間をすぐに数人連れてきてくれなにか？」

「嬢ちゃんのためにつすか？」

「そっだよ。俺はこれから乗り込むからよ…さっさと手配してくれ」

「急っすねえ…もう少し待ってからいけばいいのに…」

「うるせえ！黙って言われたようにしろ！」

「はいはい…」

人使いの荒さに慣れてきた太郎はそのまま電話を切った。それから三鬚はちらりと平屋の中を覗き込むと識那が先ほどと変わらない体勢だったので寝たのかと思った。

それなら好都合とばかりにすぐにその場を離れたのだが、識那は寝てなどいなかった。



### 36話

夜明けまであと一時間という所であったが、ここ繁民街は眠らない場所である。他民族のいかにも柄の悪い連中があちこちをうろついていた。

泥酔しながら歩く者、怪しい商売をする者、喧嘩を自ら吹っかけに行く者。あちこちから雑音が聞こえてきてまるで昼間のようだった。

日本を思わせないこの街に新しい建物は存在しない。都市開発によつて捨てられた街に多国籍の移民が住みついた形になってしまったからである。非合法なことを当たり前のように行い、相手が外国人だということもあり警察もあまり介入しなくなかった。

そんな場所に行く日本人はほとんどいない。裏取引をする黒い輩か、人生を諦めた人間ぐらいである。

三觜はそんな治外法権のような場所に平然と足を踏み入れる。

身なりのきれいな者は当然真つ先に注目を浴びる。そして恐喝の対象になるのだが、三觜の存在にはすぐに気づかなかつた。堂々としていたせいもあるが、注目を浴びるほどの人間がそこに出ていなかったことにもある。しかし少し歩き回るとその存在は知られ、若者が数人絡んできた。

それは三人の東洋人であったが日本人ではなかつた。混血の東洋人という感じで体つきはがっしりとしていかにも悪事に場慣れしている雰囲気を出していた。

「お前見ない顔だな…んん？なんだ…ガキか？」

「ガキがこんなところに何の用だ？…韓国人…いや、日本人だな？お前…」

「迷い込んだか…それとも興味本位でここに来たのか知らねえが…ここに入ったらこのルールに従ってもらうぜ。早い話が金だ。まずは有り金を全部出すのが新参者のルールだ。さっさと出せ」

そう言つとその中の一人は分かりやすく脅す為の道具であるナイフを取り出し三觜に向けた。それでも三觜は何も言葉を発しなかった。とりあえず相手の出方を待つてみようと思つたのだ。すると無言の三觜とは対照的に相手はどんどん脅しの文句を口にした。

「ここでは命が数円の価値にしかないような場所だ…大人しく従つた方が身のためだ。それでも強引に身包み剥がされてえのか？裸で帰つてもいいんだぜ…別によお」

「おいおい…黙っていたら何だかわかんねえだろ？」

いつもよりも簡単に金が手に入ると思い込んで男たちは喜んで遊んでいるかのようにだった。三觜はどうみてもひ弱な学生にしか見えない。こんな相手に負けるはずはなかるうと初めから気を緩めていたのだ。だからあっさりと返り討ちに会う。

三觜はナイフの切っ先をすつと指先で掴むとそのままナイフを握つていた相手を間髪を入れずに殴り倒した。

「え？」

他の二人がその行為に気づいた時には出遅れていた。三觜は一連の流れのように勢いそのままに両者を肘打ちと後ろ蹴りの一撃で気絶させた。

「臭い息近づけんなよ…ど素人が」

準備運動にもならないといった様子でそんな言葉を三人に浴びせると、そのまま目的の場所へと歩き始めた。

目指した先は禍々しい気配を感じさせる五階建てのビルだった。築三十年以上は経っているであろうその建物の外壁はひび割れ、ペンキも剥げ落ちていた。

三觜の頭の中にはメールで受け取ったビルの中の見取り図が入っていた。初めて挑む場所でも脱出経路や戦闘に向いている場所を事前に押さえておければ生存率は遥かに高くなるのだ。仮想の戦闘状況はここにたどり着くまでに幾つも思い描き、その全てを打破することに成功していた。戦闘というものは実際にその場にいかなければ分からないこともたくさんあるし机上の空論など役に立たないかもしれない。しかし…脳内で最悪の状況を何通りも組み立てることは大事なのである。不測の事態の対応に肉体のみ自然反応をすることは不可能に近い。

三觜は幾多の不測事態を予測しその場に臨んだ。そして古びた階段をゆっくりと上がっていった。

人の気配は確かに感じる…その数は数人どころではない。このビルにはたくさん人間がいるのだと一瞬で察した。慎重にこの階段を上るべきか、一気に目的の場所に駆け上がるかを悩みながらも

前者を選択すると歩調を一定に保ちながら歩く。

目的の場所の階数は分からない。だから各階を調べなくてはならないのだが、最上階から調べることに決めていた。退路を確保する上でもそれが得策だと思っていた。

五分掛けて最上階の五階に上がった。するとそこで三鬚は自分の目を疑う。

通路が何人もの人間で溢れかえっていたのだ。一斉にその場の人間の視線が三鬚に集まったが、どの人間も正常な目をしていなかった。血走っていて狂気に身を任せているようなそんな雰囲気漂わせていた。言葉を発することはせずに目標に向かってゆっくりと歩く。手にはナイフや拳銃、金属バッドを握る者もいた。

### 37話

「集団催眠…なのか？」

操られているのが明らかであったが、十数人もの人間を操ることなど可能なのか疑問だった。まるで映画のゾンビのようだなと思いつながら群集を見つめた。それと同時に自分がここに来ることを悟られていたことに疑問の念を抱いていた。一体どこからされたのだろうか。まさかこれも亮梧のたちの能力なのだろうか。と、しかし目の前の起こっている出来事を受け止めなければならぬのが現状なのだ。これだけの人間を相手にする戦闘は経験がない。しかしいっつもと同じようにやればいっただけのことだと三觜は決めていた。

すると開戦の合図もなく、群集はわっと襲い掛かってきた。

三觜の脳裏には後退の二文字は存在しない。真っ向から人という壁に突っ込んでいった。正面から数人の男が自らの武器を振り回す。金属バットにしろナイフにしろ当たったら怪我では済まされない。しかしそんな危険に直面しても三觜の体はしなやかに動く。ぎりぎりで見極め避けるのと同時に急所に拳を叩き込む。

流石に一般人を殺すわけにはいかないもので、それなりに手加減はされている。だから骨を砕くことも流血することもなく相手は静かに気絶して床に倒れこんだ。目の前の三人を沈めても気が休まることはない。次々と三觜に殺意をぶつけてくるのだ。

相手は意思のない攻撃だけに大降りすぎて隙もでやすかった。だから如何なる武器を手にしても三觜の敵ではない。三觜の体を凶器が捕らえることは一度もなく、逆に一撃の下に倒れていた。

気づけば半分もの人数に減っていたのだが、操られている人間はそんな状況を見ても引くことはしない。おそらく殺すように命じられていたのだろう。その呪縛を解かない限り彼らは襲い掛かってくるに違いなかった。

目の前の敵が残り数名になったことで見通しができたとも思えたのだが、そんな安らぎを敵は与えない。背後から続々と操られた人間が補充されるかのように現れたのだ。

目の前の人数は数名だが、背後にいるのは十数名。退路を塞がれた状態である。しかし三觜にとつたらこんな操り人形は脅威でもなんでもなかった。同じように切り崩してしまえばいい。体力だつてまだ有り余っているし怪我も一切負っていない。相手の動きを見極め最短距離で急所を打ち抜けばいい。

そんな作業に無意識の内に没頭してしまつたためにとんでもないことを見落としていた。

周囲の不穏な気配である。それは普通の人間なら感じるこのない些細なものであるのだが、三觜が正常の状態なら見落とすことはないだろう。しかし人の入り混じつた状態では周囲に気を配ることをうっかり忘れてしまう。三觜の戦闘能力は達人の域に達しているものの若さゆえに終始安定しているわけではない。ミスもあるのだ。それを相手は利用していた。

突如響き渡る銃音。

三觜から数十メートル離れた場所から放たれた銃弾は三觜の右肩を捕らえた。

「ぐう！」

一瞬自らの身に何が起こったのか理解できなかった。痛みと衝撃の反動で体の動きが止まってしまった。

それでも目の前の群集はお構いなしに襲い掛かる。

三鬚は崩れそうな膝を無理やり戻し、緊張の糸を再び繋ぎとめる。ここで体勢を崩してしまつては全てが終わることを知っていたからだ。しかし同時に狙撃されたことに注意も向けた。

このままではまずい！

そう判断したのか、退路に群がる人の中に突っ込み的となる自らの姿を隠した。

打ち抜かれた反動で右腕がまともに動かないのは承知だったが、何もしないと死ぬのは分かっていた。だからこそ動かなくてはならなかったのだ。

隙間を利用し、相手の力を流し、神経を研ぎ澄ませて目の前の群集をすり抜ける。どうにか非常階段までたどり着くと下の階へと降りた。それを見た群集は再び三鬚を追い始めるのだが、その遙か遠くに構えていた狙撃した人物は三鬚を一撃で仕留められなかったことを悔やんでいた。

下の階に下りた三鬚は太郎に送らせた見取り図を脳内で描いていた。四階には確かテナントは何も入っておらず、物置のような空き部屋がたくさんあったはずだ…ここで一旦体勢を立て直さなくては…

そう決めていたのだが、その全てが覆された。



「くっ…」

よく見ると四階は空き部屋ではなかった。いろんな店やら事務所が入っていた。そしてその人間も全て操られてその場にこった返すかのように出ていたのだ。

「マジかよ…」

いかなる武術の達人でも物量戦、更に狭い場所となればなす術を失ってしまうのだ。太郎の情報に対して怒りもこみ上げたが、そんなことを考えている場合ではなかった。

このままでは各階の人間全てが自分に襲い掛かってくることも予想できたから背筋が凍った。

太郎にもらった見取り図は間違い。そして物量に任せた近距離攻撃との確な遠距離攻撃を同時にさばけるのか分からなかった。

痛む右肩を抑えながら迫り来る新たな群集を目の前にどうしようかと悩んでいると、不意に白い煙が割ってはいるかのように三階の周囲に立ち込めた。

「む…」

その場の全員の動きが一瞬止まってしまった。目の前がみるみる白くなり視界を奪われてしまった。その煙が消火器であると知ったのは数秒後だった。

そんな中で大きな声が聞こえる。

「先の右側の部屋に入っ！」

声の主は自らがいる部屋の場所へと誘導した。しかし三觜が迷うことはなかった。目の前の人間を強引になぎ倒すと勢いのままに部屋の中へと入った。

ドアを閉じると鍵をすばやく掛けた。

「ふ…」

息を漏らして一時の休息を得た。気持ち少し落ち着いただけでも今後の展望が見られると思った。そして背後に立つ人間に、

「どうしてここが分かったんだ？」

そんな言葉を浴びせた。

「あんたのしそうなことくらいお見通しよ。私に隠れてこそこそしないよね。ったく…あんなお化け屋敷のような所に女の子残して…頭おかしいんじゃないの？」

そこにいたのは、三觜がこっそりおいていったはずの識那であった。空になった消火器を持って立っていた。

「まさか…俺の電話の話聞いてたのか？でも…後をつけたのならすぐ俺が気づくはずだが…」

「そんなへまするわけないでしょ。私の能力を忘れたの？ちよつとした情報があれば予見と予知の能力で先回りだつて可能よ。このビルでの違和感も真つ先に感じていたからね。あんたが来る前に退路は作つて置いといたわ」

「そうかよ…」

三觜は方とはどうあれ助けられたことに識那に何ていつたらいいのかわからなかった。すると識那はそんな三觜にお構いなしとばかりにどんどん悪態をついてくる。

「あんたねえ！どんだけ強いかわらないけど無謀すぎるのよ！紋様師を舐めすぎてるのよ！一人で勝てるかと本気で思つてるの？」

「それは…」

「あんたは…私を巻き込まないようにしてるかもしれないけど大きなお世話よ！私は当事者。分かる？私があんたを巻き込んだのよ。だから私だけ外れるつてわけにはいかないの」

少女の口からは年齢とは裏腹に確かな覚悟が感じられる言葉が並べられた。そこには命を差し出すような気迫さえ感じ、三觜は言い返すことができなかった。

識那の目には一点の曇りもない。真つ直ぐな目で三觜を見ていた。

「分かった…悪かったよ。良かれと思つて勝手にした決断だつたが…軽率だつた」

三觜は素直に謝つた。それは自分よりも不遇な過去を背負つた少

女の心中を察したからである。

そうか…少女にとって一番嫌なことは孤独なのだ…

命を賭しても孤独からは逃れたいのだということを感じ取っていた。

「ふん！分かれればいいのよ。なら…これからのけ者扱いは遠慮してね」

「ああ…」

大人しい三觜の態度に追い討ちを掛けるようなことはせずに現実の世界へと戻る。ドアは今にも蹴破られそうな状態になっていた。

どんと音がして木製のドアに亀裂が入っていく。

「どつする？」

真っ暗な部屋の中で三觜が聞くと、識那は退路を用意してあると指差した。その先には開いた窓があり、ロープが垂れ下がっていた。

「なるほど…」

三觜は感心しつつもすぐに窓際に移動すると識那をいきなり抱きかかえる。

「え？え？」

困惑する識那の思考がまともではないままにすぐさま外へと飛び降りた。重力を奪われたかのような錯覚に陥る一瞬の出来事。

片手で識那を抱え、もう片方の手にはロープが握られていたのだが、三觜の腕に掛かる力は相当のものであった。しかしそれをもろ

ともしないで、外壁に三度とんとんと、テンポよく足を付けただけで地面まで着地した。

「うお…」

識那を片手で抱えているだけに体勢を崩しそうになったが、そこは踏みとどまった。そのまま識那を降ろすと、

「心臓が止まるかと思ったじゃないの！いいいきなり…抱き抱えるから…その…あの…びつくりするじゃない！」

いきなり怒られた。しかし三觜はそんなうるさい識那の口に手を置いて無理やり黙らせると、周囲の様子をじっと伺った。

ビルの外には誰もいなかった。待ち伏せている気配がないことを確認すると、識那の手を握りさつと側にある狭い裏路地に入り込んで身を隠した。

「なあ…あいつらはここにいないのか？」

三觜は識那にそんな質問をした。それに対して識那は、先ほどの余韻が残っているのか心臓がどきどきして上の上の空だった。

「は？え？…つと何？」

「あいつらはここにはいなかったって聞いたんだ」

「ああ…つと…亮梧たちね…あいつらは…きつとこの先にある時計塔の下にいるはずよ」

「視えたのか？」

「そうね…はつきりではないけど…あんたの姿も視えたからね」

「そうか…」

そのまま動こうとした三鬚に識那は吼えるように叫んだ。

「ちょっと…まさか、この期に及んで私を置いていくつもりじゃないでしょうね！」

その言葉に歩き出そうとした三鬚の足が止まる。

「ここまでできたんだから、最後まで付き合ってもらおう…」

当たり前のように話すので、識那は何故かこんな危険な状況下でも嬉しく思っていた。

二人は裏路地を抜け出し広い通りに出ると足早に目的の時計塔を目指した。その際に数人の人間に目撃されたが襲い掛かることはなかった。

赤い月に照らされる時計塔。それは神秘的とは呼ぶには程遠い代物で、何かを運命付ける景色そのものであった。時計塔の下の広場には誰もいない。

まるで三鬚たちが来るのが分かっているかのように最高の舞台を用意したといわんばかりの状況であった。

そんな中で時計塔の中から三人の人間が姿を現した。

一人は大男で右腕のない男。一人は女で着物を着ていて長い髪で顔の半分を覆っていた。そしてもう一人の人間は三髻も識那もはつきりと分かった。そう、亮梧であった。

寝起きといったようなだるそうな感じで三髻の方を見ていた。

「なんだよ…異質な気配を感じてみればやっぱりお前か…それで…ここに来たってことはビルの襲撃は失敗ってことかよ…ふーん…これじゃ俺の予想を覆されたな…あ…そうか。識那の能力のせいだな…ったく…厄介な能力だな」

ぼりぼりと頭をかいていろんなことを考えていた。

「まどろっこしいことしやがって…真っ向から勝負すればいいだろうがよ」

「悪いが…お前のような古風な人間じゃないんだ。正々堂々の勝負って何だよ？あり得ないだろ？殺し合いにそんな悠長なものが存在するのか？いいか…所詮は命の奪い合いだ。最短で相手の運動機能を停止させた者の勝ちなんだ。魂だとか信念とか精神論はまっぴらごめんだ。理解もしたくない…」

「それはそれでいい…てめえの理論だの感情は聞きたくないからな。ようやく真っ向からぶん殴れると思うとそれだけで興奮する」

「面白いよ…右肩…銃弾がめり込んでるんだろ？そんな状態ではないとも通りの力も出ない。そんな状況でどうやって俺を殴るんだ？っていうか…最初から俺はお前とはやりあうつもりもない」



そこまで話すと四方八方から殺気を感じた。知らぬ間に囲まれていたのだ。

「まさか…」

「やはり気配は瞬時に感じ取れるらしいな…だが遅い。お前は狙撃の対象になってる。あちこちのビルからな…数は分からなくとも銃口が向いていることは分かるだろ？」

亮悟の話すとおり三觜の全身にはちくちくするような殺気が感じ取られた。自分のあらゆる部位に狙いを定めていることが見えなくとも分かる。

「識那がここに来たことは予想外だったが、嬉しい誤算だよ。こうやって労せず貴重なサンプルを手に入れられるのだからな…さ、こっちに来い。そうしなければどうなるかぐらい分かるんだろ？」

その冷酷な目は躊躇することなく殺すと示唆しているかのようだった。そしてそれに従うしかないことに三鬚は奥歯をかみ締めていた。

「し…識那…大人しく従え…」

「で…でも！」

「いいからそうしろ！そうじゃなきゃここで全てが終わっちまう…」

誰よりも悔しかったのは三鬚だった。敵の規模を見誤り、識那が戦場に近づいている気配に全く気づかないという落ち度を悔いていた。

しかしだからといって全てを諦めた訳ではなかった。その目には生を諦めた様子は微塵もなく必死に何かを模索しているかのようだった。

「良い心がけだ…ほら、言われた通りにしろ…識那…」

識那は何度も三鬚の顔を伺ったが、三鬚が識那の方を見ることはなかった。見捨てられた気分にもなったが、何よりも三鬚の考えがさっぱり分からなかった。それだけでどこか悲しくなった。

「…」

動かさないと決めていた足が自然と動く。そして亮梧の元へとたどり着くとうつむいて顔を見られなかった。

「お前は貴重なサンプルだ…いきなり手荒な真似はしない。さあ、行くぞ」

亮梧はそう促し視線を僅かに外すと、識那は懐から忍ばせてあったナイフを取り出しいきなり襲い掛かった。

だが…亮梧もそれを読んでいたのか、右手を即座に受け止めると笑っていた。

「大した度胸だ…」

そして拳であご先を殴ると識那を気絶させた。それを見た三觜は激怒した。

「おい！亮梧！」

そんな三觜にはうんざりしたようで、亮梧はため息をついた。

「お前はここで用済みだよ…」

ぱちんと指を鳴らすと、三觜の左腕を銃弾が打ち抜いた。

「ぐっ！」

弾は微かに被弾し地面にめり込んだ。幸いだったのは的が小さいせいかかすめて肉をそぎ落とすことで精一杯だったのだ。

「次は足…いつてみるか？」

「ばちんと再度指を鳴らすと右ももを弾丸が先ほどのようにかすめた。」

「ちっ…あいつら…下手くそだな…せめて打ちぬけよ」

思うような光景が見られないことに腹を立てていた。しかし三觜の体からは血が流れ出ており軽傷とは言いがたかった。

「どつだ？一瞬で殺すより面白いだろ？」

全てが上手くいったことで気持ちが高ぶっているのか、亮梧は楽しそうだった。逆に三觜は自ら手を下さない亮梧を責めた。

「お前…紋様師なんだろ？ならなんでお前の力で俺を殺さない！いたぶっているつもりか？ふざけんな！何様のつもりだ」

安い挑発だとばかりに一笑すると、

「お前と出会ってまだ半日も経っていない…この行為はお前を評価してるんだぞ？能力を使わないのは得体の知れないお前を不用意に自らの懐に入れたくないっていうところだが…」

「嘘つくなよ。その緩んだ表情からそんな配慮が浮かんでいるはずもないだろうが」

「くくく…そうだな。気取ってそんなこと話してみたが嘘だ。単純にいたぶりたいだけだ…痛みが小さく続くほど死にたくなるからな」

「ふんっ…本音が出たか…」

「どう足掻こうがお前の命はここで終わりなんだよ。能力使おうが武器を使おうが一緒だ。しかし飽きた…お前との下らないおしゃべりもなあ…」

そのまま識那を抱えると、三人は時計塔の中へと移動する。

「これで終わりだよ」

亮悟はドアの前まで来るとそのまま最後の合図を出した。すると、一斉射撃が三鬚に向かって始まった。ぱんぱんと数十発の乾いた発砲音が響き渡り一方的な惨劇が行われる。その結末を見ることなく音だけが鳴り響く中で亮悟はドアをばたんと閉めた。

「くふ…くく…あいつ悔しがって死んだだろうな…」

## 41話

暗い階段を上りながら亮梧は喜んでいたが、他の二人は黙したまま何も話さなかった。

そんな中、三觜は生きていた。かろうじてという表現は相応しくない。寧ろ軽傷で済んでいたのだ。打ち抜かれたのは、一番最初に受けた右肩だけである。それ以外は弾丸がかすって終わっていた。

そのことに驚いたのはスコープ越しに覗き込んでいた狙撃者たちである。こんなことは体験したことがない。弾丸は音速を超える速さで飛ぶ。それを見極めることは不可能であり、例え外したとしても十数名もいる狙撃者が一度に数十発も放った弾丸が的を捕らえないはずはないのだ。

まさか…亮梧同様に紋様師なのだろうかという不安が全員の頭の中にあつた。ただ亮梧は全員に事前に話していた。

「いいか…弾丸を避けられる能力者は存在しない。これまで全ての能力者を調べ上げたがそんな能力は存在しないんだ。物理的ダメージを軽減することができる者はいない。しかしだ…ライフル弾に耐えられる装甲を自らの体に施せる者はいない。一斉射撃なら尚更だな俺ですらどうだか…」

まるで自分以外の存在はとも言いたそうだったが、その場にはいた全員が亮梧の話しを信じていたのだ。だが、現実は違う。土煙の中に立っている人間がいる。

弾丸の行き交う場所を見極めその全てを受け流す。三觜の集中力

は最高潮に達していたのだろう。弾丸が見えなくても狙われる斜線から殺気を感じ取っていたのだ。

第二射が放たれたが結果は先ほどよりもすさまじい。左右に僅かに動いただけでかすらせもしていないのだ。それから三鬚は識那が連れ去られた先の方を見た。

するとまた新たな銃弾が狙って飛んできた。しかし三鬚はその場を離れ弾丸の一撃を避ける。そこから走り出して一気に加速すると、ばすばすと三鬚の走った後を虚しく弾丸が地面にめり込む音がした。そのまま全身の力を右足にためるとドアに向かって思い切り解き放った。

硬い鉄製の扉はまるでアルミでも蹴り飛ばしたかのように潰れながら壊れた。背後を狙われないように中へと滑り込むように入ると、外で行われていた銃撃はぴたっと止んだ。

「はあ…はあ…はあ…」

呼吸を整えながらゆっくりと中を見ながら歩いていった。そしてふと見上げると最上階まで続く石の階段が螺旋状に壁にくっついていった。点在するランプの光が周囲を微かに照らしているだけなので薄暗かった。

三鬚はその階段を上って行ったが、歩きたびに響く肩の鈍痛と至る所から噴き出す出血に悩まされた。致命傷ではないが、重傷には違いなかった。四肢が動くだけでもまだと本人は思いながら痛みを忘れるかのように走った。

亮悟が三鬚の存在に気づくことはなかった。識那を目的の場所ま

で運ぶことで精一杯だったからである。三人は時計塔の一室の中央にある診察台のようなベッドに寝かせると、今後の計画について話し合っていた。

ここは亮梧たちの研究室であった。紋様師をいかに人工的に作り出せるか。紋様の能力は移植可能か、など異能力に関する研究が幾多も幾多も行われているのだが、その過程が生易しいものではなかったかを表すかのようにそう古くないたくさんの人間の血の匂いと跡があちこちに染み付いていた。そしてその中でも常軌を逸した行為を思わせる象徴がいくつも飾られていた。

ホルマリン漬けにされた紋様である。人間から強制的に剥ぎ取られたそれは不気味に漂っていた。

散らばる資料も様々で新しいものから古いものが入り乱れていた。そんな中でようやく手に入った望みのものを見直して歓喜の声を上げる。

「さあ！古い時代からの脱却だ。こいつを使えばきつと新たな人類の可能性つてものが見える。純血の紋様師が減る中…我々の時代がきつと来るだろう。そのためにもこいつを解明しなくてはならない。紋様ひとつひとつ剥ぎ取ってでも調べ上げるぞ」

亮梧の考えに賛同している二人は異論を挟むことはしない。ただ黙って容認していたのだ。

これからどんな残虐行為が行われるのかは眠っている識那には想像もつかなかった。そんな時、

「うっ…」



大男の卯之助が誰かの気配に反応し体を震わせながらいつもの声にならない声を上げる。それを見た亮梧は誰かがここに近づいているのだと知った。しかし三觜だとは思いつかなかった。

「卯之助…落ち着け。あいつじゃない」

「そうよ…あの包囲網を破ることは人間には不可能。生きていたら化け物よ…」

神楽までも樂觀視していたが卯之助だけが違った。何か恐ろしい気配を感じ取ったかのように若干怯えているようにも見えた。

「うっうっ…」

「おいおい…しっかりしろよ。同胞がうろついているだけだろ…そんなに心配なら…おい！健次郎。お前が外の様子見て来い。万が一関係者じゃない人間が入り込んでいたら躊躇うことなく殺せ…」

「はい…」

すると今まで奥に隠れていた人間が亮梧の命令で動いたのだが、その姿は見えない。あの三觜の家を襲った透明の能力を持つ紋様師である。

「お前の能力なら侵入者の始末など容易い…」

健次郎はそのまま部屋を出ると外の様子を伺った。その両手にはナイフが握られていたのだが、ナイフまで透明だった。

## 42話

何も知らない三觜は階段を黙々と駆け足で上がっていた。五階までたどり着くと足場の悪い場所から開放されるかのように広いスペースのある場所に出た。

そこから更に上に通じる階段が見えたのだが不穏な空気を同時に感じ取り足が自然と止まった。何かが来る…以前感じたことのある気配にも似ている…

三觜の勘は正しかった。姿を消した健次郎が側に迫っていたのだ。健次郎は声には出さなかったが驚いていた。あの銃撃の嵐をどうやって潜り抜けたのが理解できなかったからだ。亮梧は話していた。こいつは確実な死を迎えたはずと…それなのにここに立っている…それに自らの能力を持ってしても見破られた相手だけに緊張感が高まる。

三觜に気づかれる前に方を付けなくては…

健次郎は焦っていた。だから自然と殺気も高まってしまっていたのだが、その気配を三觜が見過ごすはずもなく気づかれた。

背後から迫る鋭い攻撃をぎりぎりの動きでかわす。それは体の自然な流れとでも言うべきか、三觜の体は常に殺気に反応するのだ。しかし負傷していることもあり動きは若干に鈍かった。本来のような神業的な見切りも半減していたのだ。

肉は切らせなかったものの皮を切られた。

「くっ…」

僅かに体勢を崩してしまった。万全ならこんなことにはならないだけに歯がゆく思っていた。

一方で健次郎は再確認するかのように三觜の恐ろしさを知った。どうしたら見えない相手の攻撃を避けられるのだろうか、理屈が分からなかった。だから追撃の足も止まりゆっくりと様子を伺う。そして出すことのない声を出した。

「敵ながら…尊敬する…」

それには三觜も驚いた。誰もいないところから声がする。

「俺の家を襲った奴か？へえ…しゃべれるんだな。しかし…しゃべって大丈夫なのか？声のする場所でお前の位置は特定してしまう」

「お前には関係ないだろ？完璧に俺の気配を察して動いているんだからな。しかもだ…凶器まで隠しているのにそれまでかわしてしまつとは…亮梧に次ぐ才能の持ち主かもな」

「亮梧に次ぐ？まるで俺の方が弱いと言いたそうだな」

「あいつの能力は兵器に等しい。炎の温度、速度、質量どれも人間の範疇を超えている。そしてノーモーションで放たれる炎は反応することもできずにかかせない。例え俺が姿を消してあいつを殺そうとしても炎の波で全てを飲み込んでしまうだろう…」

「おいおい仲間自慢か？でもよ、あいつの能力なんて関係ないな…俺からすればどいつもこいつも似たり寄ったりだ。紋様師の能力に

一方的に振り回されやがって…くっだらねえ…」  
健次郎がいるであろう場所に向かってはつきりと話した。

「お前がいくら人の気配や殺気に敏感だとしても亮梧の攻撃は防げない。もしも圧倒的な力で自分の逃げ道を塞がれる行為をされたらどうする？諦めるしかないだろう？所詮…人の力で数千度の炎をかき消すことなどできないのだ」

「まあ…普通ならそうなるな…だけどよ。俺は別に亮梧がどんな能力持ってようが関係ないな…」

「どつという意味だ？」

「俺の仲間を殺しやがった…半殺しにしなきゃ気が済まないんだよ。これはよ、勝てる勝てないの理屈じゃないんだ。何もしなかったら後悔しか残らない」

「殺されると分かっているもか…」

「おいおい…しつこいな…どつしてあいつに俺が殺されることが前提なんだよ。やってみなくちゃ分かんねーだろうが…」

「どつやら…今のお前には何を言っても無駄のようだ…一応警告はした。それでも進むと言うなら再びけりをつけようか…」

「変わった奴だな。いきなり切りつけておいて警告なんてよ。悪いが…俺は自分に殺気を向けた奴には容赦しない。だからよ…」

そこまで話すと三髯は床を蹴り上げ見えない健次郎との距離を詰めた。

そこに健次郎がいると分かっているかのように見誤ることなく対峙できる場所まで移動する。健次郎はたまらず場所を移動したが、その後をすぐに追いかけた。

「くっ…」

健次郎は両手に握ったナイフを思い切って三觜に振るう。できるだけ大降りにならないように細かい動きで急所を狙う。

しかし結果は同じである。三觜はその全ての動きを自らの体に到達する前に手で弾く。

突く動き、切り裂く動き、時にはフェイントも織り交ぜてみるものまるで無駄だった。見えていないのに見えているかのように対応する動きに無駄はない。

全力を尽くしてもこの男には勝てないのか：そんな弱気な考えが浮かぶ。だからかもしれない。自分の力量を見極める判断は速く、咄嗟に自らの武器を投げつけた。

だが、そんな攻撃も意味を成さず、三觜はすつと上体を動かすだけで避けていた。二本目のナイフを投げつけると健次郎はそのまま背をむけて走っていた。

三觜は相手が遠ざかる感覚は分かったもののその気配ははつきりと掴めなかった。殺気を完全に捨て逃げる選択をしたからこそこのような事態になった。健次郎はこのまま犬死するよりも亮悟に優位となる情報を提供したかった。そのためにはプライドなど投げ捨ててしまった。

三輩は完全にその場に孤立したが、上に進むしかなかった。なので階段に視線を移すと上ることにした。

## 43話

識那が目を覚ますことはなかった。

亮悟は最新の機器を用意する訳でも解体するための道具を用意する訳でもなく、墨と筆を用意すると識那の両腕と両足そして額に何かの紋様を描いた。その様子を他の二人は黙って見ていた。

「こいつが何か…知りたいか？」

亮悟は神楽に向かって聞いた。すると神楽も当然知りたかったので頷いた。

「分かりやすく言えば紋様能力の解析つてやつだ…俺がいろんな紋様の能力分析ができたのもこいつのお陰だ…紋様は大本となる基礎の紋様が存在する。そこから枝分かれをしているんな能力を開花するんだ…だから紋様の絵柄で大抵の能力推測ができるようになる。俺はこれで数百の紋様を解明した。しかしだ…見たことのない紋様もまだある…こいつの体には複数紋様が刻まれているから単体の紋様能力だけではないこともある」

「それは…混ざり合って新たな能力も生まれるということですか？」

「そつだ…紋様はその人間の生命力を糧に発動する。体内で混ざり合うことで新たな血から生まれるということもありえるのだ…だから慎重に分析することが必須の条件となる。こいつの体に描いた紋様が分析の基盤となりそして…この紙を使うことで解明に繋がる」

亮悟が取り出したのは数枚の白い紙のようなものだった。

「これが重要だ…こいつはな…人の皮膚でできた紙だ…」

それを聞いて神楽の目が一瞬大きく見開いた。まさか亮悟が殺した人間の皮でも剥いだのだろうかと思像してしまった。

「勘違いするな…俺が作った訳じゃない。昔からあるんだ…亡くなった紋様師の亡骸から作られる物には不思議な力が宿る。それを使つたまでだ。そしてこれは紋様師の能力によつていろんな色に染め上がる。例えば…お前のような結界系は灰色に卯之助…お前だと黄土色だろう…俺は…分かりやすい。赤だな。紋様師の能力の系譜は自然の流れに等しいからそのカラーも存在するのだ。こいつは複数紋様の持ち主だから一枚では分からない。そこで紋様の数と同じように五枚の紙を用意した…さて…どう反応するか楽しみだ」

そこまで説明して不気味な紙を取り出すと識那の紋様の場所に一枚一枚紙を置いた。

「数分で色が変わる…」

三人が識那の方に注目していると部屋のドアが急に開いた。全員視線がそこに移つたがそこには誰もいなかった。

「健次郎か…」

真つ先に気がついたのは亮悟だった。朗報が当たり前とばかりにあまり気にも留めずに結果だけを話すように促した。すると健次郎は期待通りの答えが出せないことに焦つたのかすぐに口を開くことができずに黙っていた。



「おい…何を黙っている。何があつたかさつさと話せ」

そんな健次郎にイラついたのか亮悟は催促した。すると健次郎はやむを得ないとばかりに重い口を開いた。

「鵜…三鬚がこちらに向かつてます」

その名前を聞いただけで亮悟の血相は変わった。血圧が急激に上昇し声を荒げた。

「どういうことだ！」

亮悟の明確な怒りには健次郎も自らの死を予感させられた。しかし伝えることを伝えなくては意味がない。言い訳だけはするまいと考え話を続けた。

「先ほどの銃撃からほぼ無傷でここに向かつてます…」

「無傷？あり得ないわ。ライフル弾よ？人の能力を超える速度、威力の弾丸の嵐よ？私たちだって…あの包囲網から逃れる術はない…」

「私たち？それは俺のことも話しているのか？神楽…」

よほど三鬚が生きていたことが悔しいらしく亮悟は神楽に食って掛かった。流石にその殺気がすさまじく神楽は両膝を崩してしまった。

「い…いえ…亮悟様は別です…亮悟様の能力なら三鬚と…いや三鬚以上に勞せず潜り抜けられるはずです」

神楽はそのように根拠のない発言をしたが、一番その難しさを知っているのは亮梧だった。いくら亮梧と言ってもハンドガンの弾は消滅させられてもライフルの弾は消滅させられる自信がなかった。弾丸の速度は倍以上に違おうし大きさも違っただけに燃やすまえに体に突き刺さっている可能性の方が高かった。

そんな難易度の高いことをほぼ無傷でやってのけてしまった三鶯に少なからずとも負けたことを許せなかった。そしてどこかであいつは俺以上の存在なのかもしれない。そんなことを一瞬でも考えた自分も許せなかった。

「あいつはただの人間だ…他人よりも少しばかり勘がいいかもしれないが、弾丸が命中しなかったのも運が良かったからだろう…くくく…面白いな…いいだろう…俺の前に立ち塞がるというのなら確実に俺の手で殺してやるよ」

自らを奮い立たせるかのようにそう話すとすぐに卯之助と神楽に命じた。

「お前ら二人で片付けろ。神楽…お前の結界の能力があれば卯之助と二人で十分だろ」

二人は威勢良く返事をするそのまま部屋をすぐに出た。残された健次郎はどのようにしてそこにいたらいいのか分からなかった。すると亮梧はすぐに話しかけた。

「健次郎…正直に話せ」

「はい…」

「あいつらは三觜を殺せるか？」

その問いに答えるのにどのような言葉を選ぼうか模索していたが、亮梧はそれを見抜いて余計な配慮はいらないからはっきりと言えと命じた。すると健次郎は意を決したかのように答えた。

「おそらく無理でしょう…。」

「何を根拠にそう思う？」

「彼は…紋様師ではないのにも関わらず卓越した五感を持っています。どんな状況下でも生き残る術を見つけられるとでも言いましようか…どの動きにも隙がありませんでした」「なら…どうやって卯之助の様々な武器を右腕に構築する能力を切り崩す？神楽の結界にしてもそうだ…。」

「どちらも肉体は並みの人間と変わらない…もしも奴に一回でも触れさせたら負けです。相手の隙を見逃すこともしないですし、一撃で仕留めるだけの攻撃力も持っています」

「…健次郎…お前は二度も手合わせをしているからそこまであいつのこともそれなりに分かった訳だ…しかし…俺は二度の敗走を認めるほど寛容な性格でもない。死んでもいいから手傷を負わせるぐらいの気構えがなくてどうする？あっさりと報告だけに来るとはなあ」

そこで健次郎は自らが殺されることを悟った。主従の関係ならあつさりと死を受け入れるかもしれないが、健次郎と亮梧の関係はそこまで深いものではなかった。だから逃げる体勢を整えた。

「逃がすか！」

亮梧は見えない健次郎の気配の場所を明確に把握できるわけではない。だからそこにいるであろう場所に向かって数千度の炎の壁を出現させる。炎の壁は部屋の一角に突如現れたかと思うと留まることなくすぐに消え去った。それほど広くもない部屋だったのでここで大炎上させてしまったら自らの身も危うくなるので極力抑えている部分もあった。

それでも爆音と共に上がった炎の焦げ臭さと煙が部屋中に立ちこめた。

「ちっ……」

手ごたえを感じなかったせいかわ梧は舌打ちをした。

亮梧が健次郎の場所を明確に把握できていないことと能力を抑えているのが幸いしたのか、的から僅かに外れた健次郎は間一髪のところまで逃げる事ができたのだ。しかし亮梧に追う気はなかった。そんなことに時間を掛けてなどいられない。今は識那のことが大事だった。

開かれたままのドアを見ながら運のいい奴だと思いつながら再び識那の元へと向かった。

## 44話

卯之助と神楽は十階の足場のある広い場所ですぐに三觜と出会うことになった。

二人はこいつが三觜なのか？という疑問すら浮かんだ。何故ならどこからどうみても殺伐とした世界からは程遠い容姿をしていた。中学生が間違っただけに紛れこんだのだろうかと思ってしまうくらいだった。

「おい…お前ら誰だよ？」

亮梧と識那のいる部屋の下の階で出会った三人は互いの存在を伺っていた。三觜を見つめる二人は明らかに敵対心を丸出しで今にも飛び掛りそうだった。一方で三觜は初対面の異色な二人をどう扱っているのか困っていた。

「お前が三觜か…悪いけどここで死んで…」

神楽はそれだけ話すと、もう三觜を殺すことしか考えていなかった。両手を大きく広げたかと思うと周囲の景色が変わった。結界を張ったのだ。

「む…」

重苦しい空気を感じながら三觜はこの二人が自分を殺しに来ただと受け止めた。

これは和人を殺すときに使った能力であるのだが、半径数十メー

トル内に周囲の世界と隔絶された世界を作り上げる。そこで行われる行為はどんな大きな衝撃にも耐えられるし周囲の人間、物には全く危害が及ばない。だから隠密行動の一環として使われるのだが、何度も使える代物でもないのだ。能力者の力の消耗が激しく日に一度が限界だった。

「ここがお前の墓場だ。お前の逃げ道もなければ、卯之助が周囲を気にせず全力を振るうことができる。行け！卯之助！」

「うあああああああ」

卯之助の右腕には紋様師を殺した時のような巨大な刃が形成されていた。それを軽々と振るい風を切る音すら聞こえてくる。

轟音と共に巨大な刃は地面に振り下ろされる。しかしそこに三鬚はいない。完全に見切り刃の真横に立っていた。卯之助は頭に来たのかそのまま三鬚の胴体めがけて真つ二つにする勢いで刃を再び振るった。

だが…結果は同じである。あっさりとかわされる。

「どっして…」

今までこんなに易々と攻撃をかわされる卯之助を見たことのない神楽は驚きの表情に変わった。卯之助の武器を振るう速度、衝撃に對抗せきた人間はいなかった。例え見えたとしても対象物が大きすぎて避けきれないのが普通である。しかし三鬚は卯之助が攻撃するよりも先に動いて全ての斬撃をかわしていた。

「でかいだけでつまらない奴だな…体も武器もでかいってのは威力はあるかもしれないが、攻撃が単純で分かりやすい」

攻撃を避けながらそんなことを口にするほど余裕があった。

「ど…どうしてだ…お…俺の…俺の…こ…攻撃が…あ…当たらない…」

卯之助は焦っていた。いずれは当たるのではないか…そんな期待を込めて攻撃の手を休めず大きな凶器を常に振り回しているのだが、流石に体力は無限ではない。次第に動きも鈍くなっていた。それを見かねた神楽は叫んだ。

「卯之助、離れる！」

そう話すと卯之助は大人しく従い三觜と距離を取った。そして次の瞬間、三觜の付近に念を入れると強力な圧力が掛かった。それは重力であり空気の濃度までも変えてしまった。三觜の体に向かってじりじりと空気の圧力が迫る。神楽の能力であったが、並みの人間なら立つこともままならず酸欠に陥って倒れてしまうのだが、三觜は違う。そんなあらゆる負荷をもともせず地面を大きく蹴り上げると瞬きするほどの時間で神楽の前に現れた。

「え？」

神楽が視界に飛び込んだものが三觜だと認識する前に腹部に拳を叩き込まれてしまった。そしてそのままゆっくりと崩れ落ちた。

卯之助はそれを見てすぐに反応し自らの唯一の武器を振るう。むき出しの翼のままの巨大な扇風機が三觜に迫る。しかし神楽同様に

その強靱な肉体の隙間ともいえるべき急所、鳩尾に左の肘打ちを入れられた。

突き刺すように入ったその一撃により巨体までもが地面に沈んだ。

「ふう……」

それを見て、身に纏っていた重い衣装のような殺気を脱ぎ捨てる  
と僅かに安堵の表情を浮かべた。三鷹の怪我した右腕も限界に近い。  
先ほども左腕でしか攻撃をしていない。利き腕が使えないのは想像  
以上に厄介であり全体のバランスがどうも悪く感じてしまう。それ  
でも最小限の動きで難を逃れることができたので上出来だとも考え  
た。



## 45話

階段の先を見て呟く。

「こいつらがここまで出てきたってことは…近いのか？しかし…識那の気配も亮梧の気配もはっきりと掴めない…」

それほど軽くもない足取りで階段を駆け上がると、また広い空間が間の前に飛び込む。この時計塔はどうやら五階おきに仕切られた広い空間が存在するのだと認識できた。最上階まで目の前の十五階。そこで足を止めて周囲の様子を伺いながらゆっくりと歩いていると、不意に誰かの気配を感じる。それは風のように三觜の脇を駆け抜けていくかのようなだった。感じたことのある気配にふと振り返るがそこには誰の姿もない。

三觜は殺気に対しては敏感なのだが、殺気のない穏やかな気配にはそれほど敏感とは言えない。だから気にも留めずにそのまま歩くことにした。

先ほどの気配が飛び出したであろうその部屋が三觜の前にはあったが、更の上に通じる階段も見える。おそらくこの先は時計塔の最上部。時計盤の裏側にあたる所だということが分かった。

識那が捕らえられたとしたらもうこの階の部屋か最上部しかない。三觜は意を決したかのようにこの階の部屋を探ることにした。するとドアの先から膨大な殺気を感じる。まるで熱風が突風で襲い掛かるかのようなその殺気に気づきドアからすぐに離れた。

三觜の勘は鋭かった。もしも離れなかったら消し炭になってしま

ったであろう炎が轟音と共にドアを溶かして飛び出した。

炎の柱が地面と平行して放たれる光景は映画の一コマのようである。三觜は即座に亮梧と判断して身構える。するとドアの奥から亮梧はゆっくりと現れ出た。

怒りを内包させているような複雑な表情ではあったが、微かに笑みを浮かべていた。

「大した足止めにならなかったようだな……」

卯之助と神楽の安否を気遣うこともなく、それよりも役立たずと罵っていた。三觜はそのことに反応はしない。視線を亮梧から外すことなく出方を見ていた。

「ここまで来たのは褒めてやる……どうやってあの銃弾を掻い潜った？狙撃主が下手でも打ったか？それともお前の持っている能力なのか？」

すぐに襲い掛かる訳でもなく、まずは気になっていたことを片付けたかった。

「どれでもないなあ……俺は能力なんてないからな……」

「それもそうだ……お前の肉体には紋様が刻まれていない。健次郎にも確認させたが、それらしいものはどこにもないと報告を受けている。なら……お前は自身の身体能力で避けたってことか？目に見えない銃弾を？」

「……………」

三鬣は何も話さなかった。

「はっ…馬鹿馬鹿しい。人間にそんなこと可能なはずがない…嘘をつくならもつとまじな嘘をつけ。大方…何かで身を護ったのだから？ そうじゃなきゃ生きている説明がつかない」

憶測でいろんなことを話したが、三鬣は笑った。

「お前…信じたくないんだろ？俺が生きていることに…」

「そんなことはない。俺から見たらどの人間も大した違いはない…紋様師だろ？がそうでなくても…全てを消滅させられるこの炎を防げる人間がどこにいる？」

「流石…自信家…俺から見たらお前なんて怖くも何ともないけど…」

根拠があつての発言であるが、亮梧は自らを目の前にしても怯みもしない人間を今まで見たことがなかった。

どんな人間でも俺の能力を見れば一目散に逃げるか、ひざまずいて命乞いまでした。それなのに…こいつは何なんだ？その自信はどこからくる？

理解できなかった。

「そこまで話すなら望みどおりにしてやる…お好みの焼き加減はあるのか？レアでいいか？それともウェルダンがいいか？」

「おしゃべりな野郎だな…前置きはいいから、さっさと掛かってこいよ。火遊び野郎が」

更なる挑発が飛び交い、亮梧の殺意は怒りと共に一気に噴火する。

「死んで後悔しろ！」

右腕を大きく振るうと三觜の立っていた場所に間欠泉から吹き上がる熱湯のように炎が飛び出した。

狭い部屋の中ではなかったので全力に近い形での炎が天井まで燃え上がった。周囲の温度が一気に上昇して広間は真夏のように暑くなった。

## 46話

やったか…

亮梧は能力のせいで精神力と体力をそぎ取られ短く呼吸をしていた。ゆっくりと炎の消え去った跡を見たが、そこには誰もいない。

亮梧の瞳孔が広がり周囲を見渡した。

「……だぜ…」

三觜は亮梧の背後に立っていた。

「炎を出せるって言うても的をきちんと絞らないと当たらねえぞ？」

言っていることは簡単なことかもしれないが、それを実現するのは不可能だった。亮梧の放つ炎は数千度、直撃しなくとも至近距離で炎の熱風を浴びれば身体に何らかの障害が与えられるのだ。

「術者の目と腕の動きを見ればこんなのかわせるだろ…つまらない芸当だな」

「な…なんだとお！」

安っぽい挑発にまんまと乗せられたのか、亮梧の頭の中にはもはやこの広間の構造上の心配など頭になかった。

「ふざけるんじゃないやあねえよ！この…クズがあ！」

両腕を思う存分に振るって何発という炎の塊を憎い相手にぶつけた。

爆発音と煙と火花が部屋中を埋め尽くす。戦場のご真ん中に身を置いてしまった三觜の体はばらばらになっておかしくない。

亮梧も三觜の姿を確認する気はなかった。狂った紋様師は四方八方に殺意の炎を体力の続く限り解き放つと数分後に静かになった。

残弾が尽きたようで、両肩で大きく息をしていた。

「はあ…はあ…はあ…馬鹿に…しゃがって…俺に勝てる人間なんか…この世に存在しないんだ…」

必死に呼吸を整えて冷静さを取り戻そうとした。煙と瓦礫が大気を舞い広間の状態がどのようになっているのかさえ分からない。

それでも亮梧は三觜を殺したことで満足だった。

一人の人間を殺すのにここまで体力を消費させられるとは思わなかったが、これで邪魔者はもういないと部屋に戻ろうとした。しかしその時、背後から声がする。

「おい…どこに行くんだよ？まだ終わってないだろ？」

その声を聞いた瞬間、亮梧の思考は止まり背後に悪寒すら感じていた。生まれて初めて感じる恐怖だったのかもしれない。振り返って声のする方を見た。

煙の中から三觜はその姿を現し亮梧を睨みつける。体はどこも焼

け焦げていない。

「銃弾をかわせた理由が分かるか？」

「な…な…」

「人つてのは良くできていてな…防衛本能を何度も何度も徹底的に鍛えてやれば自然と体が動くんだよ。殺されるって知ったら誰だって抵抗する。そう…体の細胞だってな。殺意は人の生み出す強烈な気配だ…無心で人は殺せない」

「お前は…それを敏感に感じ取れるというのか？銃弾だろうが炎だろうが…」

「ああ…全ての殺気の射線が俺には感じ取れる。だから避けれる」

「それは能力ではないのか？紋様師ではないのか？」

「愚かだな…紋様師。お前は力に頼りすぎだ…人が過度の能力を持つことは本来の姿を見失うことに繋がるってことが分からないのか？」

「お…愚かだと！力を持つて何が悪い！なら…何のために我々は力を授けられた。その意味は何だ！気まぐれに与えられたとも言えるのか？」

「ばーか…そんな凝り固まった考えだからお前は異常者なんだよ。力に振り回され、更なる力を望み…いろんな人間を傷つけ…壊す。くっただらねえ…そんなお前の私利私欲のために死んでいった人間は浮かばれない…」

軽蔑するまなざしを亮梧に向けると、ため息をついた。

「三觜…それでどうする？俺をここで殺すか？」

殺すという言葉は三觜の心を揺さぶる。その経験はある…裏の仕事をしていれば手心を加えることができずに運悪く殺してしまうこともあるのだ。しかし戦意喪失している人間を殺したことはない。無抵抗な人間を殺すことができるか？そんな考えが頭の中を過ぎる。

「お前の仲間をいたぶる様に殺したんだ…憎いんだろ？さあ…どうするんだ？」

一瞬弱気になった三觜を見るなり亮梧はこいつに自分は殺せないと踏んだ。だから強気に前に出た。無抵抗な姿を晒して両手を広げていた。

「識那を助けたいなら…俺を殺すしかないな…そうしないと俺は何度でもお前らを狙う。もつともつと仲間を増やしてな…それにだ…無差別な殺人もまた増えるかもな…」

三觜との距離が一メートルを切った。三觜はどうするか悩んでいた。即決はできなかった。ここで殺すのは簡単。しかし…殺しているのだろうか？

まだ十七歳という若さかもしれない。握る拳に汗がにじんでいた。

そんな一瞬の隙を亮梧は見逃さない。



## 47話

「でもよ…それは無理かもなあ…」

起死回生の一撃。亮梧の目は死んでいなかった。三鬚の体に向かって意識を集中させると叫んでいた。

「マインド・フレイム！」

その言葉を最後に三鬚の体に炎が吹き上がる。亮梧は両手を動かしてなどいない。正にノーモーション、至近距離からの攻撃だった。これには三鬚も当然反応などでできずに炎の中に体がすっぽりと隠れてしまった。

亮梧はすぐに距離を取りがくりと膝を地面につく。

これが最後の攻撃だったらしく全ての体力を使い果たしてしまったのだ。

「くっ…はっ…はっ…はっ…」

頭の中はぐらぐらして、膝はがくがくしていた。少し時間を置かなければ立つこともままならない。そんな状態であったが、様々な色が混ざり合い燃え続ける炎柱の先を見るだけで癒されていた。

「いくら…貴様といえども。幻想の炎をかき消すことなどできない。意識に働きかける炎に…内側から焼き尽くされるがいい…」

流石に意識化にまで働きかけるものは三鬚といえども避けられる



何が起こったかなど理解できるはずもない。あごは粉々に砕け歯も折れた。血と唾液を撒き散らしながら体は空中にゆっくりと浮かび上がっていた。意識は一瞬で刈り取られ目の前は真っ暗になり受身を取ることでもできずに地面に倒れた。

倒れた亮梧を見ていたのは三鬚であった。

あの炎を全身に纏ったのに体はどこも焼けていなかった。無傷のまま寂しそうな目つきでびくびくと微かに指先を動かす亮梧を見つめていた。

「悪いな…嘘ついてたよ…実はな…俺も紋様師なんだよ…」

聞こえたかどうかは分からない。しかし独り言のように亮梧に話しかけていた。

## 48話

三觜が識那の元へと向かうと、命に別状はなく無傷の状態だったのでほっとした。

気絶しているだけだと思つと、頬を何度も叩いた。

「おい…起きろ…ほら…おい…」

四度目の平手打ちで識那は大声を上げながら目覚める。

「痛いわ！この馬鹿！」

起き上がつて抗議するが三觜はいつもの識那かどうか判断しかねたので冷静に対処した。

「洗脳とかされてないよな…」

あちこちから識那の様子を確認する。

「ふざけないでよ。あんたにこれ以上叩かれたら洗脳以上に頭がおかしくなるわよ」

「そうかい…話せる元気があれば大丈夫だな…ほら…行くぞ…」

手を差し伸べてベッドから降ろそうとした。するとそんな些細な行為だったのだが識那は何故かどきどきしてしまった。

二人は歩いて部屋を出ると、そこには亮梧が未だに無様な姿で転

がっていた。

「まさか…亮梧を…倒したの？」

「ん…まあな…」

自慢することではなかったのでさらっと話をしたのだが、識那はただ驚くだけだった。

「ちょ…どうやって倒したのよ？」

質問攻めをされるのは分かっていたが、それよりも重要なことがあったので三觜は識那の質問には答えず話題を急に切り替えた。

「じいつ…どうしたらいいと思う？」

「え？」

「このままだとお前をしつこく付けねらう可能性がある。殺しておくのが得策かもしれないが…お前の意見も聞きたくてな…」

「あんた仲間殺されたんでしょ。よく衝動的に殺さなかったわね…」

「まあ…いろいろとな…」

はぐらかすように言葉を濁して本題に戻ると、識那はやさしく話した。

「ほっといてもいいわ…」

命を狙われた人間をあつさりと許してしまった。だから三觜は再度確認をする。

「いいのか？これはお前の人生に大きく左右するかもしれないんだぞ？」

「大丈夫よ…また狙ってくるかもしれないけど…三觜がどうにかしてくれるんでしょ？」

初めて名前で呼ばれたことに抵抗感もあるが、それ以上に頼られたことに対して疑問が浮かぶ。

「はあ？ちよつと…待てよ…正直こんな厄介ごとはもう御免だ。それにお前の依頼はそれなりに果たしたつもりだがな？だから引き取り先を探してやるからそれで納得しろ…」

そんな営業上の話をしたので識那は怒った。

「そんなの駄目に決まってるでしょ！私は今日から三觜の家に住むんだから」

「え？」

「だって、世界で一番安全な所でしょ？」

何から何まで勝手な話で、三觜の意見など聞き入れるような気はなかった。しかし長話をここでしている時間はないと思った。

「無茶言っつな…っていつか…さっさとここ出るぞ。亮梧が目覚めたら面倒なことになる」

「あつそ…」

受け流すような形になってしまったが、今はここから一刻も早く立ち去る事が大事だったので識那も渋々従った。

先ほどまで様々な音が響き渡っていた時計塔も今では二人の走る靴音しかない。十五階の階段を駆け下りると入り口付近にたどり着いた。しかしすぐに出る訳にはいかない。

狙撃主が狙っている可能性が十分考えられるからだ。従っていた亮梧が倒されたとしてもそんなことを彼らは知らない。だから彼らは自らの意思で狙ってくるだろうと思った。

二人は入り口の前に立つ事をしないで壁に背を向けて話し合った。

「ここをすぐ出れば狙撃されるかもしれない…流石に俺もお前を庇いながら銃弾をかいくぐるのは難しい…」

「なら、どうするの?」

「俺が囿になっている間に向こうのビルの中に隠れる」

指差したのは時計塔から程近いビルの隙間である。狙撃するのが不可能な場所ではあるので三觜はそのように提案した。すると識那は迷った。

「三觜は…大丈夫なの?だって…」

「心配するな…さっきだって同じことをやってのけたからな…いい

か…合図を出したらすぐに飛び出せ。絶対に躊躇したりするな。ビルの間を目指して全力で走るんだ。分かったな？」

「う…うん…」

不安そうな表情を浮かべたが、それしか方法はないとも思ったので覚悟を決めた。それから三觜は相手にばれないように入り口にあまり近づかないで外の様子をちらちらと伺いながら飛び出す機会を整えた。

恐ろしいほど静まり返っている外の気配を不気味にも感じたが、その正体はすぐに分かった。決意して飛び出したその先には見たことのないような光景が広がっていた。それは死体の山である。十数人…全員が手に銃を握って無残な格好で死んでいた。

「こいつは…」

どれもこれもビルの上から落ちたのだろう。潰れた死体ばかりでそれ以外の形で死んでいる者はいなかった。手にしていた銃も衝撃で壊れていた。

時計塔を取り囲むように散らばる死体は、どのようにして出来上がったのか理解に苦しむ。しばらく呆然としているとふと我に返り今すべきことを思い出す。

ここから離れなくては…

三觜は些細な殺気も全く感じなかったので識那を誘導しようと思つた。しかしこのような惨劇を見せられるはずもなく訳を話すと目を瞑らせて手を繋いで歩かせた。そしてそのまま二人は街の中を一



気に駆け抜け三輩の家へと向かった。

## 49話

夜明けの太陽を背中に浴びながら二人は歩いていた。三觜は見るからにぼろぼろであったが、最後まで気を抜く事はしない。

二人に会話らしい会話はなかったが、識那は聞きたかった。

「あのさ…正直に教えてよ」

「ああ？」

「三觜は…紋様師なんでしょ？分からない振りをして隠そうとしてたけど…そうなんでしょ？」

流石にここまでできたなら隠す事も難しく、三觜は素直に答えた。すると識那はそれといって驚いた様子を見せるわけでもなかった。

「ふーん…私の思っていた違和感が外れなくてほっとしてるわ…」

「違和感？それもお前の能力のせいってことか？」

「三觜は殺気に敏感だけど、私は紋様師の気配に敏感なの…だからいろんなものも自然と見えるわ…でもね相手の力が強力過ぎたりすると気分も悪くなったりするから考えものよ。便利だともあまり思わないわ」

透明人間がいたあの時も自分が感じなかった気配をいち早く感じ取っていたと思いついて返していた。そして識那が立て続けに質問をしようとするとその前に三觜が口を開いた。

「まあ…その…俺の家も紋様師の家系らしいが…亮梧のような派手な能力もなければお前のような役に立つものもないんだ…だから爺さんは能力のことはない物として扱えと何度も俺に話したよ…しかし紋様師ということを誰かに知られれば襲われる危険も伴う。だから自らの身を護るためにも、精神と肉体を徹底的に鍛え極限の自然の状態に近づけることを目指すように鍛えられた…常に五感を集中させられるようにな…」

五感を常に集中という話を聞いただけで相当体に負担が掛かるのが分かる。人間が気を休める事をしないで四六時中集中していたらおかしくなってしまうのは明白である。

「それが無理なのは普通に考えても分かるだろ？流石に意識しないでその状態を常に維持するは無理だったよ…だから…どうにか殺気にだけは敏感に反応できるようにしたんだ…そのせいもあって俺はその部分が特化したっていうのもある」

三鬚は祖父と過ごした日々を思い返し、辛かったことの方ばかりが頭の中に浮かんでいた。その話を聞いて識那は三鬚の境遇は自分以上だとも感じ同情してしまった。

「それだけでも凄いいけど…今までのことを考えると納得だわ。あんたはあらゆる殺気に反応し、まるで能力に関係なく目の前の存在を撃破していた…でも、そうすることで隙を生まないように…っていうお爺さんの配慮なのかもしれないわね」

フォローするわけではないが、自然とそういう形になった。すると三鬚も同意見だったらしく否定することはなかった。

「…今思うとそうなるかもしれないな…だが…俺の能力は自らを鍛えなければ全く意味のないものだから生き抜くためには必然なんだろう…」

「あんたの能力って…」

「能力ってほどじゃない…分かりやすく話せば敵の能力の無効化だ…いや…干渉を受けないって言った方がいいかもな。そのお陰で敵の出した結界の影響を受けなければ、亮梧の炎だって無力化できる…しかしだ…それだけなんだ…干渉を受けなかっただけで反撃の力はないもない。もしも相手が拳銃を握っていたらどうなる？ナイフでも日本刀でもいい…相手が凶器を持ち大人数で押しかけたら俺に防ぐ術があると思うか？無理なんだよ…紋様師相手ならそれなりの対応ができるかもしれないが、普通の人間の殺傷能力のある攻撃には無に等しい…だからそんな能力を胸を張って公言できるはずもない…」

「普段は自信満々なのに意外と謙虚なのね…」

「別に…俺がそれが普通だと考えているだけだ…」

「それに加えて古風で頑固…現代人にはいない貴重な人間ね。正に武士道…」

「ふざけてんのか？」

「いいじゃない…あんたの持ち味なんだからさ」

「くっ…」

それから家路に着くと識那は疲れがどつと出たのか、布団で寝られることを嬉しく思いながらすぐに寢床に着いた。

家に着いてからも質問攻めに会うことを覚悟していただけにすんなり寝てくれたのはありがたかった。

三鬚はというと目が冴えて寝られなかった。痛みもあるのだが、それよりも先ほどの光景が焼きついていて離れない。

何故、俺を狙っていた人間が全て死んでいた？しかも取り囲むように配置された人間を全員殺すのは無理なんじゃないか？誰かが落とされるのを見たら逃げるよな…まさか十数人で同時に落とした？無理だろう…

いろんなことを考えてみたが良い考えも浮かばず、これからどうしたらいいかを考えようと思った。すると三鬚が帰ったことを知っていたかのように電話が鳴る。

太郎か？

受話器をすぐに取りると予想は当たった。

「太郎っす…どうでしたか？無事に終わりましたか？」

「随分とタイミングがいいんだな…まあな…何とか終わったが歯切れの悪い感じだ」

「ほう…それは興味深いっすね…どうしてそんな感じなんっすか？」

「別に…お前に話す義理もないだろ？お前はお前の仕事をしてればいいんだからよ。っていうか…お前のくれた住処の情報滅茶苦茶だったじゃないかよ！お陰でこっちは散々だったんだぞ…」

思い出して怒り心頭といった様子だった。しかしそんな怒りも一瞬で引いてしまうような発言を太郎はした。

「ふーん…ひよっとして時計塔の周りで大量の死体を目の当たりにしたとか？」

太郎の口調がいつもの口調とは違い全く別人のものに変化した。それはいつものような軽いノリなどではなく重圧感を感じてしまうような重苦しい雰囲気を持っていた。それに加えて、その場で見てきたようなことを発言されたから三鬚は持っていた受話器を思わずぎゅっと力強く握り締めた。

「おま…」

「鈍いねえ…三觜…最初から私は何でも知ってるんだよ？」

「ど…どういうことだ！貴様！」

明らかに別人だと思った三觜の口調は警戒心からか自然と荒くなっていた。

「太郎なんてダサイ名前今時存在するとも思うのかい？私は最初から君らの仲間なんかじゃないんだよ…電話でしかやりとりしない、表に決して出ない…誰も私の存在を知らないんだよ」

「ちよつと待て！和人は知っているはずだ。お前を！」

「そんなことぐらい…会うときに替え玉でも使えばどうとでもなる。それに…当の本人は死んでしまったのだから今となってはそれも意味はない…どうだい？面白かったら？私の情報でかなり踊らされてしまったんだからさ…しかしだ…何事も経験だ。君も当たり前的情報を鵜呑みにして当たり前前の展開を手に入れるよりは、あり得ない展開を目の当たりにした方が成長するってもんだよ…」

三觜はビルの偽情報と亮梧が待ち伏せしていたことがここで理解できた。

「三觜…君は全く面白い存在だったよ。その類稀な能力でいろんなことを解決し、そして遂に最強とまで言われる紋様師と交わるまでに至ったのだから…」

「くっ…お前は誰なんだ？目的は何だ？俺の組織を最初からぶち壊

すために現れたのか？」

「違う違う…君には成長の手助けをしたかった…そして亮梧と真剣にぶつかりあつてほしかったんだよ。紋様師の能力というのは亮梧ではないが私にとつても永遠のテーマなんだよ。特に異質な君には大注目つてことだよ。熱烈なファンとでも言つたほうがいいかい。いずれにしても紋様師の能力というのは魅力的な題材だ…人の真理に近づけるかもしれないしね。でも亮梧は馬鹿だ。自己顕示欲を抑えられず、ただ単純に力を欲するだけで自分を見失つていたよ。同胞の卯之助も神楽も最後まで駒扱い…そして拳句の果てに独学の素人知識で識那まで解体しようとしていたんだからね。いろんな意味で三觜があいつを止めてくれて助かつたよ…」

「お前…どこまで入り込んでいるんだ？」

「おいおい…あの時だつて側にいたじゃないか…ああ…でも私は透明だつたからね。分からなかつたか…」

「まさか…あの透明人間が…」

「そうだよ。健次郎なんてまたまたダサイ名前だけどね、私はあつち側の人間でもあつたんだ。しかし三觜には直接対決で二度もやられたからね。まいったよ…まあ、私も本気ではないけど、三觜にしても亮梧にしてもここで殺す訳にもいかないからね。運が良かったってことで…」

「本気なら俺を殺せたとも言つのか？」

「当然だよ。複数紋様を持つているのは識那だけじゃないんだ。私が見えるのも狙撃主を全員一瞬で殺せるのもこの能力がある



からだ：私が一番興味を持ったのは三觜：君の能力だ。君は紋様師でありながら自らの能力を出す事をなかなかしてくれない：これは非常に困ったよ。だから識那をエサに亮梧を引き寄せて直接対決をしてみようことにした。そうすれば君は能力を出さざるを得ない。そう予想してね：それで最後の最後にようやく使ってくれたみたいだ：長かったよ…」

「俺の能力が何かを知ってる口ぶりだな…」

「幻の神の紋様とも呼ばれる神紋：それを体に持つのが君だ。これは表皮には紋様が現れない。体内に存在するらしいから亮梧は君を紋様師と見抜けなかった。そうだろ？そしてその能力は誰も知らない：伝説みたいな確証の存在しないものだからね。しかし私の打ち立てた仮説の証明に繋がった。神紋を持つ者はいたんだよ。君の能力は紋様師の能力を解体する能力らしいな。亮梧の炎を至近距離でしかも無傷で受け止められるのは力では無理。それを受け流すか完全に消すか：どちらにしても今までの能力にはない代物だよ。側にいて見る事も可能だったけど巻き込まれるのも嫌だから、高性能のカメラで全てを録画しておいたんだけどね：こころ辺が太郎の能力って所かな？ははは…」

「識那をどうしよってんだ？亮梧もよ？お前はそのままあっさりと引き下がる奴じゃないのは会話してれば分かる：姿を見せて堂々とって奴じゃないってこともな…」

「そこまで分かっているなら結構：でも心配しないでくれよ。君らにはすぐに関わることはしないよ。私も今日の出来事を生かして次のステップに進まないかね：神紋を目の当たりに出来たことは想像以上に興奮したよ」

「いずれはつてことか…」

「そうなるかもね…そうそう…亮梧のことは心配しなくていいよ。復讐されるとか、付きまとわれるとか…君が悩んで生かしたあの後、さくつと殺しといたから。今朝の朝刊…ああ…間に合わないか…明日の死亡記事見てね。新たな猟奇殺人事件勃発って見出しで出るかもしれないから。猟奇殺人起こした本人が同じ形で記事になるってのも皮肉な話だけどね…」

電話の主は自慢をするわけでもなく当たり前のように話していた。しかしそれがかえって不気味さを感じさせもした。

「そうだ。一つ分からないことがあるんだよね。君はどうしてそこまで紋様師であることを隠したんだい？同じ組織の人間にすらその話をしたことがないじゃないか…神紋のことも知っていたんだろ？そこまで都合の悪いことだったのかい？」

「それを俺が話すと思うのか？」

「まあ…そんな風に返されるとも思ったけど…いいさ…それじゃあ、しばらくお別れとなるけど識那のことは頼んだよ…私と同じ境遇の人間だ。しっかり守ってくれよ。亮梧のような人間はまだまだ山のようにいる。しかし君の能力を振るえばそんな輩も一蹴できるはずだから存分に使うがいいさ…はは…」

「おい…最後ぐらい名乗ったらどうなんだ？」

不完全燃焼な気分なのは当然だが、最後まで名乗らず終わってしまっただけはもつと気になってしまう。だから期待も込めてそんなことを口にしたが、相手はそれに応じなかった。

「いずれは出会う…いや…それ以前に君たちが探し当てるかもしれない。だからこそ、ここで名乗っては面白くない。謎を残したまま消えるのも一興だ…追いかける方が意欲が湧いて生きている実感もある…目標ってのは怨みでもいいから必要だろ？」

意味深な言葉を並べるとそのまま別れも告げずに無造作に電話を切った。

「くそつったれが！」

完全に見下され舐められた三觜は叩きつけるように受話器を置いた。しかしそれだけのことを言える実力があるというのも口調からはつきりと分かる。更に加えるなら、識那が一番最初に透明のあいっに出会った時に失神しているということだ。

相手の能力が大きければ大きいほどその気配に押されて気分が悪くなると話してただけに、識那をあつさり失神させてしまう相手の力の大きさが計り知れなかった。

電話の主の考えが全く分からなかった。自分の能力を分析することと亮梧やら識那を使い動いていたなど…

受話器を置いたまましばらく動けなかった。そこでいるんなことを考えていた。

紋様師は確かに人という生き物に付加価値を与えられた存在である。しかし昔はそんなことは深く考えない。その力を民のために使い、家を守るために使っていたのだ。

鵜家にも古くからその力が備わっていた。そしてその力を振るつたのは同業者の制裁のためであった。無秩序に力を利用し悪行に手を染める者を裏で裁いていたのだ。

誰も能力で殺す事ができない。

それは最強の盾と異名を取るほどであったが、その全貌を晒すことを一家は嫌い風潮を受け継いだ。そして現在に至るのだが、能力の干渉を受けないというのだけでは何にもならないと体術を徹底的に磨き上げたのだ。最強の矛を自ら手に入れ、最強の盾を能力として持つ。そんな理想の姿を築き上げた時、鵜家は他家とは次元の違う強さになってしまったのだ。

祖父は幼い三觜に繰り返し何度も話した。

「能力のことは忘れる…こんなものに頼ったら駄目だ。我々の能力など一般人には関係のないものだからな。しかしだ…能力のことを知り、襲い掛かる人間もいる。その時に…不意を突かれて物理的な攻撃をされてみる。銃弾で打ち抜かれ…刀で、ナイフで切り裂かれ…体術が未熟ならそこで肉体を破壊されて全てが終わる。だからだ…他者を圧倒できるように五感を鍛える。常に襲われることを想定しろ。自然体でもあらゆる攻撃に反応できる術を見つけて」

幼少の記憶が蘇る。

三觜はそのままゆっくりと廊下を歩くと、寝ている識那の所まで行きその寝顔を見た。

憑き物が落ちたかのように全身の力が抜けて、心から休息しているような感じであった。それを見て三觜は話す気などないのに、い

ろんなことに振り回される人間を見て自然と呟いていた。

「紋様師…人外の能力？…くっただらねえ…」

全ての紋様師を嫌うかのようにそんな発言をし、そのまま自分の部屋に入った。

それから数時間後の昼。

識那は目覚めて家の中をうろろろしていた。その時視界に飛び込んだあの破られた窓はガムテープで補修されていた。しかし隙間風が入り込んできて識那は思わず身震いした。

三觜を探して数分経つのだが、なかなか見つからない。無駄に広い屋敷に嫌気がさしていた。

それからしばらくして道場の扉を開くと、そこに三觜はいた。

目を瞑り、正座をして微動だにしなかった。識那がそこに入り込んだことも知っていたが反応は見せない。

「ここにいたのね…ねえ…お腹空いたんだけど…」

数時間前のことなどすっかり忘れてしまったようなことを話すと、三觜に迫った。三觜は集中して雑念を払おうとした。

自分はまだ弱い…亮梧との最後の局面で能力を使ってしまうとは…

もしもあそこで使わなかったら後の状況も変わったかもしれない

の…

考えなくてもいいようなことが浮かび上がっていた。するとそんなことは関係ないとばかりに識那が服を引っ張った。

「お腹空いたって言うてるでしょ！それに歯ブラシ。タオル…新しいのどこにあるのよ！本当はシャワーだって浴びたいんだからあ…」

すっかり居候の気分丸出しで生活感の溢れる会話を次々に切り出した。それには流石の三觜も集中することもできずに渋々立ち上がった。

「お前…いつもまでいる気だよ…」

廊下を歩きながら話した。

「はあ？ずっとに決まってるでしょ…！」

三觜は頭を抱えたまましばらく硬直した。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5670s/>

---

紋様師

2011年6月29日08時26分発行